

横田3号遺跡・市地遺跡発掘調査報告書

-龍王小学校新設事業-

横田3号遺跡・市地遺跡発掘調査報告書

－龍王小学校新設事業－

2017

東広島市教育委員会



横田 3 号遺跡完掘遠景空中写真（南東から）

卷頭図版2



横田3号遺跡出土陶磁器類1



横田3号遺跡出土陶磁器類2



市地遺跡完掘遠景空中写真（北西から）

はしがき

広島県のほぼ中央に位置する東広島市は、「未来にはばたく国際学術研究都市とともに育み、人が輝くまちー」を理念とし、第一に人が集い、むすびつき、輝くまち、第二に安全・安心な暮らしが確保され、快適に暮らせるまち、第三に知的資源や地域特性を活かした、活力あるまちを目指として掲げ、その施策の中で住みよい都市空間の形成を目指しているところです。現在少子化が進む中、人口増加は続いているものの、少子化の影響もあり市全体では減少傾向にあります。市域の中心部では、急増する児童生徒数に対応するため、仮設教室の建設がされるのに対し、周辺地域では、児童数が減少を続け複式学級を編成せざるを得ない状況にあるなど、中心部と周辺部の児童生徒数の格差が大きくなっています。これにより、学校施設の整備においては、各校区の状況や今後の見通しなどを踏まえた学校の適正配置や学級編成のあり方などを併せて進めているところです。

さて、このたび学校施設整備の問題を解決すべく新たに現寺西学校区内に、小学校を新設する計画があり、その予定地内から遺跡が発見されました。この発見により小学校建設に先立ち事前に発掘調査を実施いたしました。

今回の横田3号遺跡・市地遺跡の発掘調査では、中世から近世にかけての集落跡が確認され、土坑、井戸跡、溝状遺構など多くの遺構を検出することができました。遺物では、13世紀代から19世紀代の土師質土器や陶磁器などがみつかりました。また、調査地の周辺は、中世大内氏の家臣であると伝えられる市地氏の拠点であったとも言われています。このことにより当該地域が、中世から近世にかけての遺跡であることがわかりました。また、この遺跡周辺は、明治期になると基盤が整備され水田化された様相がこのたびの調査により窺い知ることができました。

これらの調査成果をまとめた本報告書は、当該地域における今後の調査研究に貴重な資料を提供してくれたものと言えます。

本報告書が、郷土の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、文化財に対する理解と関心をより一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施・報告書の刊行にあたり、関係各機関並びに地元関係者各位には、多大な御協力と御理解をいただきました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年6月

東広島市教育委員会
教育長 津森 肇

例　　言

1. 本書は、平成27（2015）年度に東広島市教育委員会が発掘調査を実施した横田3号遺跡・市地遺跡（東広島市西条町寺家）の発掘調査報告書である。
2. 東広島市長（学校教育学部教育総務課）の依頼により、発掘調査（現地作業）及び基礎整理と整理作業（報告書刊行）までの全てを東広島市教育委員会で実施した。
3. 発掘調査・基礎整理作業は、東広島市教育委員会の主査植田広と主事津田真琴、埋蔵文化財調査員吉田由弥、日浦裕子、盛菜つみが、整理作業（報告書刊行）は、植田、吉田、日浦、盛が行った。
4. 遺構の写真撮影・実測・製図・遺物の実測・製図は植田、津田、吉田、日浦、盛が、遺物の写真撮影は植田が行った。
5. 本書の執筆は、植田が（I、III、IV、V）を日浦が（II、遺物観察表）を執筆し、植田が編集した。
6. 測量用基準杭打設は株式会社グリーンコンサルに、空中写真撮影は株式会社四航コンサルタントに委託した。
7. 第1図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「安芸西条」、「清水原」、「白市」、「田万里市」を使用した。
8. 第2図は、東広島市発行の東広島市地形図「O-7、O-8」1/2,500を使用した。
9. 遺物実測図に付した遺物番号と写真図版に付した遺物番号は同一である。
10. 本書で使用した方位は、第1図が旧平面直角座標第Ⅲ系座標北で、他が世界測地系座標北（平面直角座標第Ⅲ系）である。
11. 調査で得られた遺物、図面、写真等の資料は、全て東広島市教育委員会で保管している。
12. 本書に使用した遺構の表示記号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物跡、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝状遺構、SX：性格不明遺構、P：ピット

横田3号遺跡・市地遺跡発掘調査報告書

目 次

I はじめに.....	1
II 位置と環境.....	2
III 調査の概要.....	6
IV 遺構と遺物.....	12
V まとめ.....	63
奥付・抄録	

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)	4
第2図 周辺地形図 (1:2,500)	7
第3図 横田3号遺跡A区遺構配置図 (1:200)	8
第4図 横田3号遺跡B区遺構配置図 (1:200)	9
第5図 市地遺跡遺構配置図 (1:200)	11
第6図 A-1区 SK1~4実測図 (1:30)	14
第7図 B区 SB1実測図 (1:30)	16
第8図 B区 SE1・2実測図 (1:30)	17
第9図 B区 SE3、P65実測図 (1:30)	19
第10図 B区 SE4・5実測図 (1:30)	20
第11図 B区 SE6~8実測図 (1:30)	22
第12図 B区 SE9・10実測図 (1:30)	24
第13図 B区 SK6~8・10・11実測図 (1:30)	27
第14図 B区 SK13~17実測図 (1:30)	29
第15図 B区 SK23・28実測図 (1:30)	31
第16図 B区 SK25・29、SX4実測図 (1:30)	33

第17図	B区 SK18・21・22・24・27・30・31実測図 (1:30)	35
第18図	B区 SK32～35・41～45実測図 (1:30)	37
第19図	B区 SK37・47・48・50実測図 (1:30)	39
第20図	B区 SD1、SX11実測図 (SD1-1:80、SX11-1:30)	41
第21図	出土遺物実測図1 (1:3)	43
第22図	出土遺物実測図2 (31～33-1:5、34～36-1:3)	44
第23図	出土遺物実測図3 (38・43・44-1:4、37・39～42・45・49・50-1:3)	45
第24図	出土遺物実測図4 (46～48-1:4、52～53-1:3、51-1:6)	46
第25図	出土遺物実測図5 (1:3)	47
第26図	出土遺物実測図6 (66・67-1:3、68～70・72-1:4)	48
第27図	出土遺物実測図7 (73・74・77-1:4、75・76～81-1:3)	49
第28図	出土遺物実測図8 (82・83・85～88-1:3、84-1:6)	50
第29図	出土遺物実測図9 (1:3)	51
第30図	SK1～6実測図 (1:30)	57
第31図	SD1・3・5・6実測図 (1:80)	59
第32図	出土遺物実測図 (1～13-1:3、14-1:2、15～26-2:3)	61

卷頭図版目次

卷頭図版1 横田3号遺跡完掘遠景空中写真（南東から）

卷頭図版2 横田3号遺跡出土陶磁器類1 横田3号遺跡出土陶磁器類2

卷頭図版3 市地遺跡完掘遠景空中写真（北西から）

図版目次

横田3号遺跡

- 図版1 a A区調査前風景（北西から）
- b B区調査前風景（南東から）

- 図版2 a A-1区完掘全景（北西から）
- b B区完掘全景1（北西から）
- c B区完掘全景2（南西から）

図版3 a A-1区 SK1 土層断面（南西から）

- b B区 SE1 完掘（南西から）
- c B区 SE2 土層断面（南から）
- d B区 SE2 石・木枠検出状況（南から）
- e B区 SE2 完掘（南から）
- f B区 SE3・SK19・P65 土層断面（南から）
- g B区 SE3 篦検出状況（南東から）
- h B区 SE3・SK19・P65 完掘（北西から）

- 図版4 a B区 SE1土層断面（北西から）
b B区 SE1完掘（南西から）
c B区 SE2土層断面（南から）
d B区 SE2石・木枠検出状況（南から）
e B区 SE2完掘（南から）
f B区 SE3・P65土層断面（南から）
g B区 SE3箋検出状況（南東から）
h B区 SE3・P65完掘（北西から）
- 図版5 a B区 SE4土層断面（南から）
b B区 SE4井戸枠検出状況1（南から）
c B区 SE4井戸枠検出状況2（東から）
d B区 SE5土層断面（東から）
e B区 SE5井戸枠・石検出状況（東から）
f B区 SE5断削完掘（北西から）
g B区 SE6土層断面（北東から）
h B区 SE6断削完掘（北東から）
- 図版6 a B区 SE7土層断面（北西から）
b B区 SE7完掘（東から）
c B区 SE8土層断面（南東から）
d B区 SE8完掘（南東から）
e B区 SE9土層断面（南西から）
f B区 SE9箋検出状況（南西から）
g B区 SE10土層断面（西から）
h B区 SE10完掘（西から）
- 図版7 a B区 SK6土層断面（西から）
b B区 SK6遺物出土状況（西から）
c B区 SK6完掘（西から）
d B区 SK8土塊検出状況（北西から）
e B区 SK8土層断面（北西から）
f B区 SK8完掘（北西から）
g B区 SK7土層断面（南西から）
h B区 SK7完掘（南西から）

- 図版8 a B区 SK10土層断面（北西から）
b B区 SK10完掘（北西から）
c B区 SK11土層断面（北西から）
d B区 SK11完掘（北西から）
e B区 SK13土層断面（北西から）
f B区 SK13完掘（北西から）
g B区 SK15土層断面（西から）
h B区 SK15完掘（西から）
- 図版9 a B区 SK14土層断面（南から）
b B区 SK14遺物出土状況（北から）
c B区 SK14完掘（北から）
d B区 SK16土層断面（南西から）
e B区 SK16石出土状況（南西から）
f B区 SK16完掘（西から）
g B区 SK17土層断面（西から）
h B区 SK17完掘（西から）
- 図版10 a B区 SK18土層断面（北西から）
b B区 SK18完掘（北西から）
c B区 SK21土層断面（南から）
d B区 SK21完掘（南から）
e B区 SK22土層断面（南東から）
f B区 SK22完掘（北西から）
g B区 SK24土層断面（南西から）
h B区 SK24完掘（南西から）
- 図版11 a B区 SK25・SX4土層断面（西から）
b B区 SK29土層断面（南東から）
c B区 SK25・SK29・SX4遺物出土状況（東から）
d B区 SK25・SK29・SX4完掘（東から）
e B区 SK23・SK28土層断面（南東から）
f B区 SK28柄杓・土器出土状況（南東から）
g B区 SK28箋検出状況（北西から）
h B区 SK23・SK28完掘（北西から）

図版12a	B区 SK27 土層断面（南西から）	図版20	出土遺物6
b	B区 SK27 完掘（南西から）	図版21	出土遺物7
c	B区 SK30・SK31 土層断面（南から）	図版22	出土遺物8
d	B区 SK30・SK31 完掘（北から）	図版23	出土遺物9
e	B区 SK32・SK33 土層断面（西から）		
f	B区 SK32・SK33 完掘（東から）		
g	B区 SK34・SK35 土層断面（南から）		
h	B区 SK34・SK35 完掘（北から）		
図版13a	B区 SK37 土層断面（西から）		
b	B区 SK37 完掘（西から）		
c	B区 SK42・SK43 土層断面（南西から）		
d	B区 SK42・SK43・SK45 完掘 (南西から)		
e	B区 SK44 土層断面（南から）		
f	B区 SK44 完掘（南から）		
g	B区 SK48 土層断面（南から）		
h	B区 SK48 完掘（南から）		
図版14a	B区 SK47 土層断面（南から）		
b	B区 SK47 土器出土状況（南から）		
c	B区 SK47 完掘（南から）		
d	B区 SK41 完掘（北西から）		
e	B区 SK50 土層断面（北東から）		
f	B区 SK50 完掘（北東から）		
g	B区 SD1 完掘（北西から）		
h	B区 SX11 遺物出土状況（北東から）		
図版15	出土遺物1		
図版16	出土遺物2		
図版17	出土遺物3		
図版18	出土遺物4		
図版19	出土遺物5		
		図版20	出土遺物6
		図版21	出土遺物7
		図版22	出土遺物8
		図版23	出土遺物9
		市地遺跡	
		図版24a	調査前風景（北西から）
		b	完掘全景空中写真（北西から）
		図版25a	SK1 土層断面（北西から）
		b	SK1 完掘（北西から）
		c	SK3 土層断面（北西から）
		d	SK3 完掘（北西から）
		e	SK4 土層断面（北西から）
		f	SK4 完掘（北西から）
		g	SK5 土層断面（北西から）
		h	SK5 完掘（北西から）
		図版26a	SK2 土層断面（南西から）
		b	SK2 遺物出土状況（南西から）
		c	SK2 完掘（北西から）
		d	SK6 土層断面（南西から）
		e	SK6 石出土状況（南西から）
		f	SK6 完掘（南西から）
		g	SD1 土層断面（南から）
		h	SD3 土層断面（南東から）
		図版27a	SD5 土層断面（北から）
		b	SD6 土層断面（南東から）
		c	作業風景1
		d	作業風景2
		e	SD1・3・5・6 完掘（北西から）
		図版28	出土遺物

表目次

第1表	横田3号遺跡出土遺物観察表	52
第2表	市地遺跡出土遺物観察表	62
第3表	市地遺跡出土錢貨観察表	62

I はじめに

横田3号遺跡及び市地遺跡（東広島市西条町寺家）は、龍王小学校新設事業に係わり発掘調査を実施したものである。

平成25（2013）年9月17日付けて、東広島市教育委員会学校教育部教育総務課（以下、「教育総務課」という。）から文化財等の有無及び取扱いについて、東広島市教育委員会生涯学習部文化課（以下、「文化課」という。）に協議があった。文化課は、同年9月24日付けて、分布調査を実施した結果、開発計画地の一部で遺跡の有無及び範囲を確認するための試掘調査が必要である旨を回答した。その後、教育総務課から平成26（2014）年10月10日付けて協議範囲の変更があった。文化課は、同年10月20日付けて分布調査の結果、計画地全域で遺跡の有無及び範囲を確認するための試掘調査が必要である旨を回答した。教育総務課は、同年10月22日付けて、試掘調査を文化課に依頼した。文化課は同年11月28日付けて、試掘調査を実施した結果、計画地の一部で、横田3号遺跡（約1,500m²）と市地遺跡（約500m²）を確認した旨を教育総務課に回答した。教育総務課から、横田3号遺跡（遺跡範囲約1,500m²の一部約1,080m²）及び市地遺跡（約500m²）について、平成27（2015）年7月21日付けて校舎の一部と下水道施設及び地下調整池等の工事を行うため、文化課に埋蔵文化財発掘の通知があった。文化課は、同年9月9日付けて、横田3号遺跡について埋蔵文化財の現状保存が困難なため、事前に発掘調査を実施する旨を教育総務課に回答した。教育総務課は、同年9月11日付けて、埋蔵文化財の発掘調査について文化課に依頼した。文化課は、同年9月17日付け東広教文第465号で、発掘調査を実施することを承諾する旨を回答した。また教育総務課は、市地遺跡（約500m²）について同年7月21日付けて、文化課は、同年12月10日付け東広教文第313号で、埋蔵文化財包蔵地における土木工事等については埋蔵文化財の現状保存が困難なため、事前に発掘調査を実施する旨を教育総務課に通知した。教育総務課は、同年12月15日付けて、埋蔵文化財の発掘調査を文化課に依頼した。これを受けて文化課は、同年12月21日付け東広教文第654号で、発掘調査を実施することを承諾する旨を教育総務課に回答した。

発掘調査（現地作業・基礎整理）は、横田3号遺跡を同年10月から平成28（2016）年2月まで、市地遺跡を同年1月から同年3月までの期間で実施し、整理作業及び報告書作成作業は、同年から平成29（2017）年に実施した。

本報告書は、以上のような経過を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。中世から近世研究の資料として利用するにとどまらず、当該地域の歴史の資料として、また埋蔵文化財に対する理解を深める資料として広く活用していただければ幸いである。

発掘調査にあたっては、東広島市教育委員会学校教育部教育総務課の御協力を得るとともに、地元の方々には調査をはじめとして多大なる御協力をいただいた。末筆ながら記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

横田3号遺跡及び市地遺跡は、東広島市西条町寺家字横田・市地に所在する遺跡である。所在地である東広島市は、広島県のほぼ中央に位置し、市域の西部を広島市と接する人口19万人の中核都市である。近年は広島大学を中心とした「未来にはばたく国際学術研究都市－ともに育み、人が輝くまち－」を都市像として掲げ、都市基盤整備・区画整備事業などとともに、遺跡西方にはJR寺家駅が開設されるなど、交通の要所としても関連開発が進展している。

市域の大部分は西条盆地と呼ばれる標高200～300mの低位丘陵及び平野が広がり、その周辺を標高約400～600mの山々が囲んでいる。

本遺跡は比高差のほとんどない平地に所在している。周辺には数多くの遺跡が確認されており、その立地は時代が下るにつれて徐々に標高を下げる傾向がみられる。

以下では、本遺跡周辺の遺跡の様相について概観する。

【旧石器時代・縄文時代】

この時代の遺跡の確認数は少ない。本遺跡周辺で五渠遺跡⁽¹⁾や鐘録原池遺跡⁽²⁾において旧石器や縄文土器が採集されているほか、市内では広島大学構内の西ガガラ遺跡⁽³⁾においてナイフ形石器などの石器類、後期旧石器時代と思われる住居跡や土坑が検出されている。

【弥生時代】

この時代の遺跡は多数確認されているが、前期の遺跡は少なく、中期後半以降のものが多くみられる。

前期では、团子遺跡⁽⁴⁾や諏訪神社南遺跡⁽⁵⁾において竪穴住居跡や溝状遺構などの集落跡が確認されている。そのほか、友松3号遺跡⁽⁶⁾では溝状遺構から、貞付谷遺跡⁽⁷⁾では土坑墓や貯蔵穴からそれぞれ多量の土器が検出されている。

中期では、集落跡として友松2号遺跡⁽⁸⁾や諏訪神社周辺遺跡⁽⁹⁾助平2号遺跡⁽¹⁰⁾が確認されている。墳墓としては、弥生中期後半～中期終末期の木棺墓3基と土坑墓2基が検出された藤が迫墳墓群⁽¹¹⁾がある。

後期では、横田1号遺跡⁽¹²⁾において後期から終末期にかけての集落跡が確認され、多量の土器とともに、竪穴住居跡から青銅製の再加工が施された細型銅剣の一部やガラス製管玉・小玉などが出土している。また、青谷1号遺跡⁽¹³⁾においては後期から終末期の環濠と考えられる溝が確認されており、同時期の土器が多量に出土している。そのほか、石佛遺跡⁽¹⁴⁾では後期前中葉の住居跡が13軒、貯蔵穴が19穴確認されている。墳墓としては、横田1号遺跡や助平1号遺跡から土坑墓が確認されているほか、狐が城遺跡⁽¹⁵⁾から箱式石棺墓・石蓋土坑墓・土坑墓など計28基の墳墓が尾根頂上に集中した状態で確認されている。

【古墳時代】

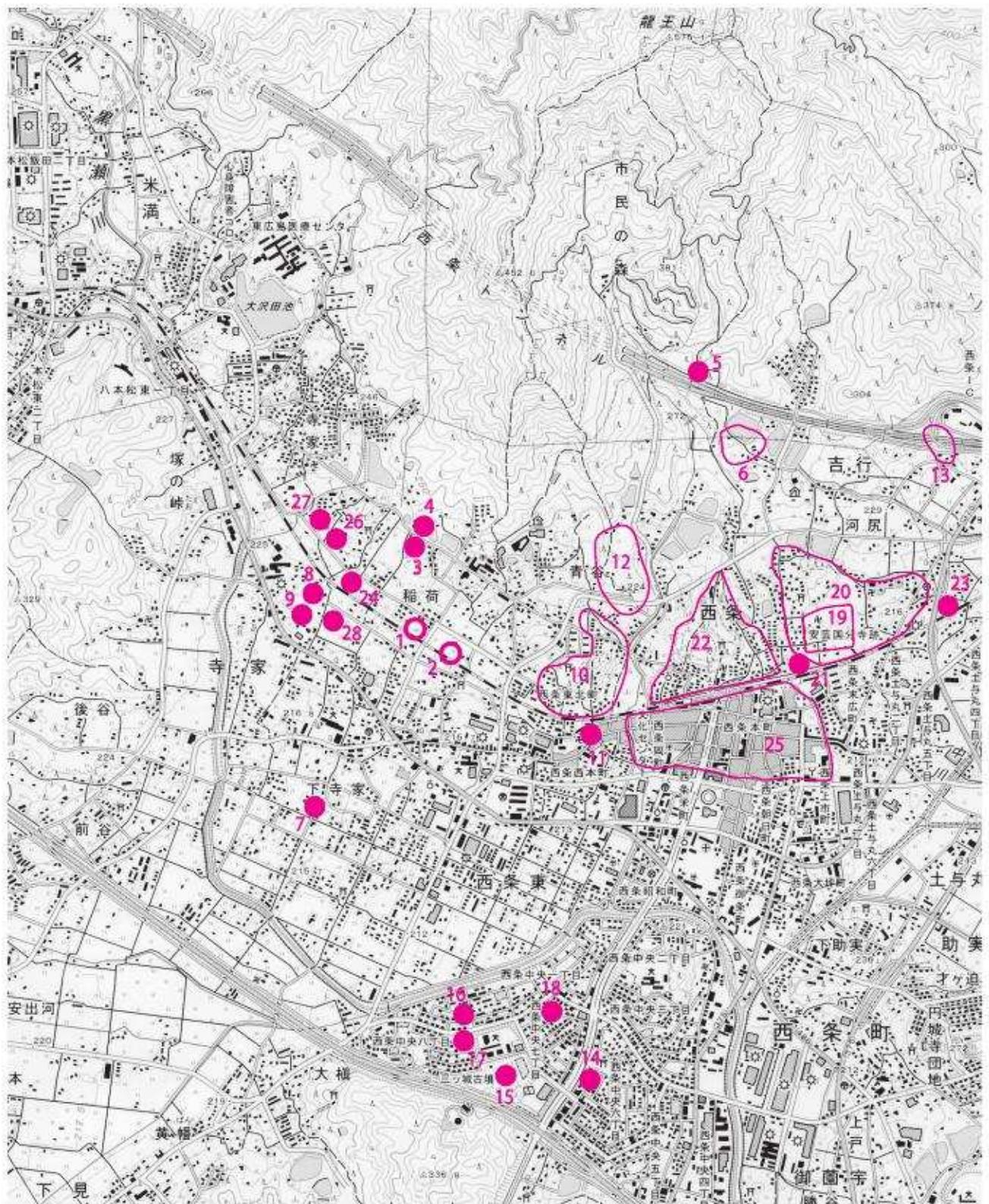
この時代の遺跡として、古墳では、5世紀前半に築造された県下最大規模の前方後円墳である三ツ城古墳⁽¹⁶⁾ や竪穴系横口式石室を内部主体とする助平古墳⁽¹⁷⁾、横穴式石室を内部主体とする藤が迫第2・3号古墳⁽¹⁸⁾ などが確認されている。集落跡としては、横田1号遺跡、友松3号遺跡、助平3号遺跡⁽¹⁹⁾ など多くの集落遺跡が確認されている。そのうち友松3号遺跡では竪穴住居跡が検出されているほか、横田1号遺跡、助平3号遺跡では土師器片や須恵器片などが多く出土している。

【古代以降】

律令時代、当地域は安芸国賀茂郡に属しており、安芸国分寺（現史跡安芸国分寺跡）⁽²⁰⁾ が建立された。その周辺には安芸国分寺周辺遺跡⁽²¹⁾ や聲門遺跡⁽²²⁾ などの集落跡が確認され、聲門遺跡では土器や瓦とともに人形木簡が出土している。そのほか、青谷1号遺跡では須恵器や円面硯、転用硯などが出でている。

中世の遺跡としては、城仏土居屋敷跡（八本松飯田）⁽²³⁾、狐が城跡⁽²⁴⁾ などの城館が多く確認されている。また、御建遺跡⁽²⁵⁾ では中世山陽道の一部と推定される道路遺構や馬小屋跡が検出されている。近年の調査では才免遺跡⁽²⁶⁾ において中世の信仰の痕跡である積石塚が検出され、鷺田遺跡⁽²⁷⁾ では、掘立柱建物跡が検出され、柱穴と考えられるピットから土師質土器の小皿が4枚出土している。湯谷迫3号遺跡⁽²⁸⁾ では土師質土器とともに陶磁器も出土している。

近世の遺跡としては、近世西国街道沿いに発展した宿場町である四日市遺跡⁽²⁹⁾ が挙げられる。建物跡や醸造遺構などが検出され、江戸時代から近代の陶磁器などが多く出土している。そのほか、中・近世の井戸跡などの土坑や溝状遺構が確認された福原2・3号遺跡や、掘立柱建物跡が検出された貞松遺跡⁽³⁰⁾ などの集落遺跡も確認されている。墳墓としては、横田1号遺跡において人骨が出土した近世墓が5基検出されている。



1. 横田3号遺跡 2. 市地遺跡 3. 横田1号遺跡 4. 才免遺跡 5. 五楽遺跡 6. 鐘鑄原池遺跡 7. 団子遺跡
 8. 友松2号遺跡 9. 友松3号遺跡 10. 諏訪神社南遺跡 11. 諏訪神社周辺遺跡 12. 青谷1号遺跡 13. 石佛遺跡
 14. 狐が城遺跡 15. 史跡三ッ城古墳 16. 助平古墳 17. 助平2号遺跡 18. 助平3号遺跡 19. 史跡安芸国分寺跡
 20. 安芸国分寺周辺遺跡 21. 聲門遺跡 22. 御建遺跡 23. 鶯田遺跡 24. 湯谷追3号遺跡 25. 四日市遺跡
 26. 福原2号遺跡 27. 福原3号遺跡 28. 貞松遺跡

第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

註

- (1) 佐伯博司編『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（V）』財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成2（1990）年
- (2) (1)と同じ。
- (3) 藤野次史編『広島大学東広島市キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室 平成16（2004）年
- (4) 中山学編『团子遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成16（2004）年
- (5) 石井隆博編『諏訪神社南遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成17（2005）年
- (6) 津田真琴編『友松2・3号遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成26（2014）年
- (7) 松井和幸編『金平山遺跡・貞付谷遺跡 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成4（1992）年
- (8) (6)と同じ。
- (9) 妹尾周三編『諏訪神社周辺遺跡発掘調査報告書』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成7（1995）年
- (10) 藤岡孝司編『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』東広島市教育委員会 平成5（1993）年
- (11) 潮見浩編『広島県文化財調査報告第9集』広島県教育委員会 昭和46（1971）年
- (12) 松尾祥子編『横田1号遺跡発掘調査報告書』大成エンジニアリング株式会社 平成24（2012）年
- (13) 石井隆博編『青谷1号遺跡発掘調査報告書』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成14（2002）年
- (14) (1)と同じ。
- (15) 植田千佳穂編『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（I）』財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 昭和58（1983）年
- (16) 石井隆博編『史跡三ツ城古墳発掘調査報告書』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成16（2004）年
- (17) 青山透編『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』東広島市教育委員会 平成4（1992）年
- (18) 潮見浩編『広島県文化財調査報告第9集』広島県教育委員会 昭和46（1971）年
- (19) 佐々木直彦編『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（II）』財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 平成5（1993）年
- (20) 中山学他編『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書I～IX』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成11～19（1999～2007）年
- (21) 植田広編『安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成21（2009）年
- (22) 植田広編『聲門遺跡・安芸国分寺周辺遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成27（2015）年
- (23) 恵谷泰典編『城伝土居敷跡発掘調査報告書』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成17（2005）年
- (24) (15)と同じ。
- (25) 植田広他編『御建遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成22・25（2010・2013）年
- (26) 植田広編『才免遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成29（2017）年
- (27) 石垣敏之編『鶯田遺跡』『東広島市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』東広島市教育委員会 平成29（2017）年
- (28) 石垣敏之編『湯谷追3号遺跡』『東広島市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』東広島市教育委員会 平成29（2017）年
- (29) 石垣敏之他編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成16～19（2004～2007）年
- (30) 石垣敏之編『貞松遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成21（2009）年

III 調査の概要

横田3号遺跡の発掘調査は、調査面積が約1,080m²である。試掘調査によって得られたデータ（遺構面までの深さ、堆積土・遺物包含層の状況、遺物の出土状況など）を基に、重機を使用して表土を掘削した。その後、測量用基準杭の打設作業により、グリッドを設定した。調査区は便宜上で、A区（A-1区、A-2区）、B区に分けて実施した。A-2区は、西側が既に後世による削平を受けており、遺構を検出することができなかつたことと、東側から検出した溝状遺構において床面から現代ガラス片や碍子片などが多量に出土したことから、近現代の耕作用の水路跡と考えられる。また、精査作業による遺構検出を実施し、検出した遺構は順次手作業による掘り下げを進めていった。各遺構の番号は、検出順にマーキングを行い、最終的に遺構と判断できなかつたものについては欠番として取り扱った。遺構の掘り下げは、半裁を行い土層の堆積状況を確認し記録をした後に、完掘を行い平面実測作業や平板による測量実測などを随時実施した。全ての記録完了後に、足場による完掘写真撮影及びリモコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

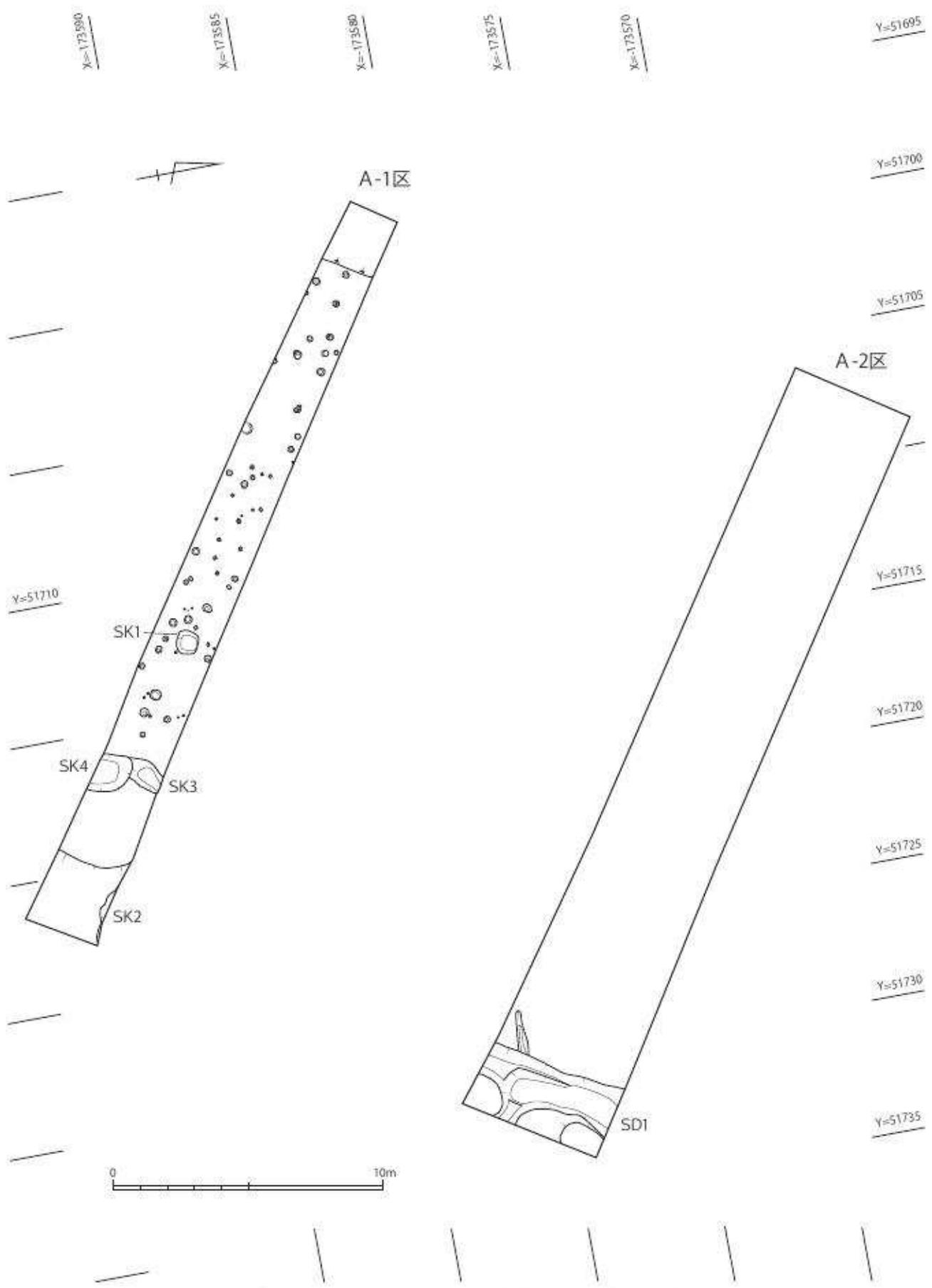
調査の結果、遺構は掘立柱建物跡、井戸、土坑、溝状遺構、性格不明遺構などを検出した。遺物は土師質土器、瓦質土器、陶磁器、鉄製品、金属製品、木製品、石製品などが出土した。このことから、時期を考えると、A-1区が中世頃、A-2区・B区が中近世～近現代に構築されたものと考えられる。

市地遺跡の発掘調査は、調査面積が約500m²である。試掘調査によって得られたデータ（遺構面までの深さ、堆積土・遺物包含層の状況、遺物の出土状況など）を基に、重機を使用して表土を掘削した。その後、測量用基準杭の打設作業により、グリッドを設定した。また、精査作業による遺構検出を実施し、検出した遺構は順次手作業による掘り下げを進めていった。各遺構の番号は、検出順にマーキングを行い、最終的に遺構と判断できなかつたものについては欠番として取り扱った。遺構の掘り下げは、半裁を行い土層の堆積状況を確認し記録をした後に、完掘を行い平面実測作業や平板による測量実測などを随時実施した。全ての記録完了後に、足場による完掘写真撮影及びリモコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。また、発掘調査後の基礎整理において、近現代の遺構は欠番としたため詳細な報告は行わない。

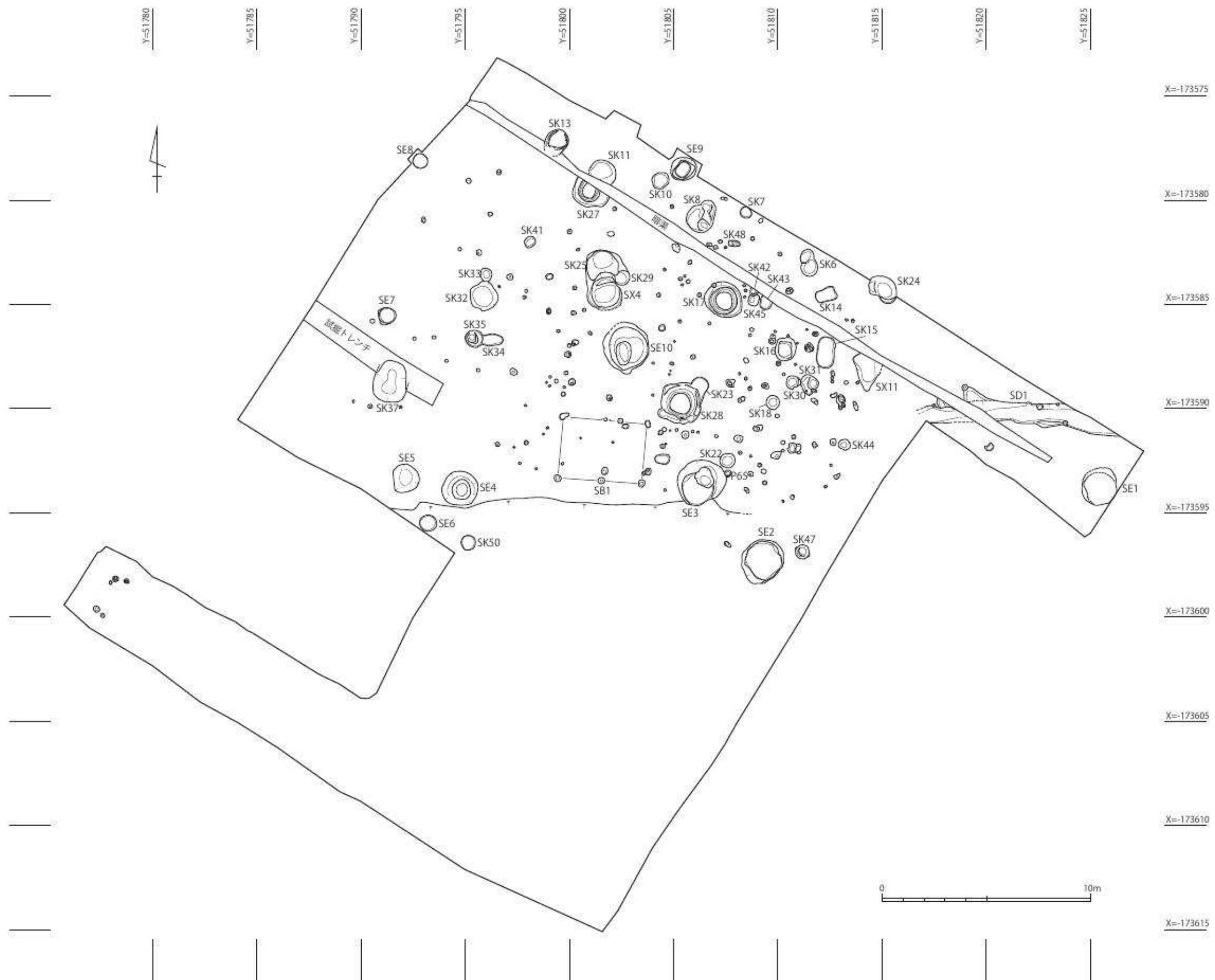
調査の結果、遺構は土坑、溝状遺構などを検出した。遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、石製品、古銭などが出土した。このことから、時期を考えると、中世頃に構築されたものと考えられる。



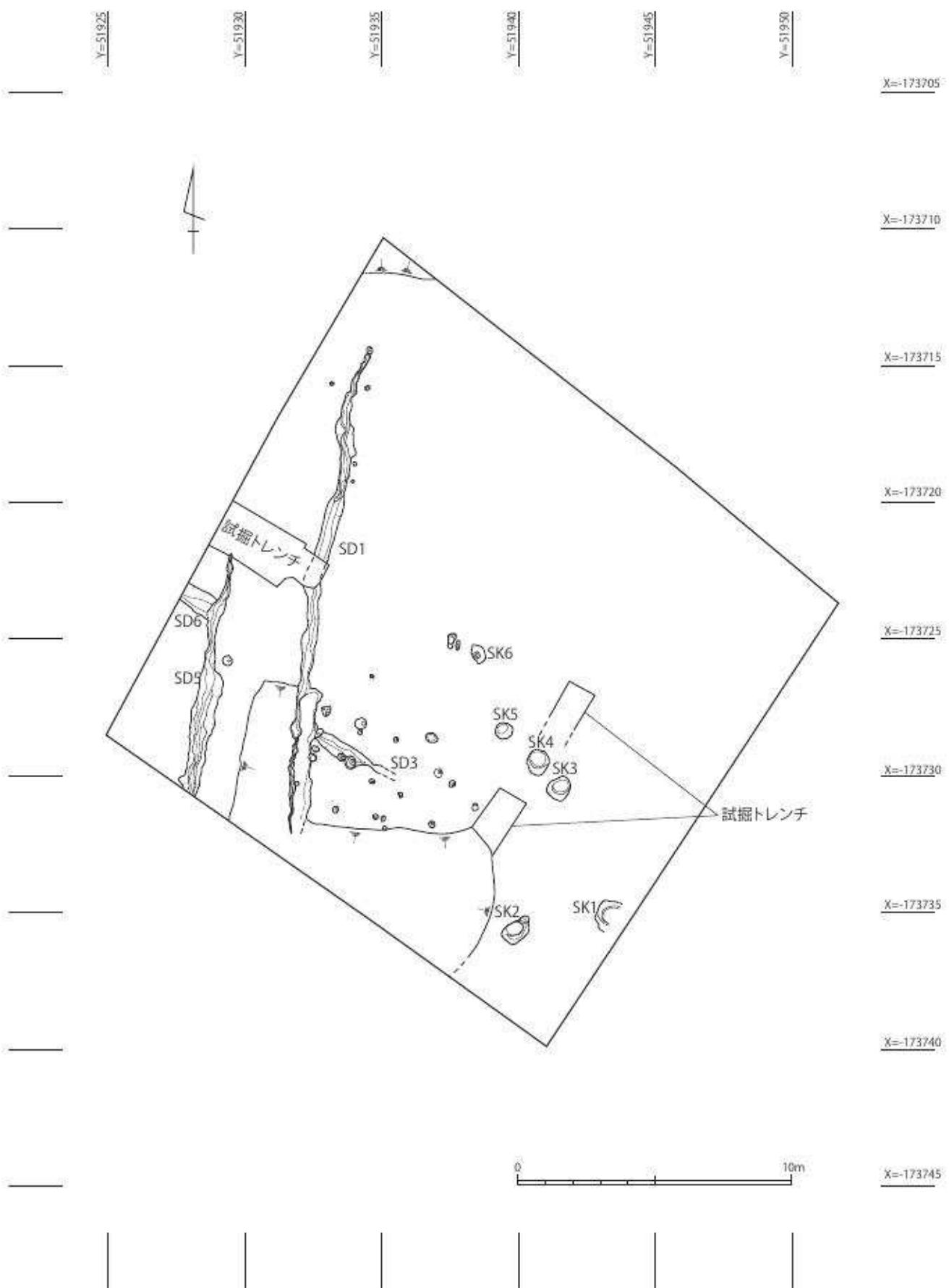
第2図 周辺遺跡分布図 (1:2,500)



第3図 横田3号遺跡A区遺構配置図 (1 : 200)



第4図 横田3号遺跡B区遺構配置図 (1 : 200)



第5図 市地遺跡遺構配置図 (1 : 200)

N 遺構と遺物

1. 横田3号遺跡A区の遺構と遺物

A区（A-1区、A-2区）では、A-1区で土坑SK1～4の4基、ピットを検出した。また、A-2区では、溝状遺構SD1の1条を検出した。なお、SD1については、近現代の用水路であることが確認できたため、詳細な報告は行わない。なお、SD1内より出土した遺物については、流れ込みと思われる近世陶磁器のみを抽出し、表土剥ぎ中に出土した遺物と合わせて報告した。

土坑

SK1（第6図、図版3）

SK1は、SK3の北西側約4.2mで検出した、平面形が不整な楕円形を呈する土坑である。規模は、長軸約0.91m、短軸約0.79m、深さ約0.18mを測る。壁の立ち上がりは逆「ハ」字形を呈する。埋土の堆積状況は、褐色粘質土と明褐色粘質土の混合土の1層がみられる。遺物は、図化不能な土師質土器などが出土した。

SK2（第6図、図版3）

SK2は、SK3の東側約4.4mで検出した、西側壁の一部のみで、ほとんどが調査区外に延びているものと考えられ、平面形は不明の土坑である。壁の立ち上がりは緩やかな逆「ハ」字形を呈する。規模は、残存長軸約2.26m、残存短軸約0.26m、深さ約0.25mを測る。埋土の堆積状況は、褐灰色粘質土の1層がみられる。遺物は、図化不能な土師質土器などが出土した。

SK3（第6・21図1～5、図版3・15）

SK3は、SK4と南側で接し、SK4に切られた状態で検出した、北東側は調査区外に延びるものと考えられる。平面形は、不整な長方形を呈する土坑である。壁の立ち上がりは逆「ハ」字形を呈する。規模は、残存長軸約1.49m、短軸約0.92m、深さ約0.06mを測る。埋土の堆積状況は、にぶい黄褐色粘質土の1層がみられる。遺物は、土師質土器が出土した。

出土遺物

1は、土師質土器の杯である。器壁が薄く、体部が外方に向けて直線的に開くものである。調整は、内外面ともに回転ナデで、底面は回転糸切り技法を施す。2は、土師質土器の杯である。器壁が薄く体部は外方に向けて直線的に開き、口縁端部を外反させる。調整は、内外面ともに回転ナデで、底面は回転糸切り技法を施す。3は、土師質土器の小皿である。器高が低いもので、体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部を外反させる。調整は、内外面ともに回転ナデで、底面は回転糸切り技法を施す。4は、土師質土器の小皿である。器高が低く体部は、やや内湾気味に厚ぼったく立ち上がるるものである。調整は、内外面ともに回転ナデで、底面は回転糸切り技法を施す。5は、土師質土器の小皿である。器高が

低く体部はやや内湾氣味に厚ぼったく立ち上がるるものである。調整は内外面ともに回転ナデで、底面には回転糸切り技法を施す。

SK4（第6・21図6～11、図版3・15）

SK4は、SK3と北側で接し、SK3を切った状態で検出した、南側は、調査区外に延びるものと考えられる。平面形は、不整な長方形を呈する土坑である。壁の立ち上がりは逆「ハ」字形を呈する。規模は、残存長軸1.24m、短軸約1.38m、深さ約0.11mを測る。埋土の堆積状況は、褐色粘質土と黒褐色粘質土の2層がみられる。遺物は、土師質土器が出土した。

出土遺物

6は、土師質土器の杯である。器高が深く口径と底径の差が大きいもので、口縁端部は丸くおさめる。調整は、内外面ともに回転ナデで、底部は回転糸切り技法を施す。7は、土師質土器の杯である。器高がやや深く口径と底径の差が大きいもので、口縁端部は丸くおさめるものである。調整は、内外面ともに回転ナデで、底部は回転糸切り技法を施す。8は、土師質土器の杯である。底部を欠失する。器高がやや深く口径と底径の差が大きいもので、口縁端部は丸くおさめるものである。調整は、内外面ともに回転ナデを施す。9は、土師質土器の皿である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部は回転糸切り技法を施す。器表面には、ススが若干付着する。10は、土師質土器の皿である。調整は、内外面ともに回転ナデで、底部は回転糸切り技法を施す。11は、土師質土器の小皿である。器高浅く口径と底径の差が小さなもので、口縁端部は尖らせるものである。調整は内外面ともに回転ナデで、底部は回転糸切り技法を施す。

ピット（第21図12～13、図版15）

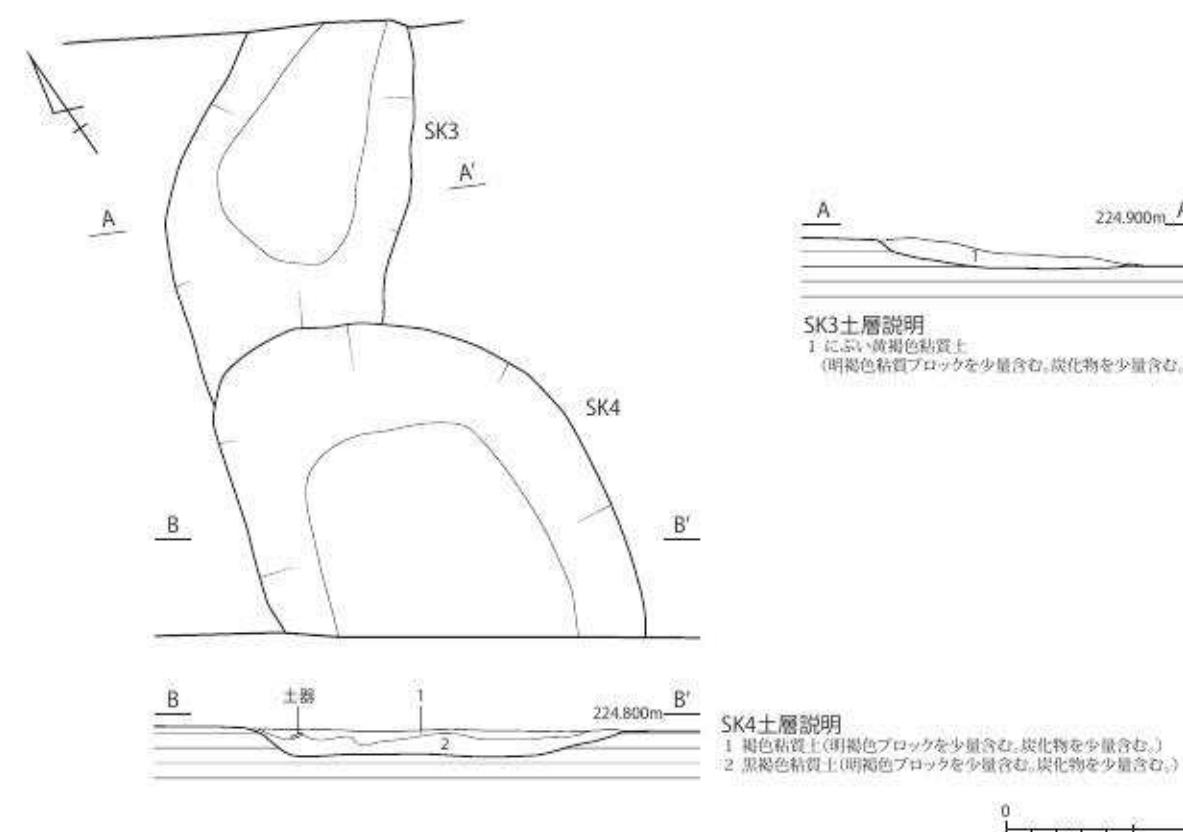
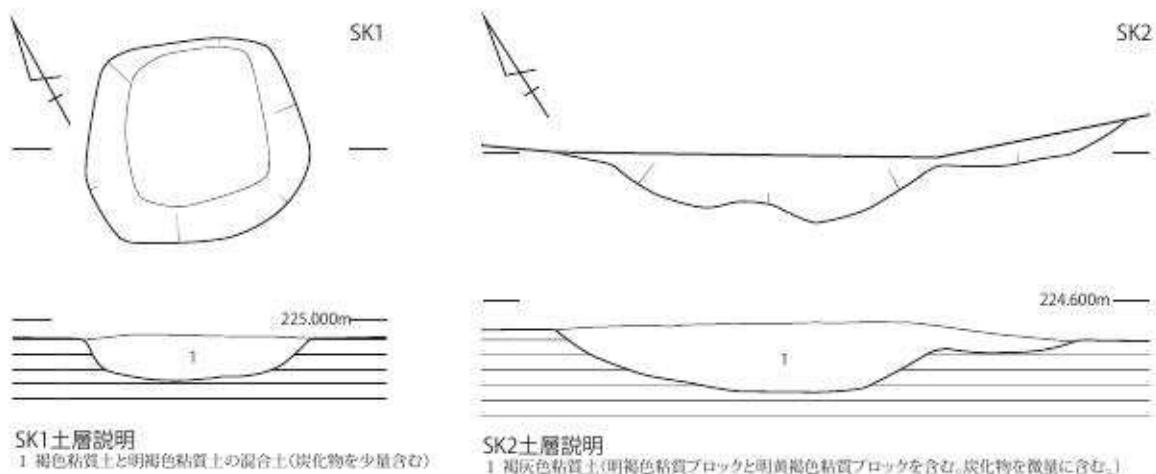
A-1区では、多数のピットを検出したが、建物跡を復元することはできなかった。また、ピット内出土の図化可能な遺物についてのみ報告を行う。

出土遺物

12は、土師質土器の小皿である。口縁がやや内湾氣味で、厚ぼったく器高の低い皿である。時期は13世紀代が想定できる。13は、土師質土器の小皿である。口縁がやや内湾氣味で、厚ぼったく器高の低い皿である。また、口径と底径の差がほとんどない。時期は14世紀代が想定できる。

A-2区出土遺物（第21図14～30、図版3・15・16）

A-2区の遺物は、表土剥ぎ中及び近現代溝（SD1）の流れ込みとして出土したものである。14は、肥前系の皿である。文様は見込みが蒟蒻印判による五弁花文で、底部には渦福の銘がみられる。時期は18世紀後半が想定できる。15は、肥前系の皿である。文様は外側が無文で、内面にはほつたりした表現で染付が施されている。また、高台の円周が小さいもので、初期伊万里の可能性がある。時期は17世紀前半が想定できる。16は、肥前系の皿である。粗雑な焼成で、染付文様の表現にも若干粗さがみられる。時期は18世紀代が想定



第6図 A-I区 SK1~4 実測図 (1:30)

できる。17は、肥前系の皿である。時期は18世紀代～19世紀前半が想定できる。18は、肥前系の皿である。内面は、蛇の目釉ハギ痕で、内面に染付が施されているが、詳細は不明である。時期は18世紀代が想定できる。19は、産地不詳の皿である。釉薬の気泡が割れ焼付いた痕跡がみられる。時期は不詳である。20は、肥前系の碗若しくは小杯と思われる。高台は無釉であり、内外面に染付が施されるが、詳細は不明である。時期は17世紀代が想定できる。21、22は、肥前系の広東碗である。文様は外面に二重格子文がみられる。時期は18世紀末～19世紀初頭が想定できる。23は、肥前系の広東碗である。時期は18世紀末～19世紀初頭が想定できる。24は、肥前系の碗である。文様は、外面に松文がみられる。時期は18世紀末～19世紀代が想定できる。25は、瀬戸・美濃系の広東碗である。時期は19世紀代が想定できる。26は、肥前系の小碗と思われる。文様は、外面に草花文、内面に網目文がみられる。時期は19世紀代が想定できる。27は、肥前系の碗である。外面に草・花・鳥の染付が確認できる。時期は不詳である。28は、朝顔形の碗蓋である。文様は内面中央付近に蒟蒻印判による五弁花文、口縁に四方櫻文を施す。また、外面は全体に青磁釉がみられる。時期は18世紀後半が想定できる。29は、肥前系の鉢で、香炉か火入と思われる。陶胎染付で、見込みに重ね焼きの痕跡が残る。時期は不詳である。30は、肥前系の鉢で、香炉か火入と思われる。釉薬は、青磁釉がみられる。時期は17世紀末～18世紀前半が想定できる。

2. 横田3号遺跡B区の遺構と遺物

掘立柱建物跡

SB1（第7図）

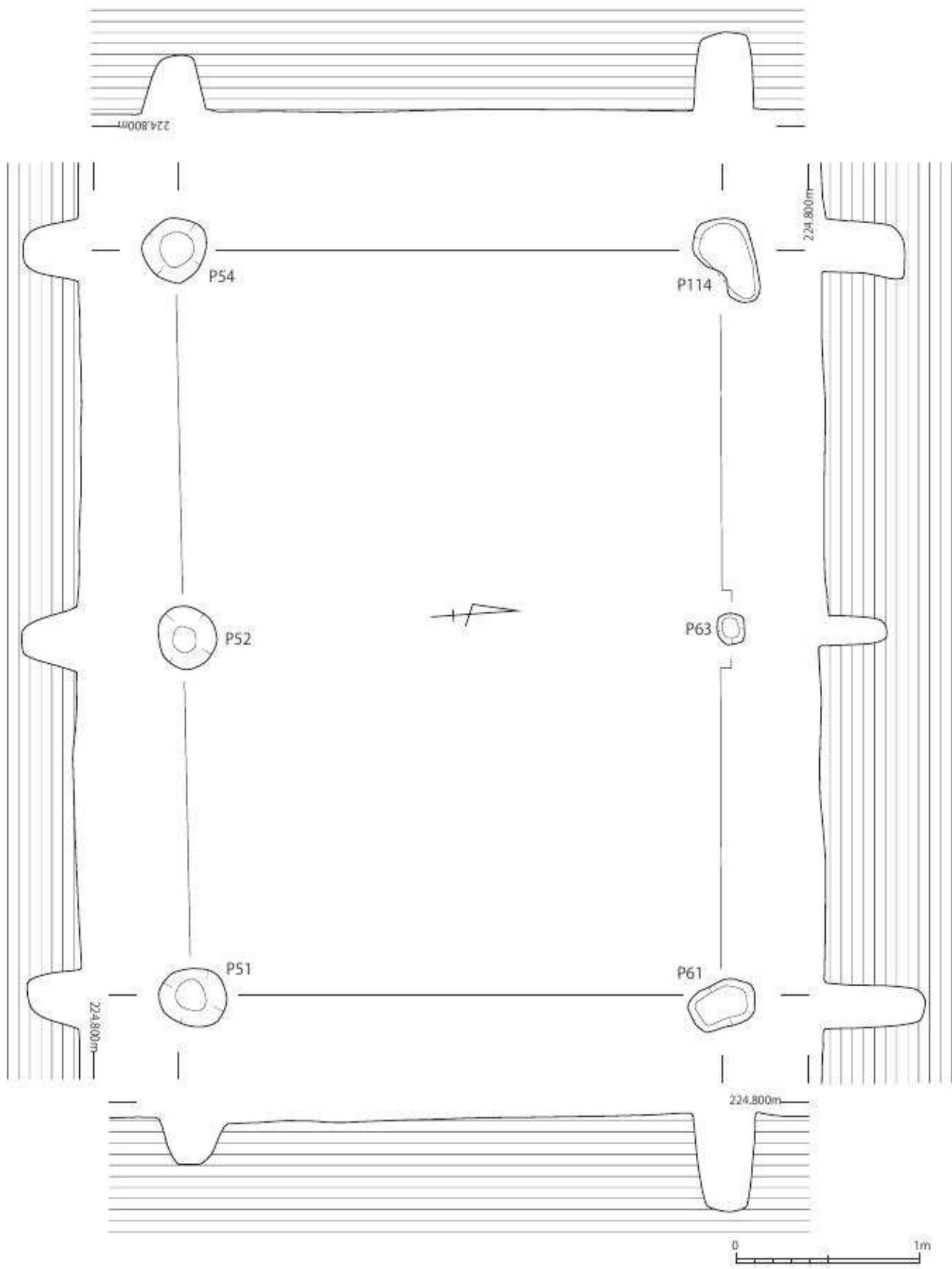
SB1は、調査区のほぼ中央で検出した、平面形が、長方形を呈する掘立柱建物跡である。柱穴の規模は、P51が径約0.30m、深さ約0.26m、P52が径約0.32m、深さ約0.30m、P54が径約0.32m、深さ約0.32m、P114は不整の円形であるが、径約0.32m、深さ約0.39m、P63が径約0.16m、深さ約0.36m、P61は不整の円形であるが、径約0.28m、深さ約0.50mを測る。柱間距離は、P51～P52が約1.86m、P52～P54が約2.0m、P54～P114が約2.9m、P114～P63が約2.0m、P63～P61が約2.0m、P61～P51が約2.9mを測る。6本柱構造で1間×2間の掘立柱建物跡が想定できる。遺物は図化不能な土師質土器が出土した。

井戸跡

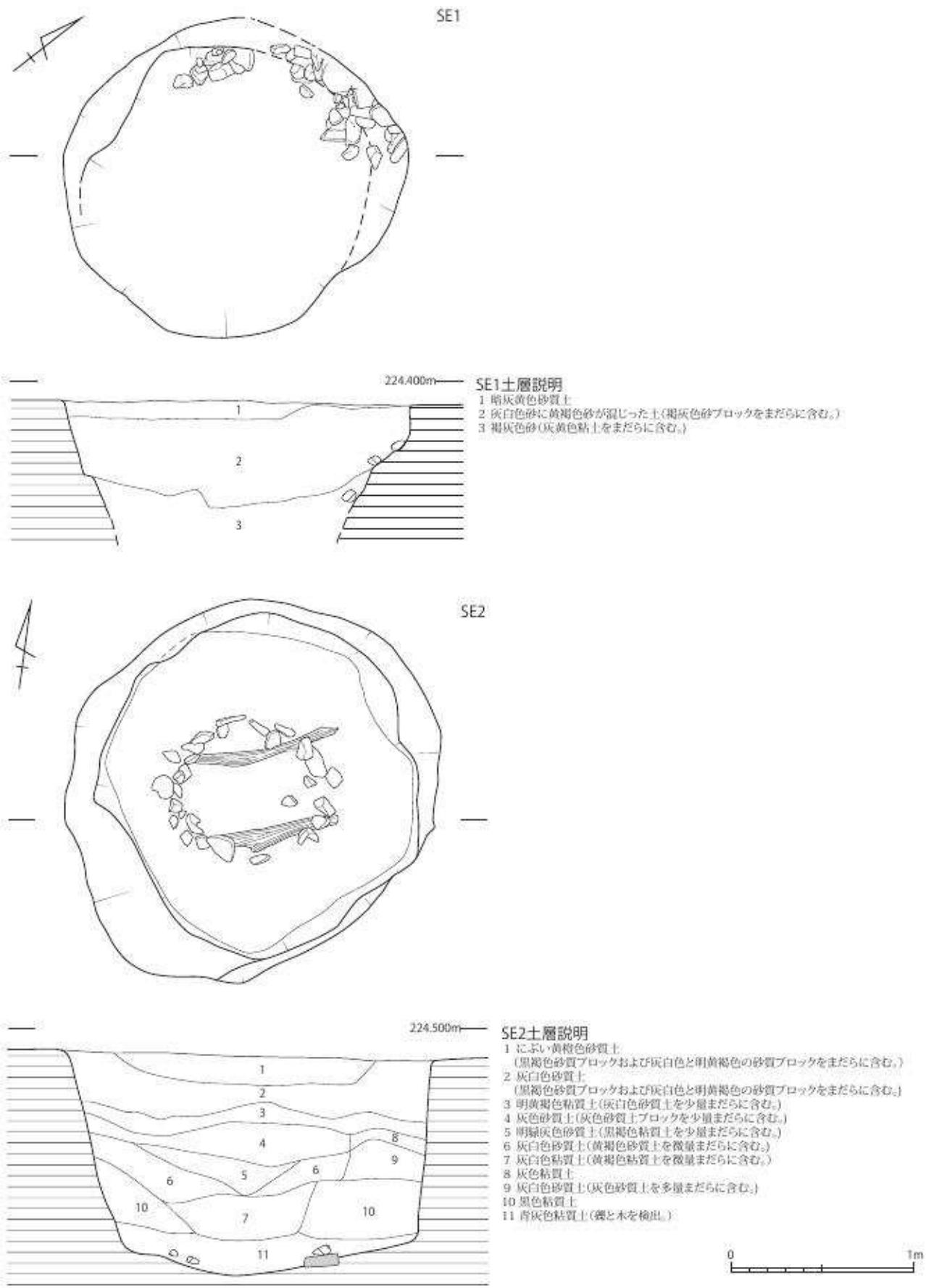
井戸跡は、調査時に土坑として取扱いを行ったが、整理途中で井戸跡と明確に判断できたものについて、次のとおり土坑跡から井戸跡に振替を行った。これにより、土坑跡に欠番が生じた。なお、井戸跡に振替した遺構はSE1(SK5)、SE2(SK20)、SE3(SK19, SK46)、SE4(SK49)、SE5(SK38)、SE6(SK40)、SE7(SK36)、SE8(SK39)、SE9(SK9)、SE10(SK26)の10基である。

SE1（第8図、図版4）

SE1は、調査区の東側で検出した、平面形が円形の井戸である。規模は、掘方の上方で、



第7図 B区 SB1 実測図 (1:30)



第8図 B区 SE1・2 実測図 (1:30)

東西約1.72m、南北約1.78mの楕円形を測り、さらにその下部で、東西約1.44m、南北約1.60m、深さ約1.0mの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは、南側がほぼ垂直で、北側の上方が若干開く。北側の開いた側に、4cmから16cm大の自然石により井戸の壁面を構築する。下方の掘方が、ほぼ円形に近いことから曲げ物を配置していた可能性がある。調査時点でも湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされていたものと考えられる。埋土の堆積状況は、暗灰黄色砂質土から褐色砂の3層がみられる。遺物は図化不能な土師質土器片が出土した。

SE2（第8図、図版4）

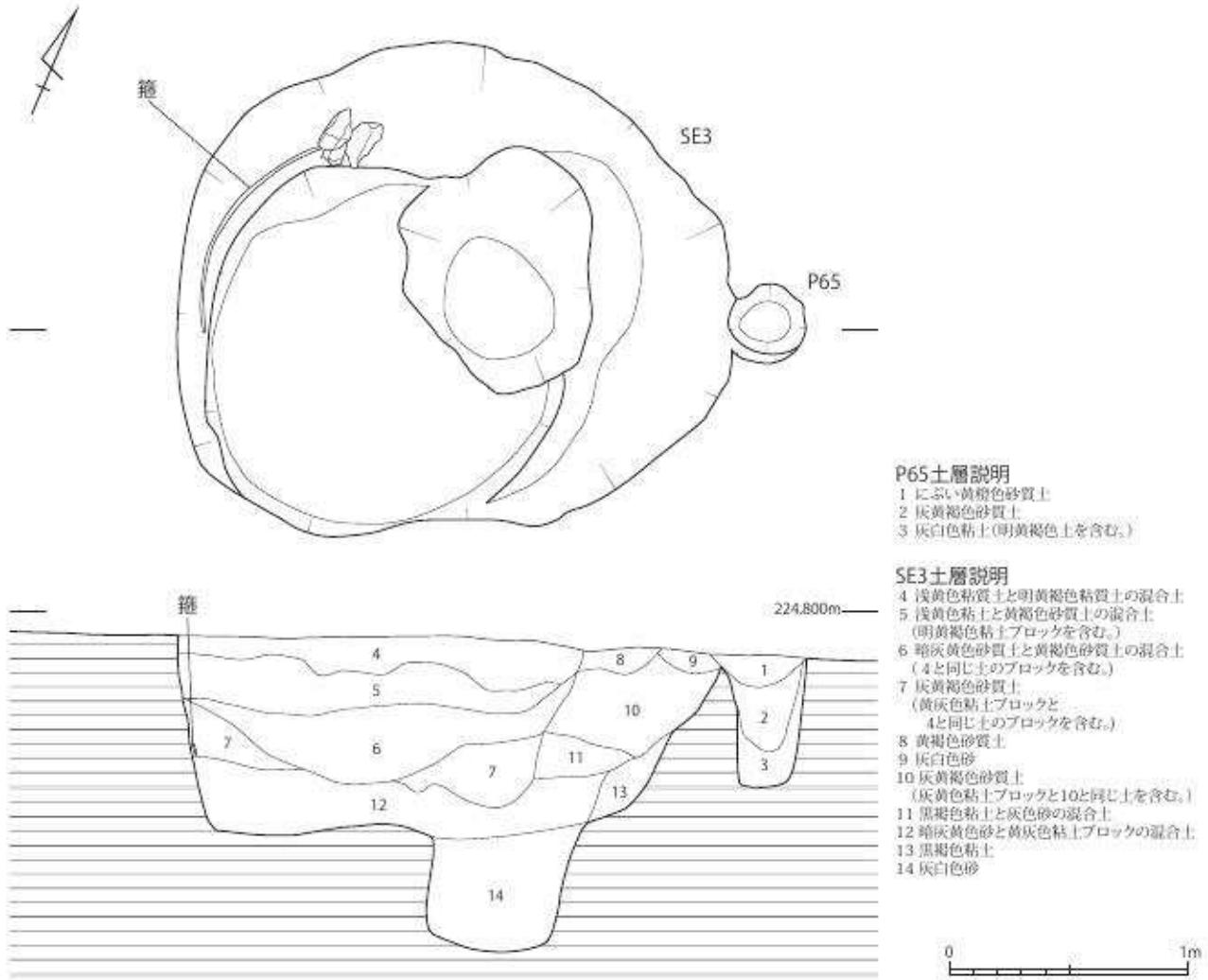
SE2は、調査区の南東側の中央付近で検出した、平面形が円形の井戸である。規模は、掘方の上方で、東西約2.02m、南北約2.08mの楕円形を呈し、さらにその下部で東西約1.62m、南北約1.82m、深さ約1.18mの楕円形を呈する。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。中央には薄板を北側に1枚、南側に1枚を置き、その薄板を円形に囲うように、1cmから16cm大の自然石を使用し、集水枠状に構築する。調査時点でも湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされていたものと考えられる。埋土の堆積状況は、にぶい黄橙色砂質土から青灰色粘質土の11層がみられる。遺物は図化不能な木製品（薄板片）が出土した。

SE3（第9図、図版4）

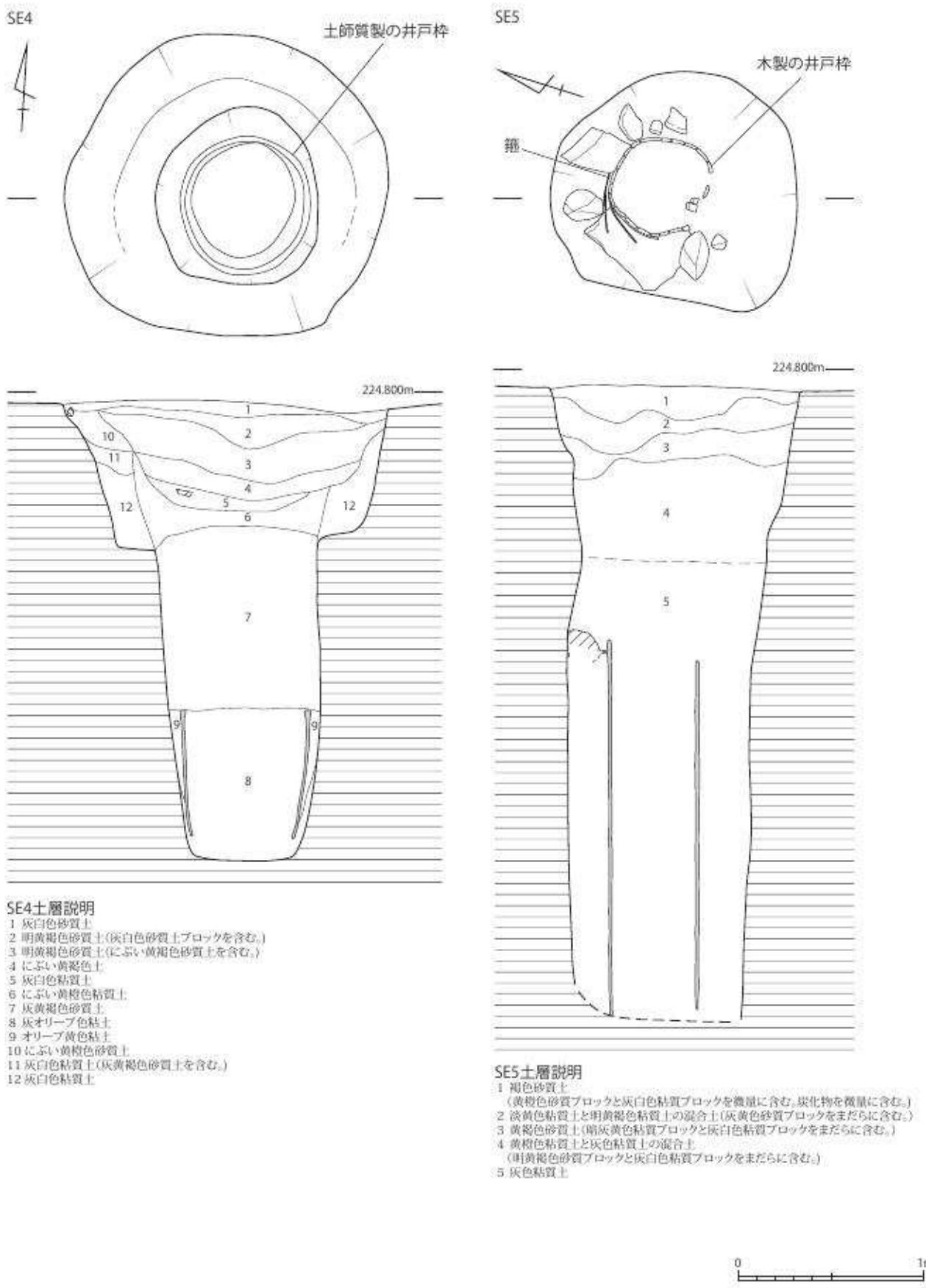
SE3は、SE2から北西側約2.80mで検出した、平面形が楕円形の井戸である。規模は掘方の上方で、東西約2.80m、南北約2.14mを測り、さらにその下部で、東西約1.52m、南北約1.48mの楕円形の半ばを持ち、半ば内に掘形の上部が東西約0.83m、南北0.91mで、その下部が東西約0.47m、南北約0.44mの集水穴がある。半ばには、竹製の籠が巡っていたものと考えられる。その西側上方には、水を組み上げるときの石段としていたと思われる、11cmから18cmの自然石を配置する。また壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。調査時点でも湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされていたものと考えられる。埋土の堆積状況は、浅黄色粘質土と明黄褐色粘質土の混合土から灰白色砂の11層がみられる。遺物は、図化不能な竹製の籠片が出土した。

SE4（第10・22図31～36、図版5・16～18）

SE4は、SB1の西側約3.80mで検出した、平面形が楕円形の井戸である。規模は掘方の上方で、東西約1.73m、南北約1.62m、深さ約2.48mを測り、さらにその下部で、東西約0.88m、南北約0.94m、深さ約1.71mの半ばを持つ。また上方から深さ約1.66mに、土師質製（原村焼か）の井戸枠を配置する。埋土の堆積状況は、灰白色砂質土から灰白色粘質土までの12層がみられる。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。調査時点でも湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされていたものと考えられる。埋土の堆積状況は、灰白色砂質土から灰白色粘質土の12層がみられる。遺物は、土師質土器、陶器片、簪などが出土した。



第9図 B区 SE3、P65 実測図 (1 : 30)



第 10 図 B 区 SE4・5 実測図 (1 : 30)

出土遺物

31は、土師質製の甕である。調整は輪積成形で、ナデ、刷毛目を施す。32は、土師質製の甕である。調整は、輪積成形で、ナデ、刷毛目を施す。33は、土師質製の井戸枠である。調整は、6cmから10cmの単位で輪積成形を施し、底部は最初から貫通しており、井戸枠専用に作成されたものと思われる。34は、鍋類・瓶類等の底部であると考えられる。調整は、内外面ともに回転ナデを施し、外面の底部付近まで鉄釉を施釉する。産地は不詳である。35は、肥前系の小皿である。内面に蛇の目状の釉ハギ痕が残る。染付文様は細筆で、二重格子文が描かれている。時期は19世紀中頃が想定できる。36は、銅製の簪である。耳搔き先端と髪に差す部分の先端を欠失する。大きさは現存で長さ14.8cm、幅1.6cm、厚さ0.2cm、重さ7.48gを測る。草花文が線刻された「耳搔き」が頭部に付き、髪に差す部分が二股になる形態である。

SE5（第10・23図37～38、図版5・16）

SE5は、SE4の西側約0.20mで検出した、平面形が楕円形の井戸である。規模は堀方が東西約1.23m、南北約1.34m、残存深さ約3.41mを測る。上方から深さ約1.36mに、杉板製の井戸枠を配置し、その支えとして8cmから26cmの自然礫を詰めている。埋土の堆積状況は、褐色砂質土から灰色粘質土の5層がみられる。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。調査時点から湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされていたものと考えられる。遺物は、陶器、瓦などが出土地した。

出土遺物

37は、肥前系の鉢である。外面から内面にかけて鉄釉がみられる。また高台底には胎土目がみられる。38は、瓦の棟瓦である。スヌを付着させた焼瓦で、無文のものである。時期は、18世紀末～19世紀代が想定できる。

SE6（第11・23図39～40、図版5・18）

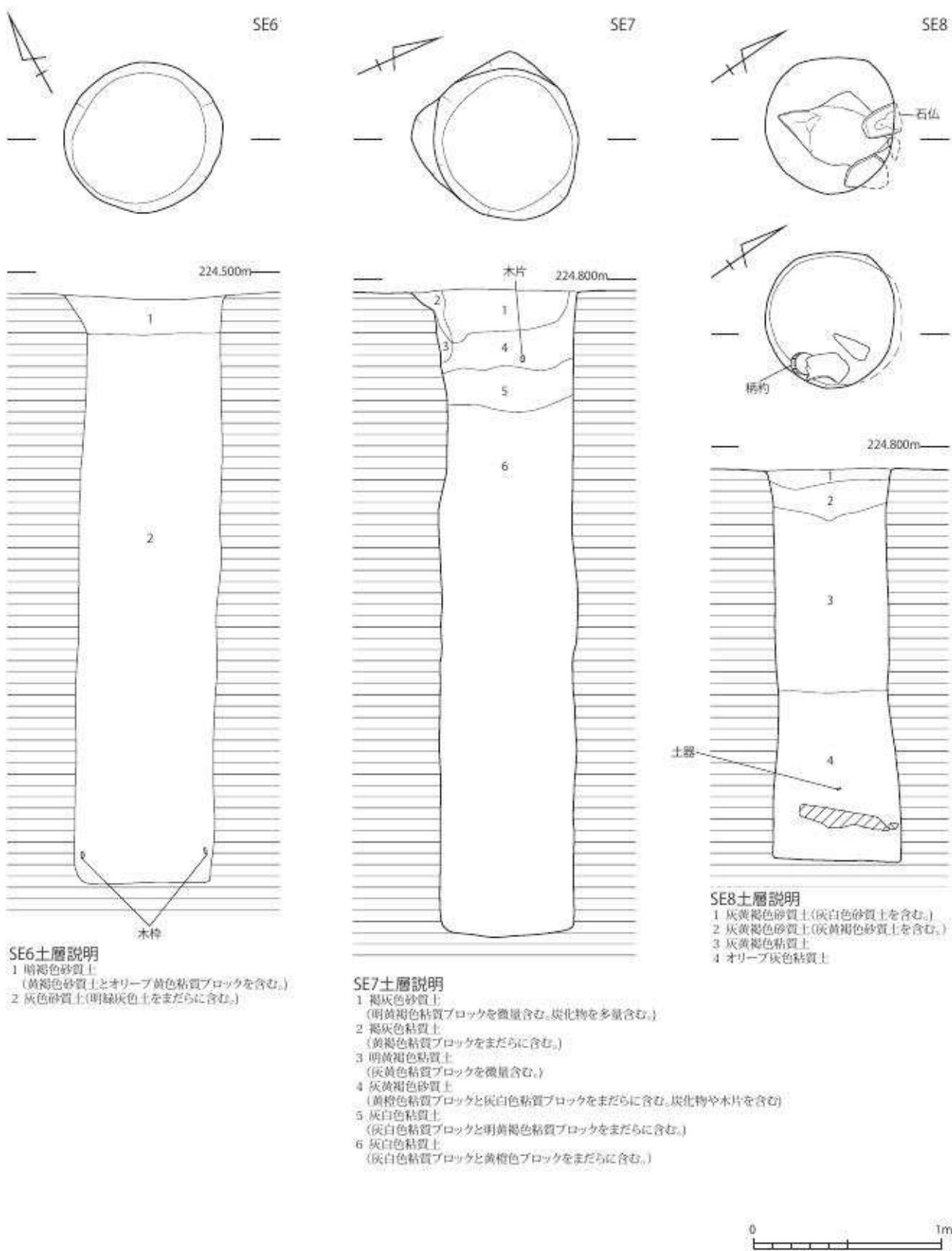
SE6は、SE5の南東側約1.40mで検出した、平面形が楕円形の井戸である。規模は堀方が東西約0.86m、南北約0.77m、深さ約3.30mを測る。上方から約2.92mに、木枠の断片が残っており、井戸枠を配置していたと考えられる。埋土の堆積状況は、暗褐色砂質土と灰色砂質土の2層がみられる。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。調査時点から湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされていたものと考えられる。遺物は、陶磁器が出土地した。

出土遺物

39は、肥前系の染付芙蓉手八角鉢である。40は、肥前系の染付八角鉢である。見込みに詳細不明の文様がみられる。時期は、18世紀末～19世紀初頭が想定できる。

SE7（第11・23図41～44、図版6・16・17）

SE7は、SE5の北西側約6.60mで検出した、平面形が楕円形の井戸である。規模は掘方が東西約0.86m、南北約0.74m、深さ約3.41mを測る。井戸枠の配置は認められなかった。



第 11 図 B 区 SE6 ~ 8 実測図 (1 : 30)

埋土の堆積状況は、褐灰色砂質土から灰白色粘質土の6層がみられる。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。調査時点から湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされたものと考えられる。遺物は、陶磁器、瓦が出土した。

出土遺物

41は、青磁の碗の破片である。器形は、口縁に向けて直立し、端部を丸くおさめる。42は、陶器の蓋である。調整は外面が刷毛目で、内面がナデを施し、段着部に貼付がみられる。蓋天井部には、イッチン描きによる装飾を施す。産地は京・信楽焼系と思われる。内面全体にススが付着する。43、44は、瓦の棟瓦である。色調は内外面ともに黄白色である。裏面に「寺家村三百四拾八番邸農財局倉□（廣）島縣賀茂」の記名がみられる。また、43と44の瓦は同一個体の可能性がある。

SE8（第11・23図45・49～50 / 24図46～48、図版6・16・18・19）

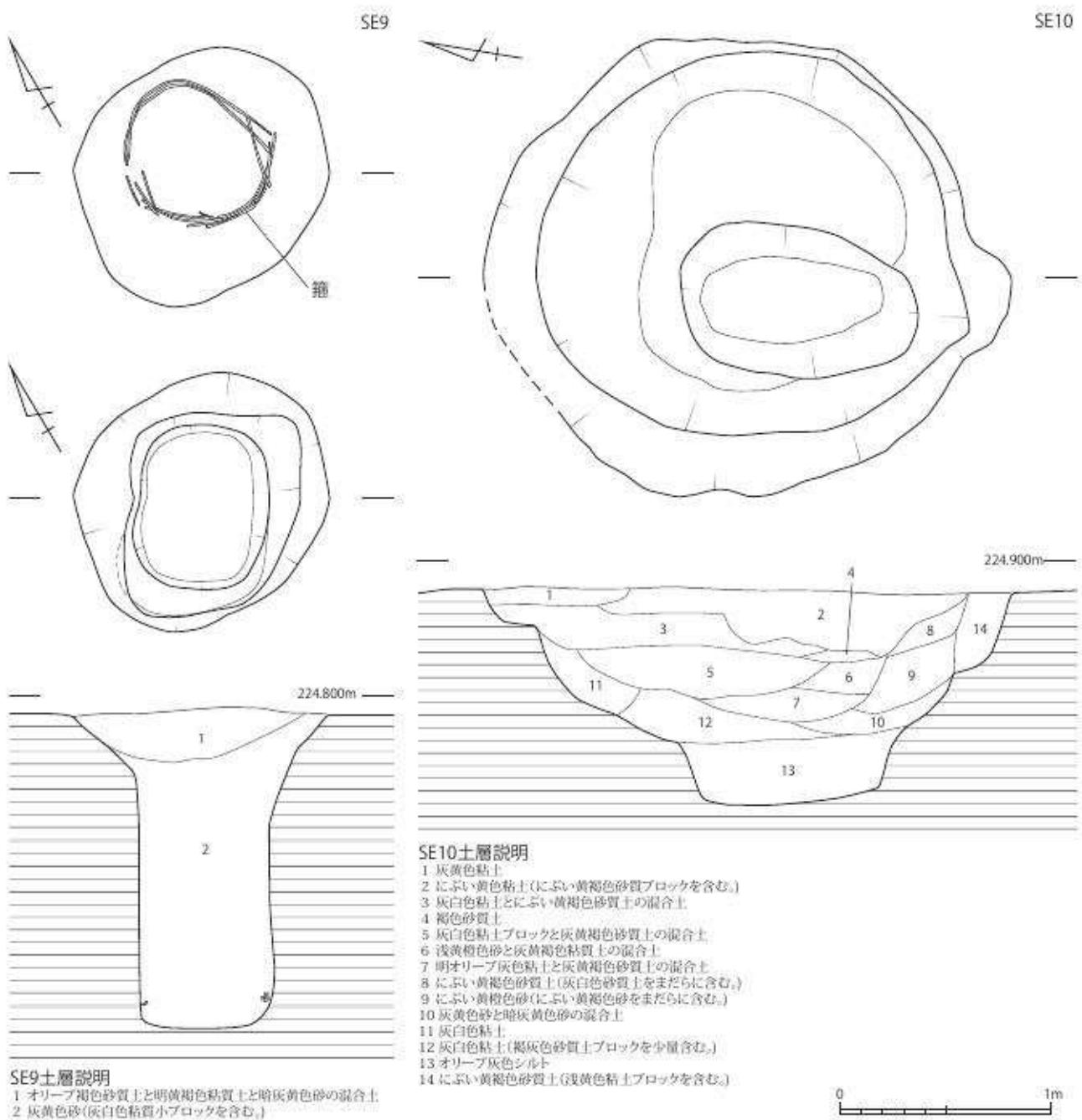
SE8は、SE7の北側約2.60mで検出した、平面形が円形の井戸である。規模は掘方が直径約0.70m、深さ約2.07mを測る。井戸枠の配置は認められなかった。井戸の底面を塞ぐように、大きさ縦径約0.40m、横径約0.38mの平坦な自然石を置き、その上方に石仏を配することから、井戸の廃絶後何らかの儀式を行った可能性が考えられる。埋土の堆積状況は、灰黄褐色砂質土からオリーブ灰色粘質土の4層がみられる。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。調査時点から湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされたものと考えられる。遺物は、陶磁器、木製品、石製品、瓦が出土した。

出土遺物

45は、肥前系の染付碗の破片である。調整は、底部の四方を打ち割いたようにみられる。文様は見込みに「寿」字を染付したと思われる銘がみられる。46は、木製品の容器である。木目は、柾目取りで、材質は杉である。47は、石製品の地蔵菩薩である。材質は花崗岩である。48は、瓦の棟瓦である。調整は、ススを付着させた燻瓦で、無文のものである。時期は、18世紀末～19世紀代が想定できる。49は、肥前系染付の皿の破片である。体部が内湾気味に開き、口縁端部を丸く納める。口縁内面に1重の圈線と外面に唐花文を描く。時期は18世紀代が想定できる。50は、肥前系磁器の瓶である。調整は内外面ともに回転ナデで、外面には青磁釉が施されていると思われる。高台底は釉ハギ痕がある。時期は17世紀後半が想定できる。

SE9（第12図、図版6）

SE9は、SE8の東側約11.6mで検出した、平面形が梢円形の井戸である。規模は掘方が東西約1.22m、南北約1.08m、深さ約1.50mを測る。さらにその下部で、東西約1.0m、南北約0.95mの不明慮な段を持つ。壁の立ち上がりは段までは垂直で、段から上方は逆「ハ」字状に開く。底面付近に竹製の籠が掘形に沿うように巡る。調査時点から湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされたものと考えられる。遺物は、炭化不能な木製品の籠が出土した。



第12図 B区 SE9・10 実測図 (1:30)

SE10（第12図、図版6）

SE10は、SE9の南西側約7.20mで検出した。平面形が橢円形の井戸である。規模は掘方の上方で東西約2.13m、南北約2.46m、深さ約1.01mで、さらにその下方が東西約1.80m、南北約2.04m、深さ約0.36mで不明慮な段を持つ。底面は東西約0.69m、南北約1.14m、底面の上方までの深さ約0.62mで、底面の深さは上方から1.02mを測る。壁の立ち上がりは底部が垂直で、段から上方は逆「ハ」字状に開く。形状からすると比較的浅めの素掘りの井戸が想定できる。埋土の堆積状況は、灰黄色粘土からにぶい黄褐色砂質土までの14層がみられる。調査時点から湧水が著しかったことから、井戸の機能は十分に果たされたものと考えられる。遺物は出土していない。

土坑跡

土坑跡は、50基（SK1～50）を検出した。また、SK1～4、12、19の6基は近現代の攪乱であることが、確認できたため欠番とした。また、整理途中で土坑跡から井戸跡と明確に判断できたものについて、井戸跡の番号を振替えたため土坑跡に欠番が生じた。なお、井戸跡に振替した土坑跡はSK5（SE1）、SK20（SE2）、SK19、SK46（SE3）、SK49（SE4）、SK38（SE5）、SK40（SE6）、SK36（SE7）、SK39（SE8）、SK9（SE9）、SK26（SE10）の11基である。

SK6（第13・24図51、図版7・19）

SK6は、SE9の南東側約6.40mで検出した、平面形が不整な長方形の土坑である。規模は、長軸約1.31m、短軸は北側で約0.63m、南側で約0.80m、深さ約0.28mを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。埋土の堆積状況は、にぶい黄色砂質土と浅黄色砂質土の混合土からにぶい黄橙色砂までの4層がみられる。南側には土師質土器の甕が埋設されていることから、埋甕土坑が想定できる。遺物は、土師質土器の甕が出土した。

出土遺物

51は、土師質土器の甕である。調整は、輪積成形で刷毛目、ナデを施す。時期は、19世紀前半が想定できる。

SK7（第13図、図版7）

SK7は、SK6の北西側約3.0mで検出した、平面形が橢円形の土坑である。規模は、長軸約0.57m、短軸約0.53m、深さ約0.22mを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。埋土の堆積状況は、明黄褐色粘質土から灰白色粘質土の3層がみられる。遺物は出土していない。

SK8（第13・24図52、図版7・19）

SK8は、SK7の西側約1.40mで検出した、平面形が不整の橢円形の土坑である。規模は、長軸約1.60m、短軸約1.32m、深さ約0.60mを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。埋土の堆積状況は、灰黄褐色砂の混合土から黄灰色粘土と灰白色粘土の混合土までの4層がみられる。また1層から用途不明の多量の土塊を検出した。遺物は土師質土器、陶磁器が出土した。

出土遺物

52は、肥前系陶器の皿である。調整は外面が刷毛目で、内面には蛇の目釉ハギがみられる。時期は17世紀後半が想定できる。

SK10（第13図、図版8）

SK10は、SK8の北西側約1.50mで検出した、平面形が橢円形の土坑である。規模は、長軸約0.87m、短軸約0.72m、深さ約0.22mを測る。壁の立ち上がりは、緩やかな逆「ハ」字形を呈する。埋土の堆積状況は、橙色砂と灰白色粘質土の混合土から明黄褐色粘質土と灰白色粘質土の混合土の3層がみられる。遺物は出土していない。

SK11（第13図、図版8）

SK11は、SK10の西側約1.60mで検出した、平面形が不整な橢円形の土坑である。また南西側は、後世の暗渠排水により消失する。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。規模は、長軸約1.30m、残存短軸約0.90m、深さ約0.39mを測る。埋土の堆積状況は、淡黄色砂から黄灰色砂の8層がみられる。遺物は出土していない。

SK13（第14図、図版8）

SK13は、SK11の北西側約1.50mで検出した、平面形が不整な橢円形の土坑である。また南側は、後世の暗渠排水により消失する。北東側の壁際には木片があり、壁に沿って幅約0.17mの浅い溝状の掘り込みがみられる。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。規模は、残存長軸約1.08m、短軸約1.06m、深さ約0.22mを測る。埋土の堆積状況は、灰オーリーブ色粘質土と明黄褐色粘質土の混合土から灰白色砂の3層がみられる。遺物は、図化不能な土師質土器片が出土した。

SK14（第14・24図53、図版9・19）

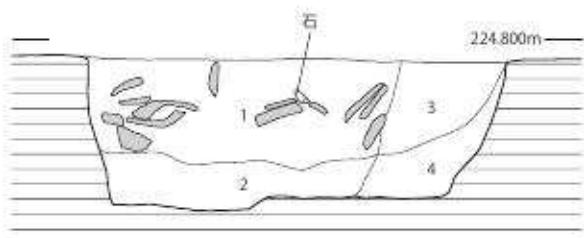
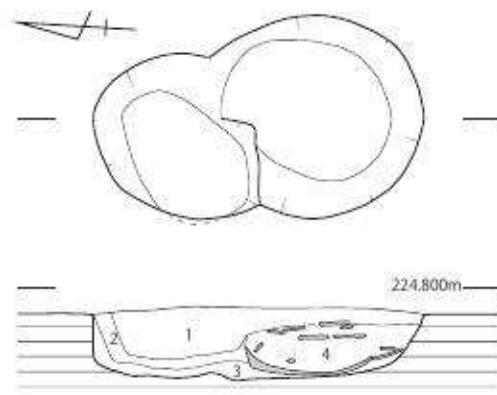
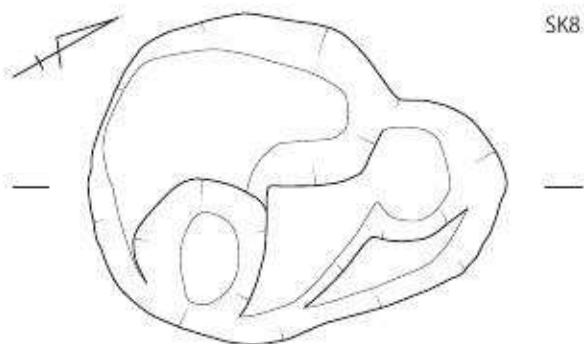
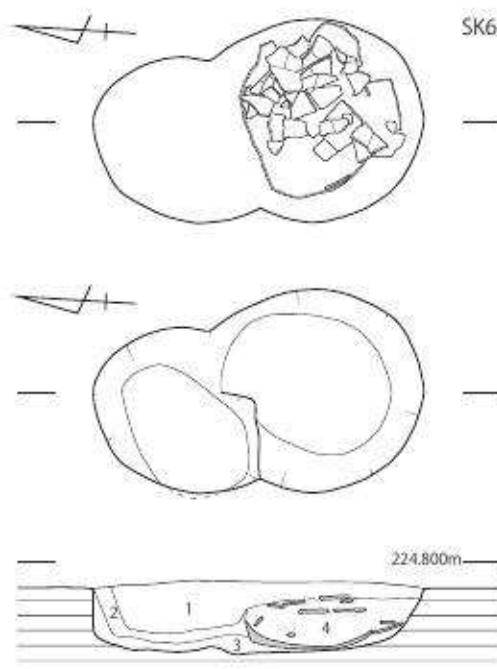
SK14は、SK6の南東側約0.80mで検出した、平面形が長方形の土坑である。規模は、長軸約1.01m、短軸約0.66m、深さ約0.12mを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。埋土の堆積状況は、にぶい黄橙色砂質土と明黄褐色粘質土の2層がみられる。遺物は、土師質土器が出土した。

出土遺物

53は、土師質土器の鍋である。調整は内外面ともに刷毛目がみられ、体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁下部に貼付突帯を施す。時期は17世紀後半が想定できる。

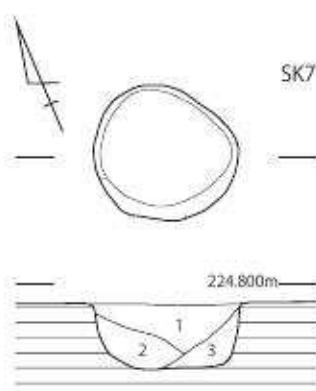
SK15（第14・25図54、図版8・20）

SK15は、SK14の南側約1.60mで検出した、平面形が長方形の土坑である。規模は、長軸約1.49m、短軸約0.83m、深さ約0.22mを測る。壁の立ち上がりは、垂直を呈する。埋土の堆積状況は、灰白色砂質土から明黄褐色粘質土の2層がみられる。遺物は、土師質土器が出土した。



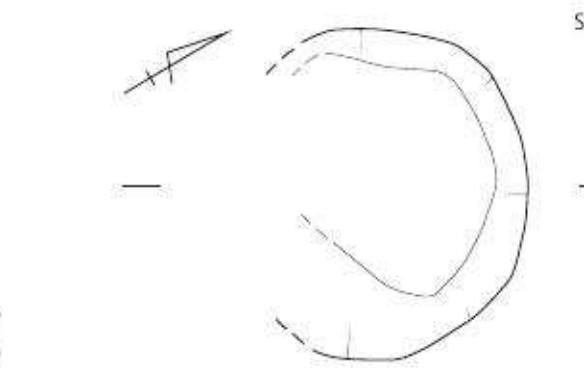
SK6 土層説明

- 1 にぶい黄色砂質土と浅黄色砂質土の混合土
(黄褐色鉄質ブロックをまだらに含む。)
- 2 灰黄色砂
- 3 明黄褐色粘質土と灰黄色粘質土の混合土
- 4 にぶい黄橙色砂



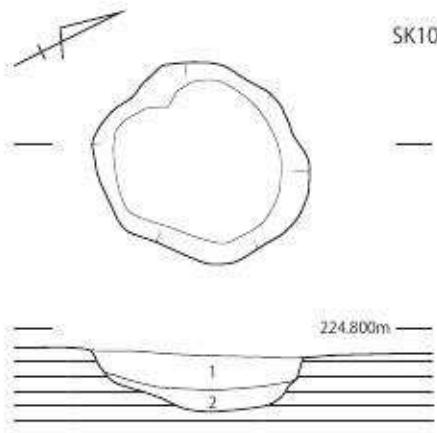
SK7 土層説明

- 1 明黄褐色粘質土(灰色砂質土をまだらに含む。)
- 2 明黄褐色粘質土と灰色粘質土の混合土
- 3 灰白色粘質土(黄褐色粘質土をまだらに含む。)



SK11 土層説明

- 1 淡黄色砂
- 2 灰白色粘質土
- 3 黄灰色砂
- 4 棕色砂
- 5 暗灰黄色粘質土
- 6 浅黄色砂
- 7 棕色砂
- 8 黄灰色砂



SK10 土層説明

- 1 棕色砂と灰白色粘質土の混合土
(黒褐色砂質土ブロックを含む。)
- 2 灰白色粘質土と灰黄色粘質土の混合土
- 3 明黄褐色粘質土と灰白色粘質土の混合土



第 13 図 B 区 SK6 ~ 8 · 10 · 11 実測図 (1 : 30)

出土遺物

54は、土師質土器の焜炉である。脚部は高さ4.0cm、幅4.3cm、厚さ2.1cmを底部に貼付ける。時期は不詳である。

SK16（第14・25図55、図版9・19）

SK16は、SK15の西側約1.0mで検出した、平面形が不整な橢円形の土坑である。規模は、長軸約1.14m、短軸約1.0m、深さ約0.74mで、底面は長軸約0.65m、短軸約0.59mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。土坑内には、用途不明の大きさ8cm～37cmの多量の自然石が投棄されていることから、廃絶後に何らかの祭祀を行った可能性も考えられる。埋土の堆積状況は、にぶい黄褐色砂質土とにぶい黄褐色粘質土の2層がみられる。遺物は土師質土器が出土した。

出土遺物

55は、土師質土器の鍋である。調整は内外面ともに刷毛目がみられる。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁下部に貼付突帯を施す。時期は17世紀後半頃が想定できる。

SK17（第14図、図版9）

SK17は、SK16の北西側約2.06mで検出した、平面形が橢円形の土坑である。規模は、長軸約1.76m、短軸約1.69m、深さ約0.38mで、底面は長軸約0.83m、短軸約0.78mを測り、幅約0.24m、深さ約0.08mの非常に浅い溝が巡る。壁の立ち上がりは、逆「ハ」字形を呈する。埋土の堆積状況は、にぶい黄褐色砂質土から灰黄色粘土と明黄褐色粘土の混合ブロックの3層がみられる。遺物は、図化不能な土師質土器片、陶磁器片が出土した。

SK18（第17図、図版10）

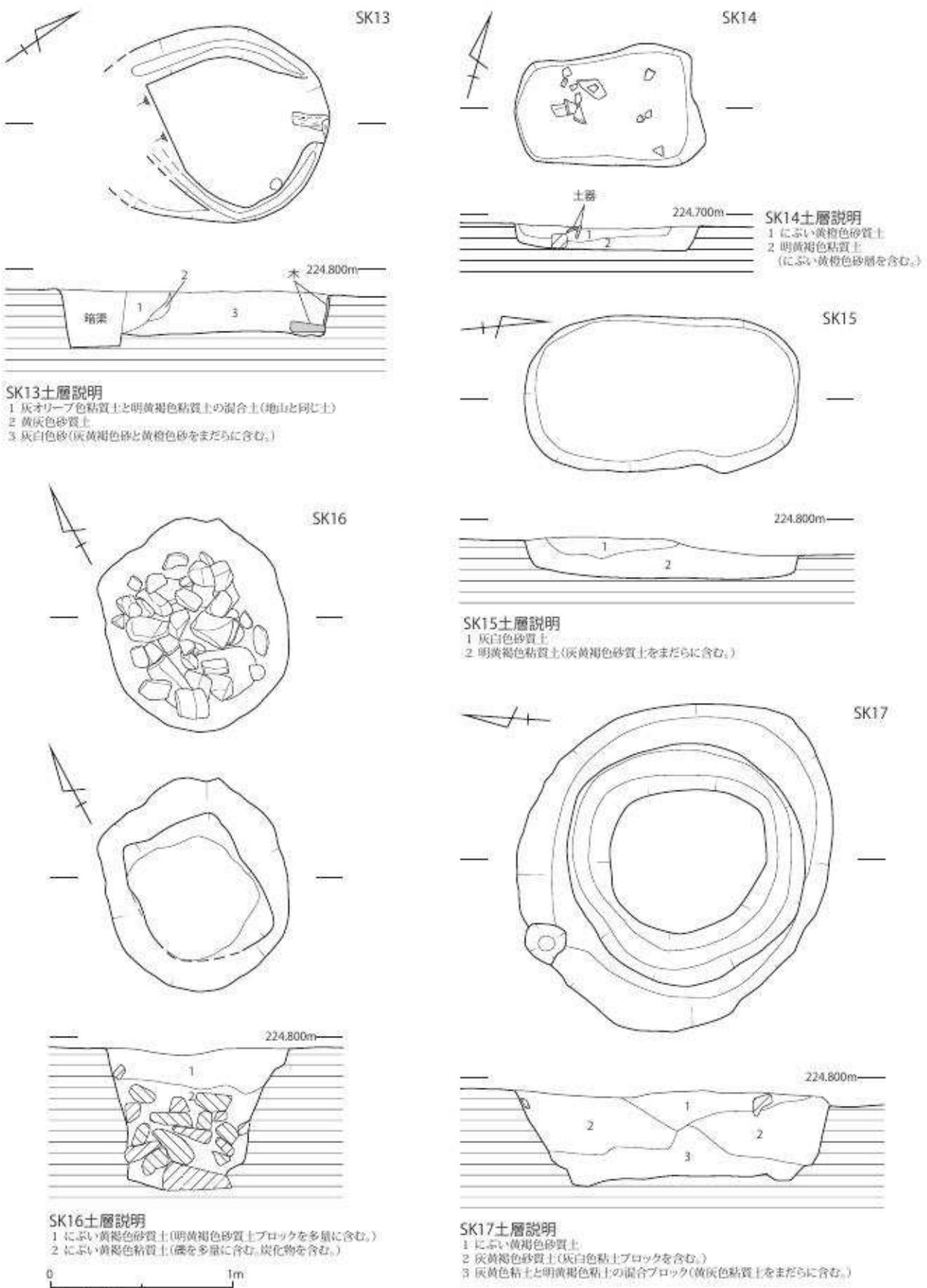
SK18は、SK16の南側約1.70mで検出した、平面形が円形の土坑である。規模は、直径約0.64m、深さ約0.34mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、にぶい黄褐色砂質土から灰黄色砂の5層がみられる。遺物は出土していない。

SK21（第17図、図版10）

SK21は、SK19の西側約0.54mで検出した、平面形が円形の土坑である。規模は、直径約0.73m、深さ約0.28mを測る。壁の立ち上がりは、緩やかな逆「ハ」字形を呈する。埋土の堆積状況は、明黄褐色粘質土とにぶい黄褐色粘質土の2層がみられる。遺物は時期不詳及び図化不能な土師質土器片、陶磁器片が出土した。

SK22（第17図、図版10）

SK22は、SK21の東側約2.04mで検出した、平面形が橢円形の土坑である。規模は、長軸約0.74m、短軸約0.68m、深さ約0.27mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、明黄褐色粘質土とにぶい黄褐色粘質土の2層がみられる。遺物は出土していない。



第14図 B区 SK13～17 実測図 (1:30)

SK23（第15図、図版11）

SK23は、SK28の南東側に接して検出した、平面形が長方形の土坑である。南東側はSK28に切られている。規模は、残存長軸約1.22m、短軸約0.78m、深さ約0.16mを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。埋土の堆積状況は、明黄褐色砂質土とぶい黄橙色砂質土の2層がみられる。遺物は出土していない。

SK24（第17・25図56、図版10・19）

SK24は、SK14の西側約1.50mで検出した、平面形が不整な橢円形の土坑である。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。規模は、長軸約1.37m、短軸約0.96m、深さ約0.94mを測る。埋土の堆積状況は、明緑灰色粘質土と灰白色砂の混合層と灰白色砂の2層がみられる。遺物は時期不詳及び図化不能な土師質土器片、陶磁器片が出土した。

出土遺物

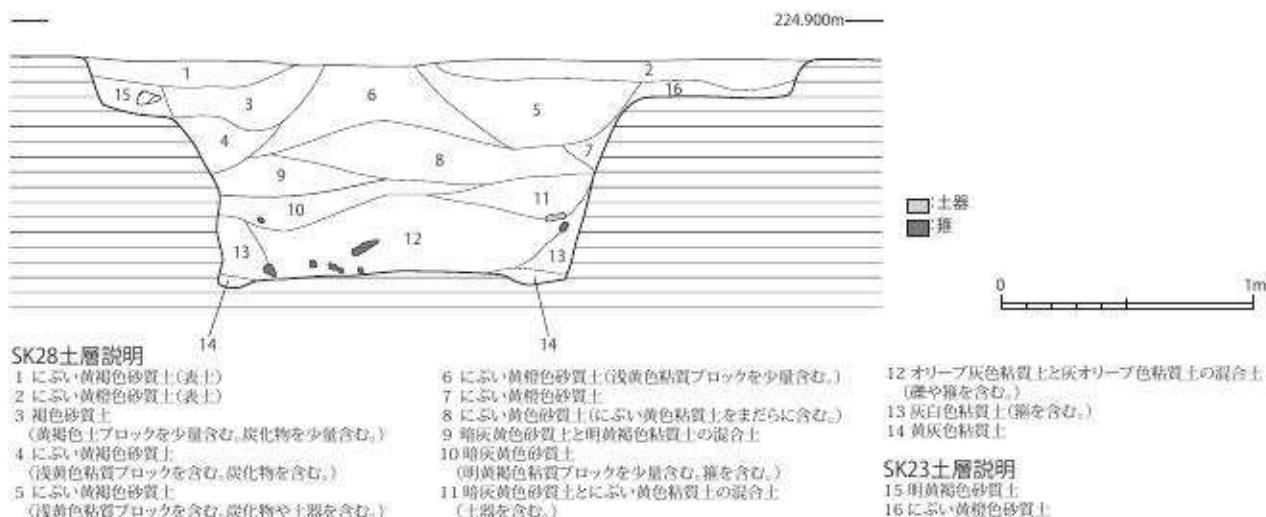
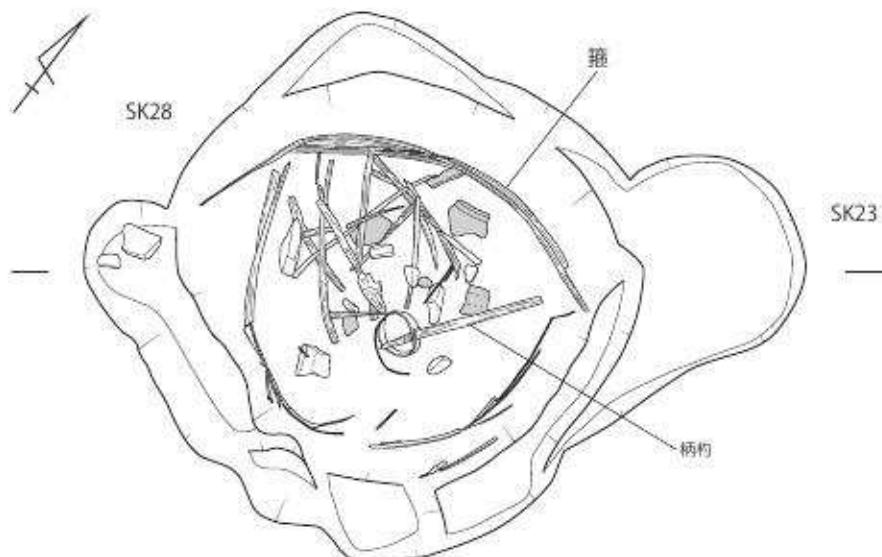
56は、肥前系の皿である。底部が蛇の目高台で、内外面の体部に灰釉を施す。内面の一部に被熱痕がみられる。時期不詳である。

SK25（第16・25図57～65 / 26図66～70、図版11・19・20）

SK25は、SK29と東側で接し、SX4と北側で接して検出した、平面形が不整な長方形の土坑である。壁の立ち上がりは、不整な台形状を呈する。規模は、長軸約2.30m、短軸約1.61m、深さ約0.74mを測る。底面付近から竹製の箋片と土師質土器、陶磁器、石製品が出土した。埋土の堆積状況は、ぶい黄色粘土からぶい黄褐色砂質土の7層がみられる。遺物は土師質土器、陶磁器、石製品が出土した。

出土遺物

57は、肥前系の碗である。文様は外面に草花と思われる図と底部に一重圏線、内面の口縁端部と底部に一重圏線がみられる。時期は18世紀後半～19世紀初頭が想定できる。58は、肥前系の碗である。文様は、外面に染付がみられるが、詳細は不明である。口縁部と底部に一重圏線で、内面は口縁部に二重圏線、底部に一重圏線がみられる。時期は、18世紀前半～18世紀中頃が想定できる。59は、肥前系の碗である。文様は、高台外面が二重圏線で、見込みにはかなり崩れた蒟蒻印判による五弁花文がみられる。時期は、18世紀代が想定できる。60は、肥前系の広東形の碗である。文様は見込みに鷺文様がみられる。時期は18世紀末～19世紀中頃が想定できる。61は、肥前系の碗である。文様は外面に染付が施されているが詳細は不明である。18世紀後半～18世紀末が想定できる。62は、肥前系の朝顔形の碗蓋である。文様は内面に四方擗文を施す。時期は18世紀中頃～18世紀後半が想定できる。63は、肥前系の瓶である。文様は、外面に草文がみられる。高台端部は釉ハギを施す。時期は18世紀前半～18世紀後半が想定できる。64は、土師質土器の鍋である。内耳をもつ可能性がある。時期は18世紀代が想定できる。65は、土師質土器の甕で、在地系と思われる。調整は外面がナデで、内面は体部に刷毛目がみられる。時期は不詳である。66は在地産の吉川砥石である。3面の使用がみられる。67は、在地産の吉川砥石である。2面の使用がみられる。68～70は、瓦の棧瓦で、いずれも燻瓦である。



第15図 B区 SK23・28 実測図 (1:30)

SK27（第17図、図版12）

SK27は、SK11の南側でほぼ隣接して検出した、平面形が不整な梢円形の土坑である。また北東側は、後世の暗渠排水により消失する。規模は、長軸約1.80m、残存短軸約0.93m、深さ約0.70mを測る。底面は残存長軸約0.53m、短軸約0.59mで、幅約0.22mの溝が巡る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。埋土の堆積状況は、灰白色粘質土から灰色粘質土の6層がみられる。遺物は、炭化不能な土師質土器片が出土した。

SK28（第15・26図71～72 / 27図73～74、図版11・21）

SK28は、SK23の南西側に接して検出した、平面形が不整な梢円形の土坑である。規模は、長軸約2.14m、短軸約2.02m、深さ約0.83mを測る。掘方の断面は逆台形を呈する。土坑内には、竹で編んだと考えられる籠が埋設されている。底面の形状は梢円形を呈し、規模は、長軸約0.98m、短軸約0.91m、幅約0.26mの溝が巡る。また柄杓や桶などの木製品と備前焼の甕などの遺物が混入する。埋土の堆積状況は、にぶい黄褐色砂質土から黄灰色粘質土の14層がみられる。遺物は、土師質土器片、瓦質土器片、陶磁器、木製品（柄杓）が出土した。

出土遺物

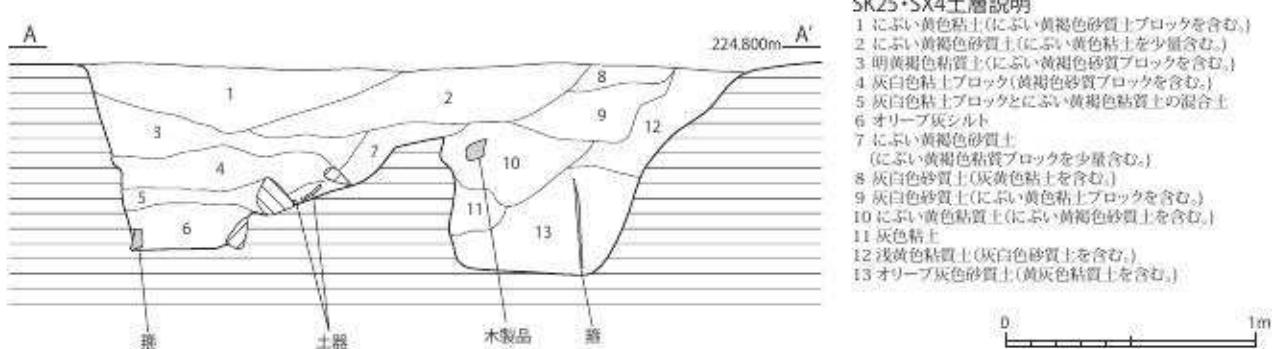
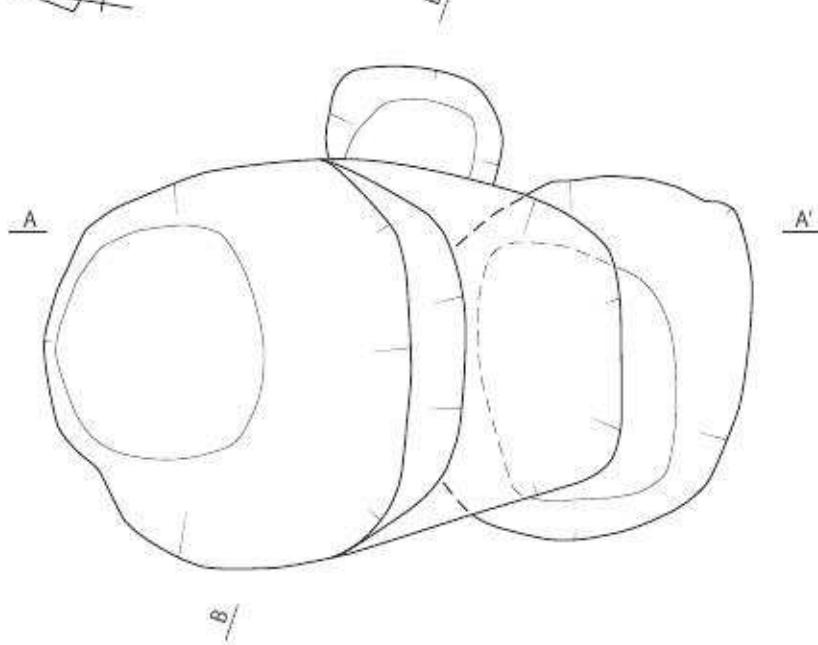
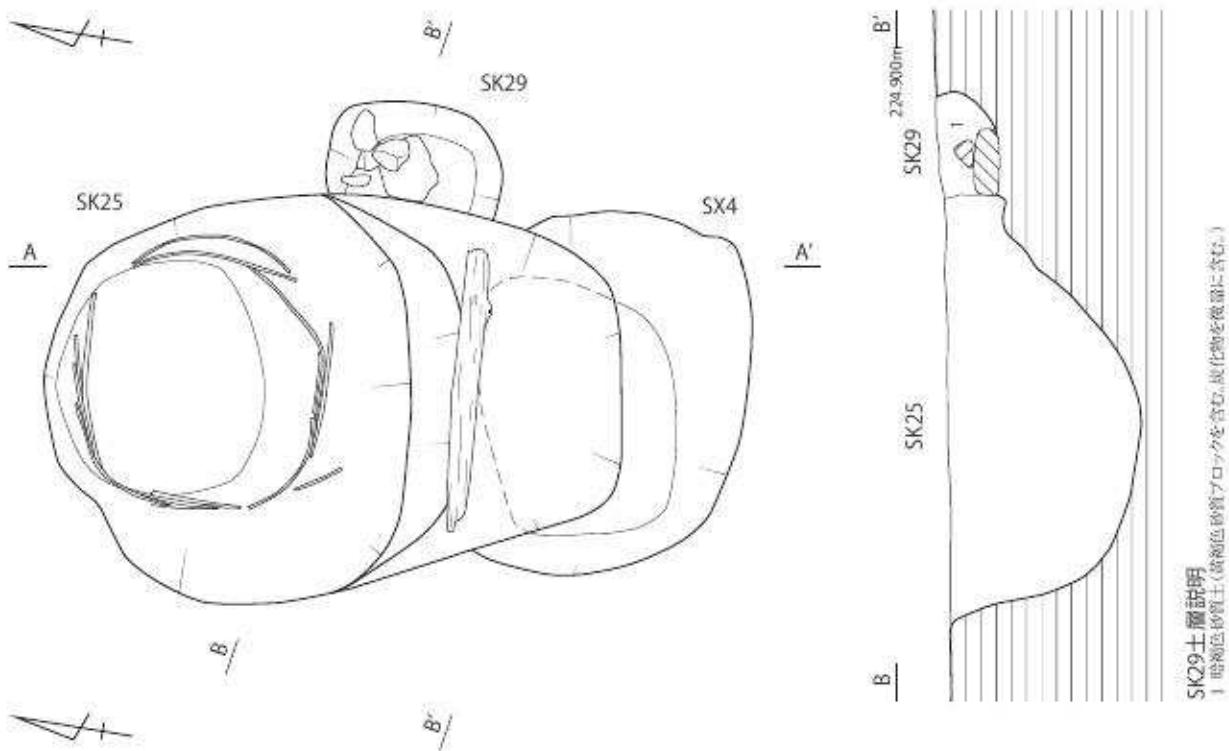
71は、土師質土器の焜炉である。口縁端部は平らにし、口縁直下の内面には、被熱痕が若干みられる。時期は不詳である。72は、土師質土器の焜炉（カマド型）である。窓部の枠の一部と背面に小孔1ヶ所がみられる。枠は幅1.0cmのものを貼り付けているが、欠損が著しいために全体的な形状は不明である。時期は不詳である。73は、木製品の柄杓である。水汲みなどに使用されたものか。74は、用途不明の木製品である。先端部に加工痕がみられるため、未製品の可能性が考えられる。

SK29（第16、27図75～77、図版11・20・22）

SK29は、SK25と西側で接して検出した、平面形が不整な梢円形の土坑である。東側はSK25に切られている。規模は、長軸約0.70m、残存短軸約0.38m、深さ約0.23mを測る。掘方の断面は内湾しながら緩やかに立ち上がる。土坑内には長さ0.12m、幅0.05mから長さ0.26m、幅0.20mの用途不明の自然石が混入する。埋土の状況は、暗褐色砂質土の1層がみられる。遺物は土師質土器片、瓦片、陶磁器片が出土した。

出土遺物

75は、肥前系の髪油壺である。底部を消失するが、重心の低い小さな容器と思われる。体部には梅文がみられる。時期は18世紀代が想定できる。76は、土師質土器の内耳鍋である。口径が30cm前後で、深いものである。口縁端部が上下に肥厚し、端面がやや斜行し凹線状に窪み内耳への移行が若干屈曲する。体部と底部との間に明瞭な稜線をもたない。内面には、横位の刷毛目を施す。外側の一部にススの付着がみられる。時期は16世紀～17世紀代が想定できる。77は、瓦の棟瓦で、燻瓦である。



第16図 B区 SK25・29、SX4 実測図 (1:30)

SK30（第17図、図版12）

SK30は、SK31の西側で隣接して検出した、平面形が梢円形の土坑である。規模は、長軸約0.66m、短軸約0.54m、深さ約0.21mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、灰黄色砂質土から灰黄褐色砂質土の3層がみられる。遺物は出土していない。

SK31（第17・27図78、図版12・22）

SK31は、SK30の東側で隣接して検出した、平面形が不整な梢円形の土坑である。規模は、長軸約1.01m、短軸約0.81m、深さ約0.24mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、灰黄色砂質土と灰黄褐色砂質土の2層がみられる。遺物は、瓦質土器が出土した。

出土遺物

78は、瓦質土器の鍋の破片である。端面はやや斜行し、口縁直下に稜をもつ。時期は不詳である。

SK32（第18・27図79、図版12・22）

SK32は、SK33の南側に接して検出した、平面形が梢円形の土坑である。また北側はSK33に切られている。規模は、長軸約1.34m、短軸約1.31m、深さ約0.68mを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。埋土の堆積状況は、明黄褐色粘土と灰白色粘土と灰黄褐色砂質土の混合土から褐灰色砂質土の3層がみられる。遺物は、陶磁器片などが出土した。

出土遺物

79は、肥前系の皿である。文様は見込みに蒟蒻印判による五弁花文と唐草文がみられる。時期は18世紀中頃の時期が想定できる。

SK33（第18・27図80、図版12・22）

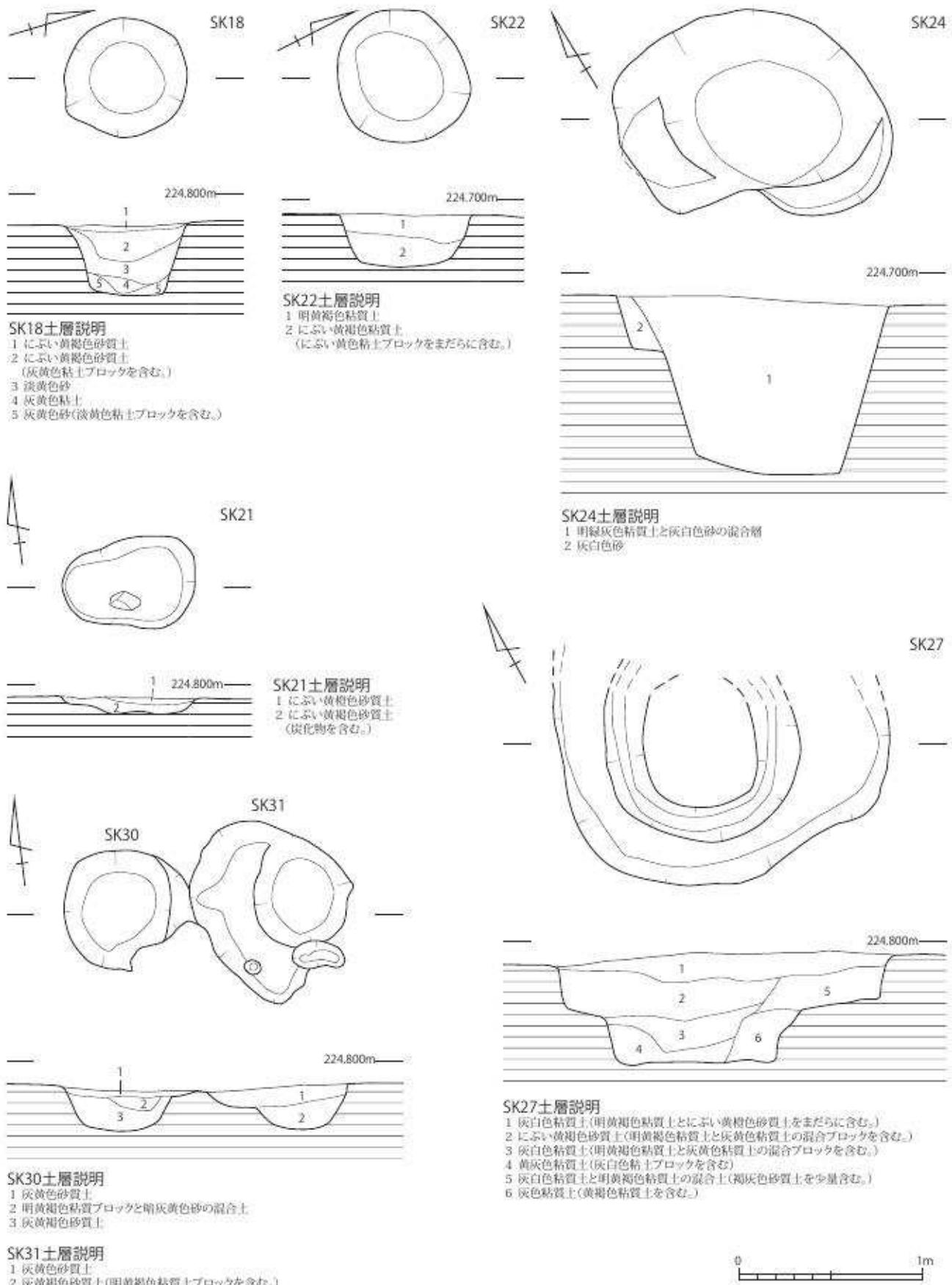
SK33は、SK32の北側に接して検出した、平面形が梢円形の土坑である。また南側はSK32を切っている。規模は、長軸約0.66m、短軸約0.52m、深さ約0.38mを測る。この土坑内には、土師質土器の甕が埋設されていることから埋甕土坑と考えられる。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、明黄褐色砂質土と灰白色粘土の混合土から灰黄色粘質土の5層がみられる。遺物は、土師質土器、陶磁器が出土した。

出土遺物

80は、肥前系の碗である。文様は見込みにかなりくずした、「壽」の字を染付し、体部外面には梵字文の崩し文様を施す。時期は18世紀後半から19世紀前半が想定できる。

SK34（第18図、図版12）

SK34は、SK35の東側に接して検出した、平面形が不整な長方形の土坑である。また西側はSK35に切られている。規模は、残存長軸約0.98m、短軸約0.57m、深さ約0.10mを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。埋土の堆積状況は、にぶい黄褐色砂質土の1層がみられる。遺物は、図化不能な土師質土器片（鍋）が出土した。



第 17 図 B 区 SK18・21・22・24・27・30・31 実測図 (1 : 30)

SK35（第18・27図81、図版12・22）

SK35は、SK34の西側に接して検出した、平面形が不整な橢円形の土坑である。また東側はSK34を切っている。規模は、長軸約0.84m、短軸約0.79m、深さ約0.42mを測る。壁の立ち上がりは逆台形を呈する。埋土の堆積状況は、にぶい黄褐色砂質土の1層がみられる。遺物は、陶磁器片が出土した。構築した時期は、出土遺物から18世紀後期頃と考えられる。

出土遺物

81は、肥前系磁器の染付（西洋コバルト）の碗である。文様は見込みに詳細不明の文様がみられる。時期は19世紀後半が想定できる。

SK37（第19・28図82～83、図版13・23）

SK37は、SE7の南側約1.70mで検出した、平面形が不整な長方形の土坑である。規模は、長軸約2.0m、短軸約1.54m、深さ約0.41mを測る。壁の立ち上がりは逆「ハ」字形を呈する。埋土の堆積状況は、にぶい黄褐色砂質土から褐灰色粘質土の7層がみられる。遺物は陶磁器片が出土した。

出土遺物

82は、肥前系の碗の破片である。文様は外面に草花文がみられる。また、内面の胴部下半に斜め方向の削り痕が残る。時期は17世紀後半が想定できる。83は、肥前系の青磁碗である。時期は不詳である。

SK41（第18図 図版14）

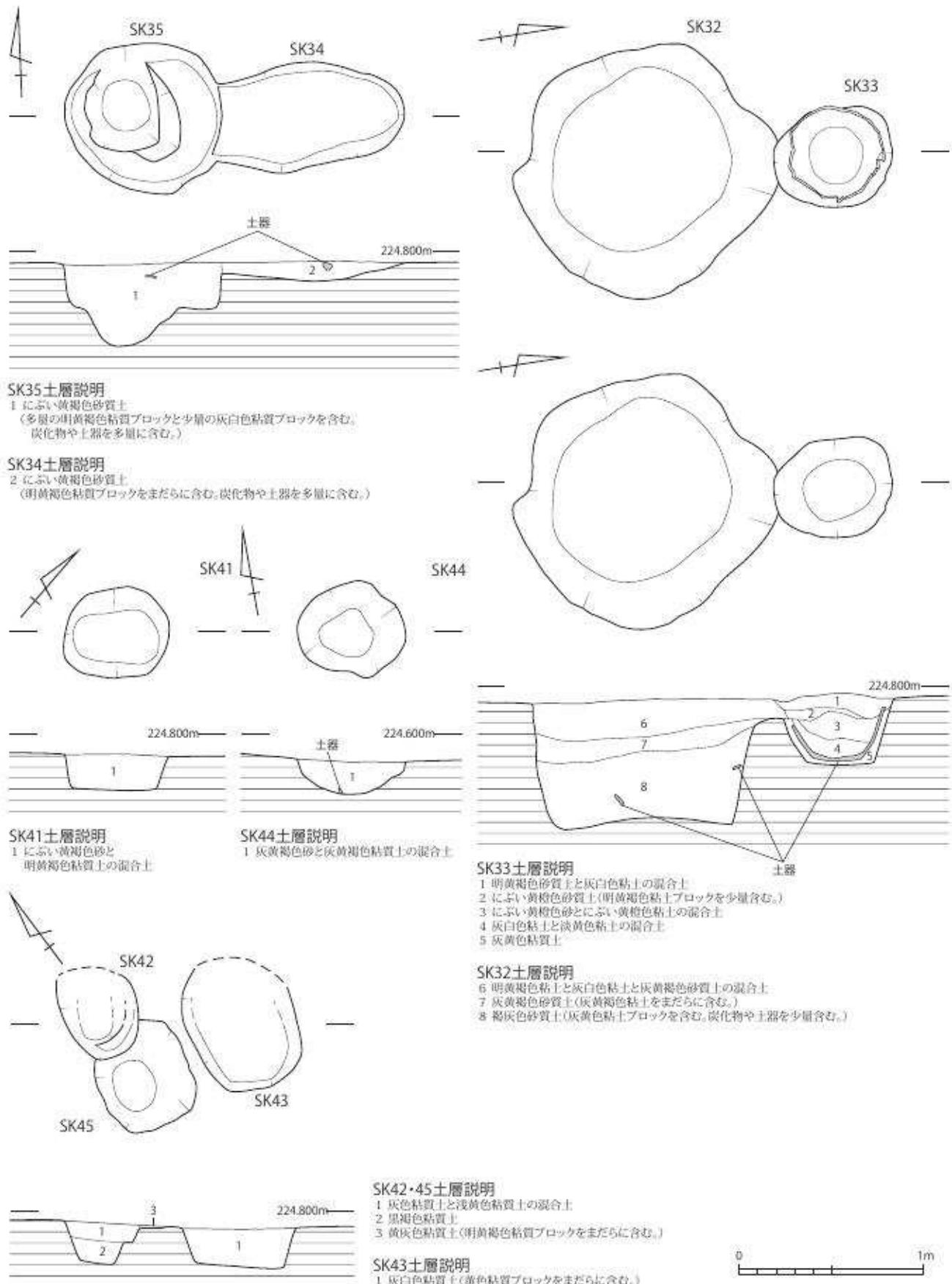
SK41は、SK33の北東側約2.0mで検出した、平面形が橢円形の土坑である。規模は、長軸約0.61m、短軸約0.48m、深さ約0.19mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、にぶい黄褐色砂と明黄褐色粘質土の混合土の1層がみられる。遺物は出土していない。

SK42（第18図 図版13）

SK42は、SK45と南側に接して検出した、平面形が橢円形の土坑である。また北側は後世の暗渠排水により欠失する。規模は、残存長軸約0.43m、短軸約0.39m、深さ約0.22mを測る。壁の立ち上がりは逆台形を呈する。埋土の堆積状況は、灰色粘質土と浅黄色粘質土の混合土と黒褐色粘質土の2層がみられる。遺物は出土していない。

SK43（第18図 図版13）

SK43は、SK45の東側約0.08mで検出した、平面形が不整な長方形の土坑である。また北側は後世の暗渠排水により欠失する。規模は、長軸約0.74m、短軸約0.56m、深さ約0.20mを測る。壁の立ち上がりは逆台形を呈する。埋土の堆積状況は、灰白色粘質土の1層がみられる。遺物は出土していない。



第18図 B区 SK32～35・41～45 実測図 (1:30)

SK44（第18図 図版13）

SK44は、SK18の南東側約3.30mで検出した、平面形が橢円形の土坑である。規模は、長軸約0.58m、短軸約0.45m、深さ約0.18mを測る。壁の立ち上がりは逆台形を呈する。埋土の堆積状況は、灰黄褐色砂と灰黄褐色粘質土の混合土の1層がみられる。遺物は、図化不能な土師質土器片が出土した。

SK45（第18図 図版13）

SK45は、SK42の北側に接して検出した、平面形が不整な長方形の土坑である。規模は、残存長軸約0.56m、短軸約0.50m、深さ約0.22mを測る。壁の立ち上がりは逆台形を呈する。埋土の堆積状況は、黄灰色粘質土の1層がみられる。遺物は、図化不能な陶磁器片が出土した。

SK47（第19・28図84、図版14・23）

SK47は、SE3の北東側約0.50mで検出した、平面形が橢円形の土坑である。規模は、長軸約0.55m、短軸約0.29m、深さ約0.22mを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。この土坑内には、備前焼の甕の底部を欠いたものを埋設しており、小規模な井戸が想定でき、備前焼の甕を井戸枠として転用して使用した可能性が考えられる。埋土の堆積状況は、暗灰黄色砂質土から灰色粘質土の5層がみられる。遺物は、備前焼の甕の転用品が出土した。

出土遺物

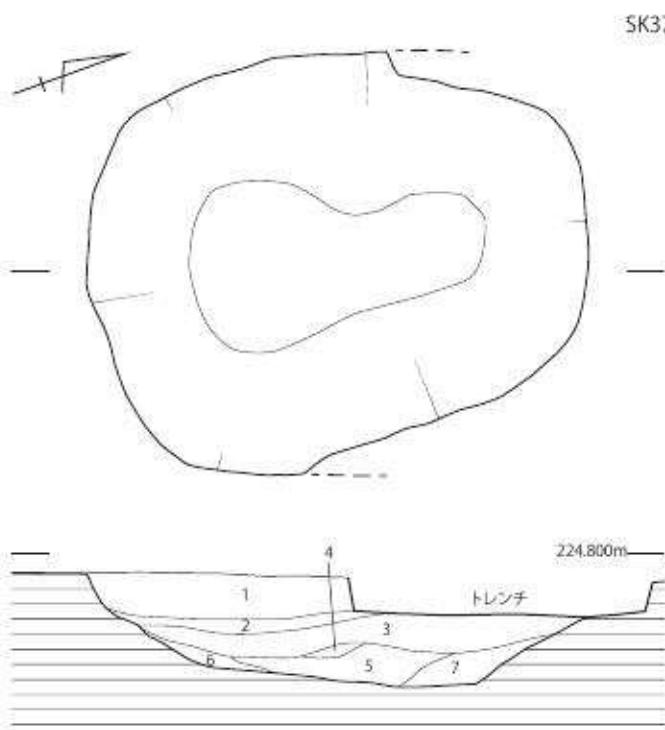
84は、備前焼の甕の転用品である。大きさは口径40.0cm、器高75.0cm、底径32.6cmを測る。調整は、胴部下半が縦方向で、肩部周辺は斜方向のヘラ削りを施す。口縁の内側から器表の全面にわたって茶灰色に発色した塗り土を施すため、器表の整形痕は観察できない。また、底部を意識的に欠いたもので、小規模な井戸の井戸枠として転用し使用された可能性が高いと思われる。時期は、18世紀代が想定できる。

SK48（第19図、図版13）

SK48は、SK8の南東側約1.10mで検出した、平面形が長方形の土坑である。規模は、長軸約0.66m、短軸約0.52m、深さ約0.38mを測る。壁の立ち上がりは、垂直を呈する。土坑の底面には、用途不明の板状木製品が埋設されている。埋土の堆積状況は、褐灰色粘質土の1層がみられる。遺物は出土していない。

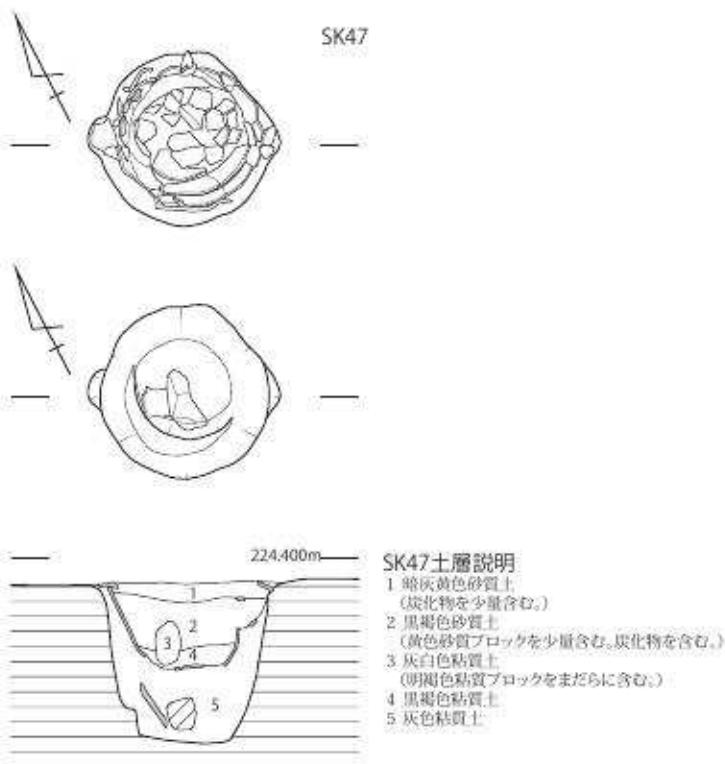
SK50（第19図、図版14）

SK50は、SE6の南東側約1.40mで検出した、平面形が橢円形の土坑である。規模は、長軸約0.71m、短軸約0.68m、深さ約0.81mを測る。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直を呈する。土坑内には、竹製の籠の残片が残っていることから井戸跡の可能性も考えられる。埋土の堆積状況は、黄褐色砂質土と灰白色砂質土と黄褐色粘質土の混合土から灰色砂質土の3層がみられる。遺物は、竹製の籠片が出土したが、依存状態が悪く図化不能である。



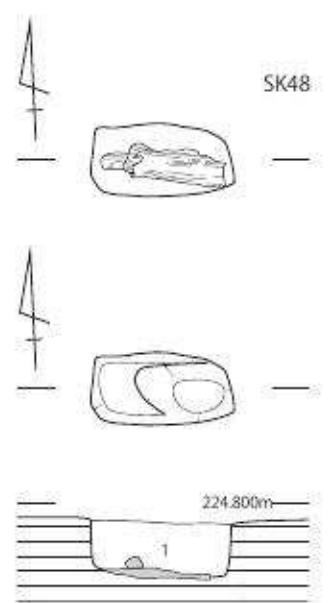
SK37土層説明

- 1 にぶい黄褐色砂質土
- 2 にぶい黄褐色土
- 3 灰黃褐色砂質土(明黃褐色粘質ブロックを含む。)
- 4 褐灰色砂質土
- 5 暗灰黄色粘質土(褐色粘質ブロックと淡黄色粘質ブロックを幾層に含む。)
- 6 褐灰色粘質土
- 7 褐灰色粘質土(淡黄色粘質ブロックを微量に含む。炭化物を微量に含む。)



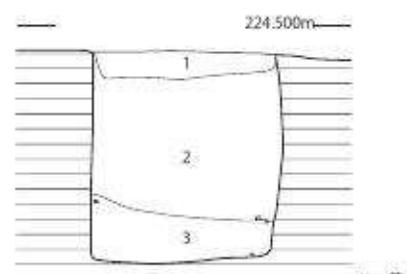
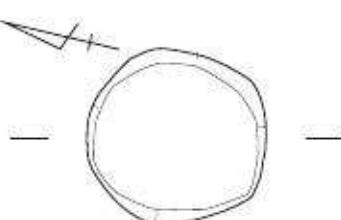
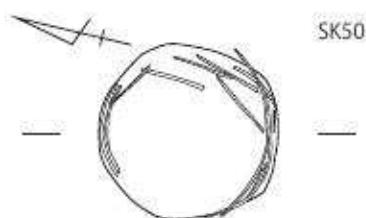
SK47土層説明

- 1 暗灰黄色砂質土
(炭化物を少量含む。)
- 2 黒褐色砂質土
(黄色砂質ブロックを少量含む。炭化物を含む。)
- 3 灰白色粘質土
(明褐色粘質ブロックをまだらに含む。)
- 4 黑褐色粘質土
- 5 灰色粘質土



SK48土層説明

- 1 褐灰色粘質土
(黄褐色粘質土や灰黄色砂質ブロックをまだらに含む。)



SK50土層説明

- 1 黄褐色砂質土と灰白色砂質土と黄褐色粘質土の混合土
- 2 明オリーブ灰色粘質土(明黃褐色粘質土をまだらに含む。)
- 3 灰色砂質土

0 1m

第19図 B区 SK37・47・48・50 実測図 (1:30)

溝状遺構

溝状遺構は、6条（SD1～6）を検出した。また、SD2～6の5基は近現代の溝であることが確認できたため欠番とした。

SD1（第20・28図85～86、図版14・23）

SD1は、SE1の北側約1.70mで検出した、平面形が長方形の溝状遺構である。北東側と西側は調査区外に延びるものと考えられる。規模は、残存で長さ約9.24m、幅約1.0m、深さ約0.32mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、暗褐色土の1層がみられる。遺物は、土師質土器、陶磁器が出土した。

出土遺物

85は、肥前系の皿である。体部の内外面に灰釉がみられる。また内面には足ハマ痕、蛇の目高台の端部には釉ハギ痕が残る。時期は18世紀中頃～19世紀代が想定できる。86は、土師質土器の羽釜である。調整はナデ後、刷毛目を施す。体部の中央付近に羽部を貼り付ける。羽部以下にススの付着がみられる。時期は18世紀代が想定できる。

性格不明遺構

性格不明遺構は、29基（SX1～29）を検出した。そのうち、SX1～3、5～10、12～29の27基は近現代の攪乱であることが、確認できたため欠番とした。

SX4（第16図、図版11）

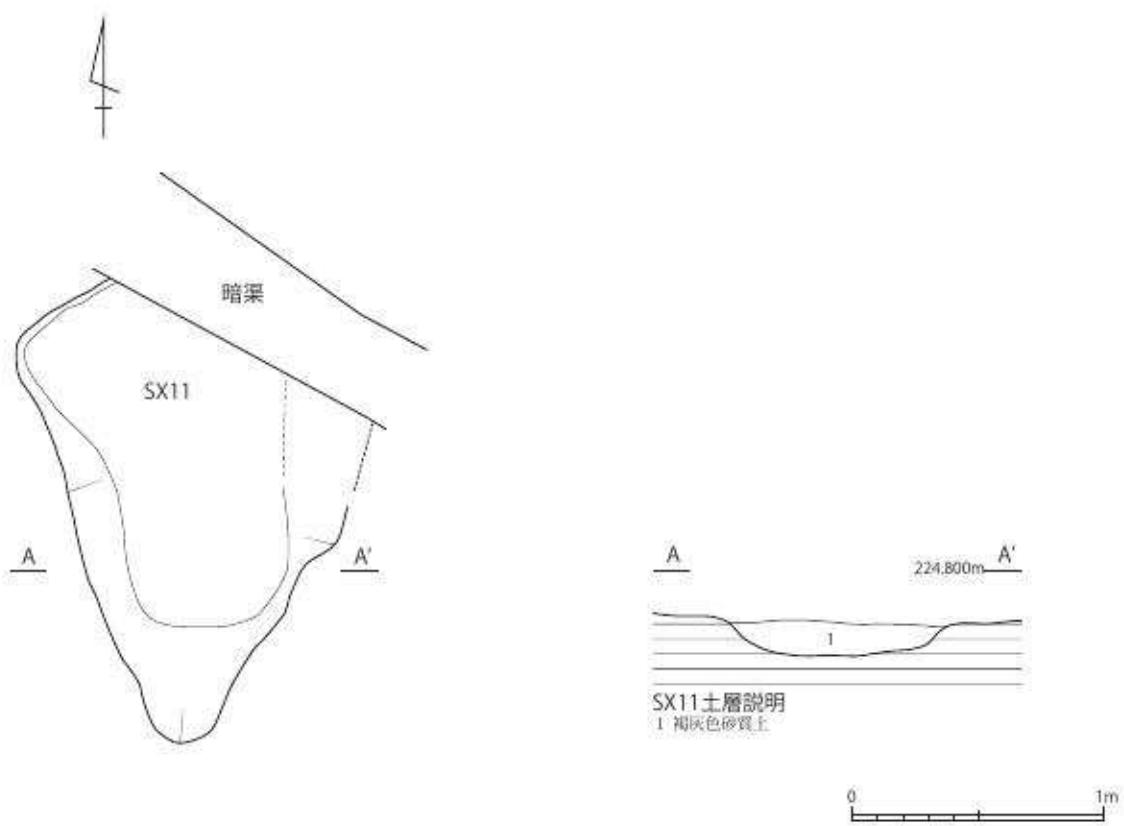
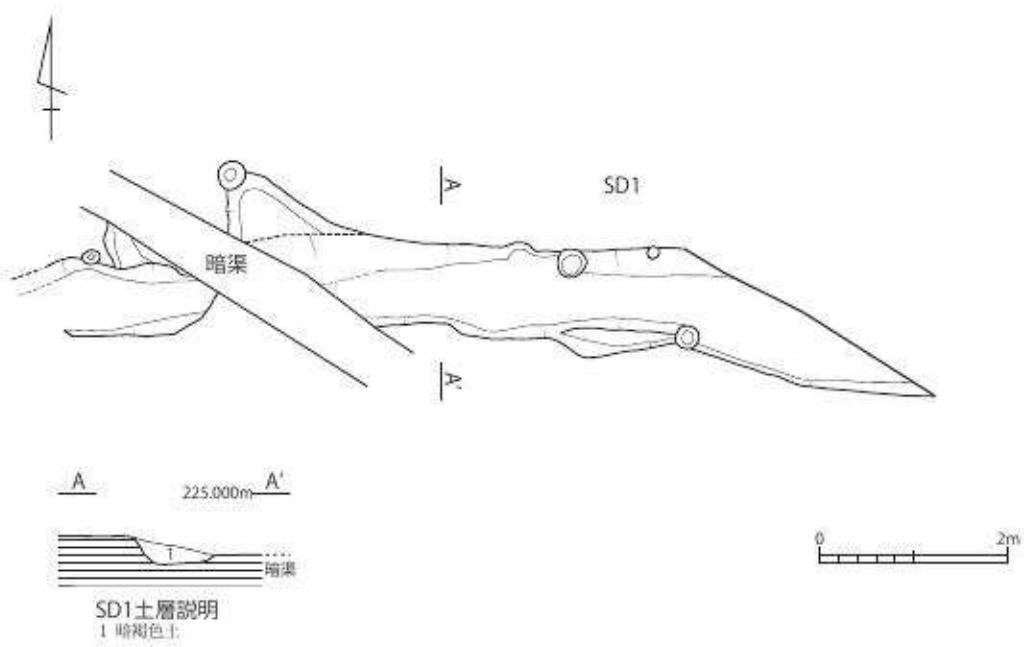
SX4は、SK25の南側で接して検出した、平面形が梢円形の性格不明遺構である。北側はSK25に切られている。規模は、長軸約1.40m、残存短軸約1.14m、深さ約0.84mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。土坑内には、竹製の籠の残片と用途不明の木杭片が残っていることから井戸跡の可能性も考えられる。埋土の堆積状況は、灰白色砂質からオリーブ灰色砂質土の6層がみられる。遺物は、炭化不能な竹製の籠片が出土した。

SX11（第20・28図87～88、図版14・22・23）

SX11は、SD1の北西側約2.60mで検出した、平面形が不整な梢円形の性格不明遺構である。北側は後世の暗渠によって切られている。規模は、長軸約1.86m、残存短軸約1.06m、深さ約0.14mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、褐灰色砂質土の1層がみられる。遺物は、土師質土器、陶磁器などが出土した。

出土遺物

87は、土師質土器の羽釜である。羽部は貼付けの後ナデで、羽部下方は竈で使用したのか多量のススの付着がみられる。時期は18世紀代が想定できる。88は、肥前系の碗である。文様は口縁内面に四方櫛文、見込みに蒟蒻印判による五弁花文がみられる。時期は18世紀末～19世紀初頭が想定できる。



第 20 図 B 区 SD1、SX11 実測図 (SD1 - 1 : 80, SX11 - 1 : 30)

ピット（第9図、図版4）

P65は、SE3と東側で接した、平面形が円形のピットである。SE3に付随するものと考えられるが、用途などは不明である。規模は、径約0.33m、深さ約0.54mを測る。埋土の状況は、にぶい黄橙色砂質土から灰白色粘土の3層がみられる。遺物は出土していない。

その他の遺物（第29図89～105、図版23）

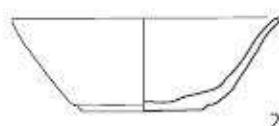
遺物は、試掘調査、表土剥ぎ中、精査中及び近現代攪乱土中などから出土したものである。89は、肥前系白磁の朝顔形の蓋である。時期は18世紀後半が想定できる。90は、堺・明石系の擂鉢である。櫛目の単位は8条のものである。時期は18世紀後半～19世紀前半が想定できる。91は、産地不詳の盤である。時期は不詳である。92は陶器の鉢である。93、94は、京・信楽系の灯明皿と受け皿である。内側は施釉で、外側が無釉である。受け部は欠失する。時期は19世紀代が想定できる。95は、肥前系の広東碗である。内面にハマの痕跡と断面に焼き継ぎ痕、高台端部は、釉ハギ痕がみられる。96は、肥前系の碗である。くらわんか手と思われる。時期は18世紀後半～19世紀前半が想定できる。97は碗である。コバルト釉で、手書きによる草花文がみられる。時期は19世紀後半が想定できる。98は、肥前系の端反碗である。底面の装飾は細筆で書かれている。時期は19世紀中頃が想定できる。

99は、陶胎染付の碗と思われる。産地は瀬戸・美濃系の可能性がある。時期は18世紀後半～19世紀初頭が想定できる。100は、土師質土器の鍋である。破片のため、明確ではないが内耳鍋になる可能性がある。内面には横位の刷毛目を施す。外面の所々にススの付着がみられる。時期は18世紀代が想定できる。101は、肥前系陶器の大皿である。調整は全体的に刷毛目で、透明釉を施釉する。時期は18世紀代が想定できる。102は、肥前系の皿である。内面に施釉がみられる。時期は不詳である。103は、龍泉窯系の青磁台付皿若しくは水盤と思われる。破片のため、時期などの詳細は不明である。104は、肥前系の碗である。文様は、草花文がみられる。時期は18世紀中頃～18世紀末が想定できる。105は、土師質土器の鍋である。器表面の全体にススの付着がみられる。時期は不詳である。

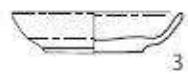
A-1 区



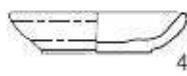
1



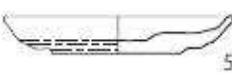
2



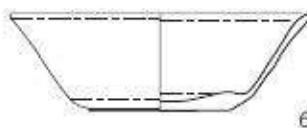
3



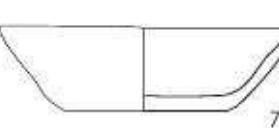
4



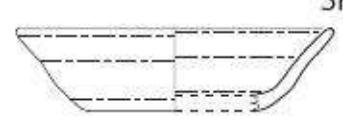
SK3



6



7



SK4



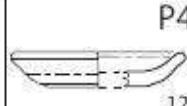
9



10



11

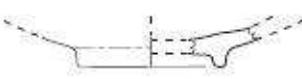


P4 P13

A-2 区



14



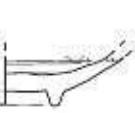
15



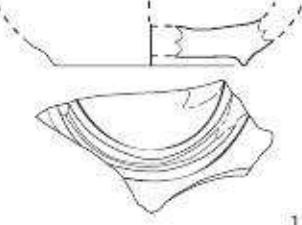
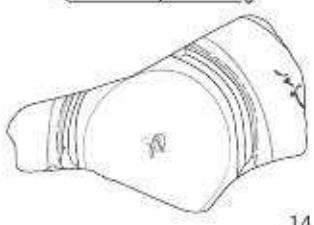
16



17



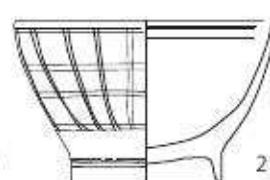
18



19



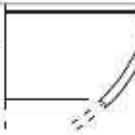
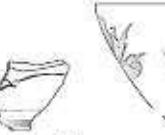
20



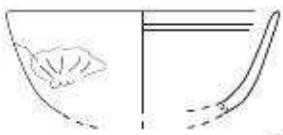
21



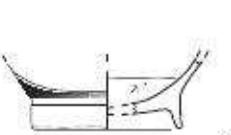
22



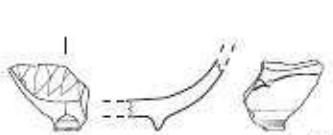
23



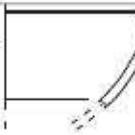
24



25



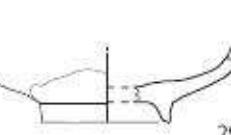
26



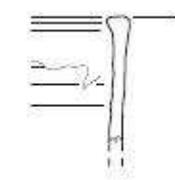
27



28



29



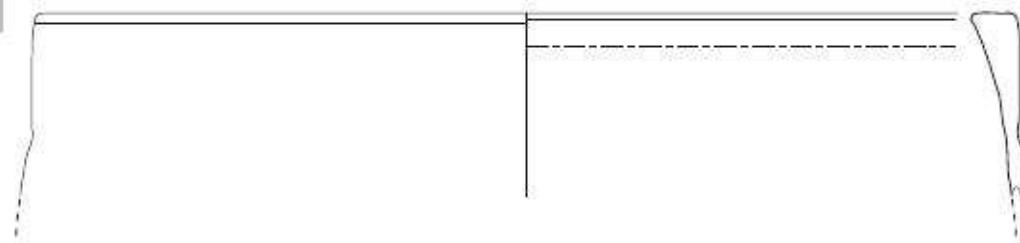
30

0 10cm

第21図 出土遺物実測図1 (1:3)

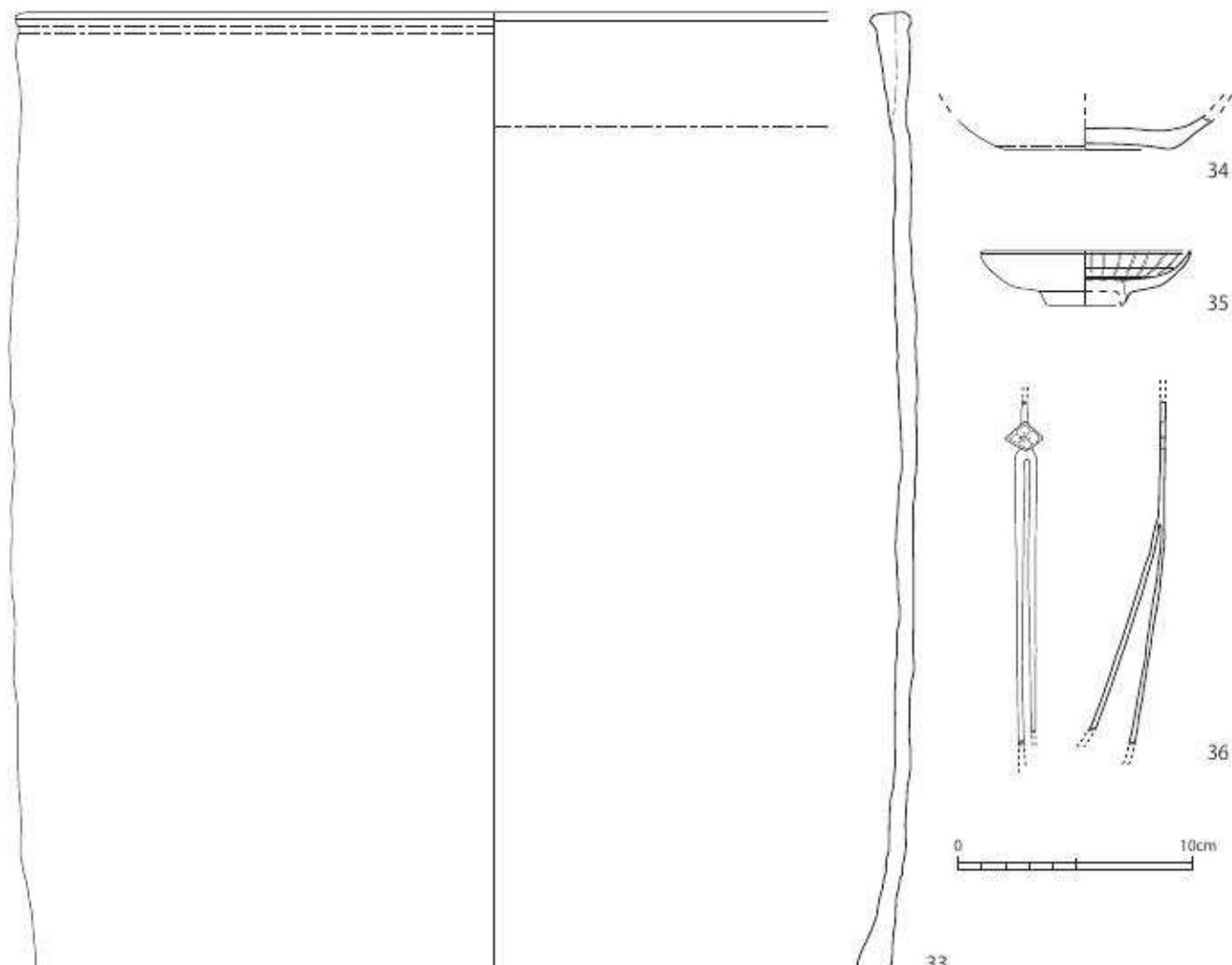
B区

SE4



31

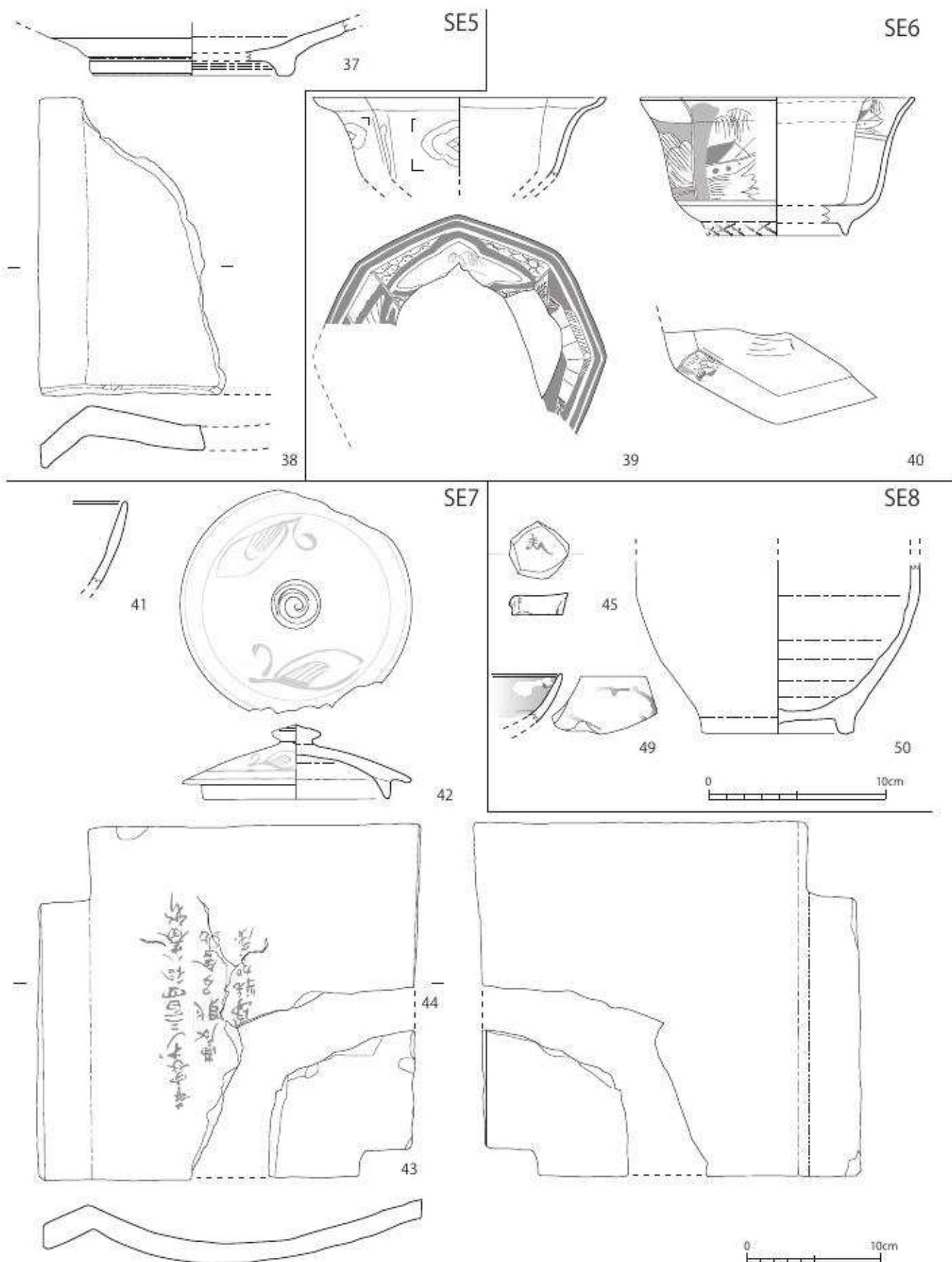
32



33

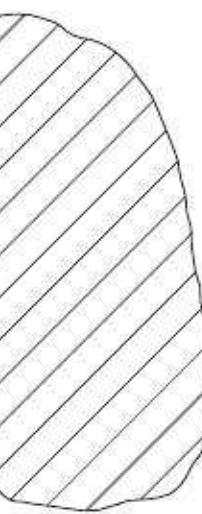
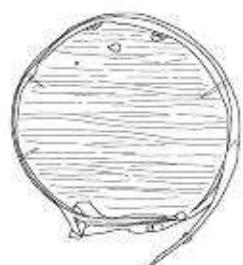
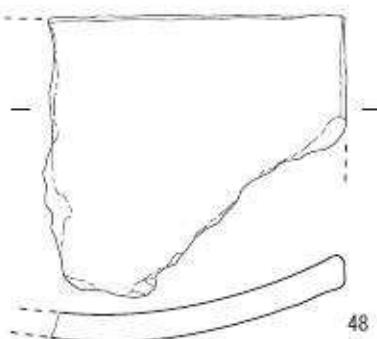
36

第22図 出土遺物実測図2 (31～33-1:5、34～36-1:3)



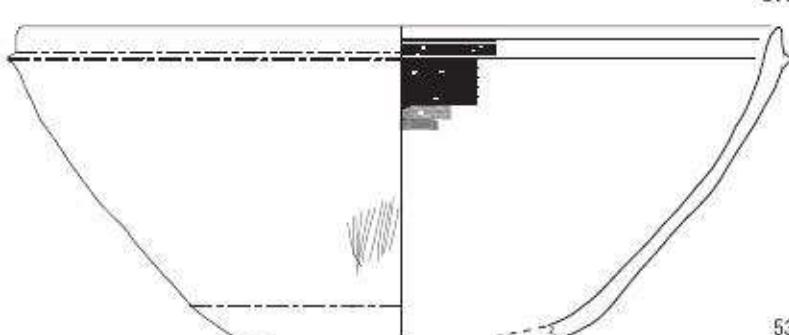
第23図 出土遺物実測図3 (38・43・44 - 1:4, 37・39~42・45・49・50 - 1:3)

SE8

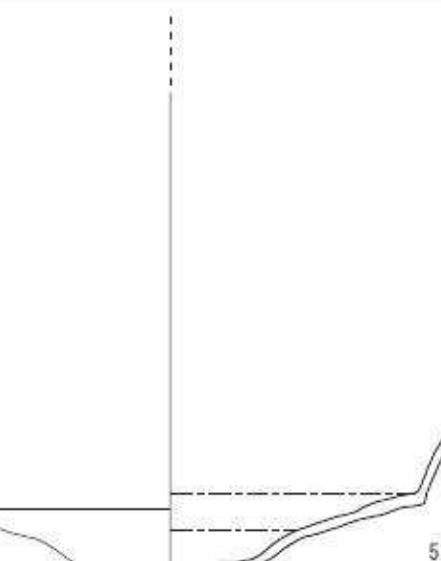
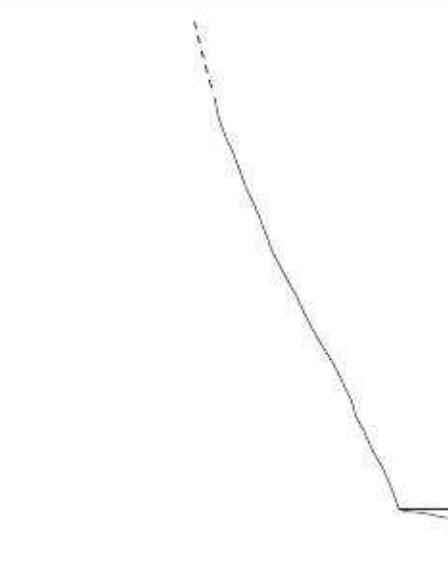


0 10cm

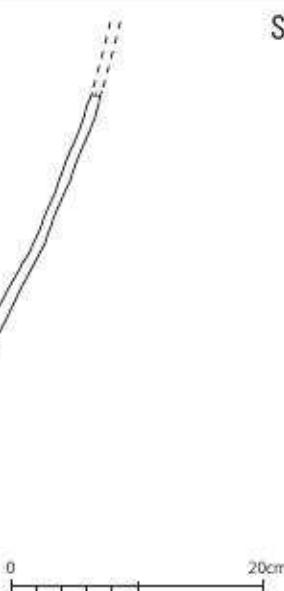
SK8



SK14

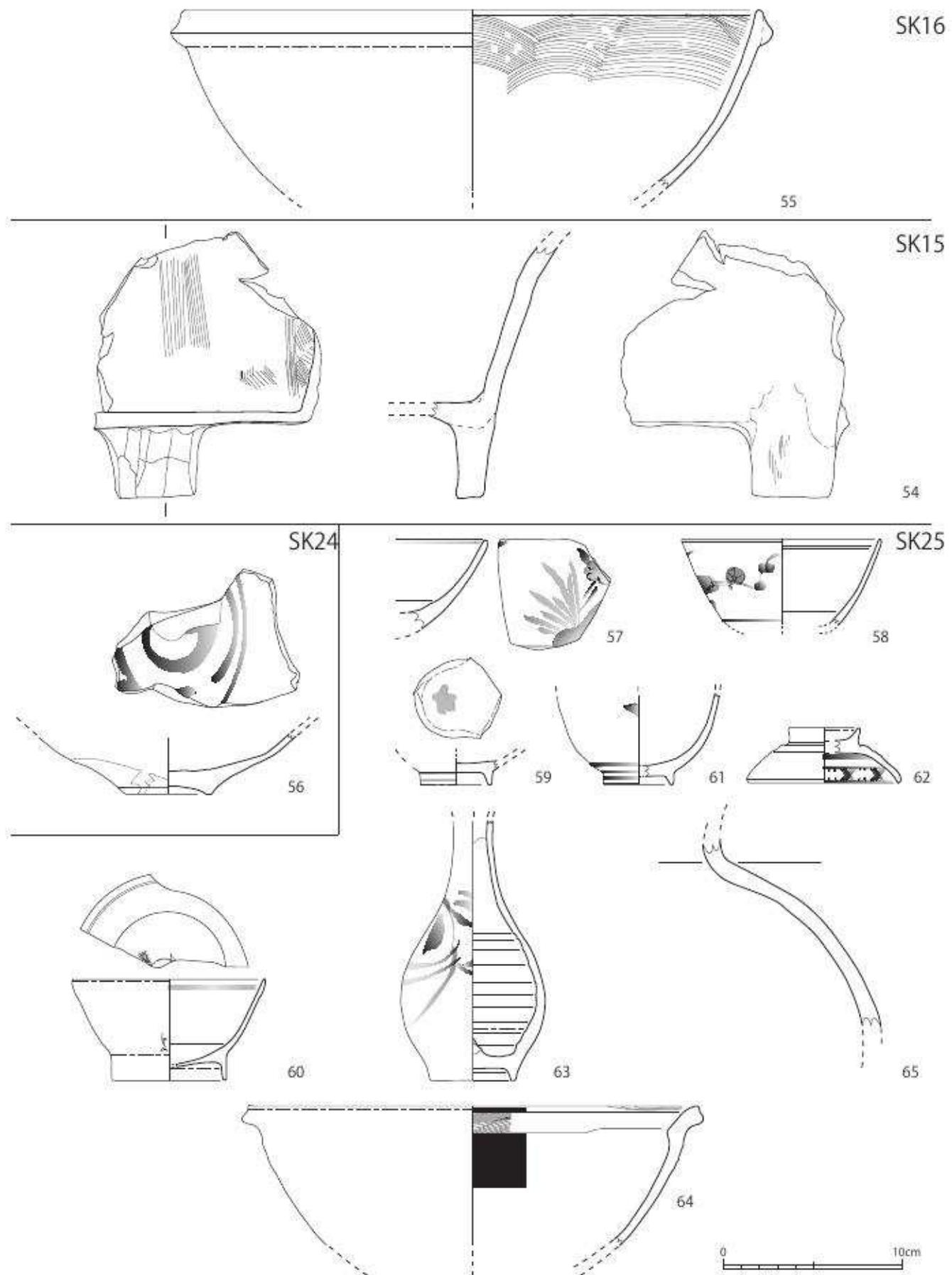


SK6

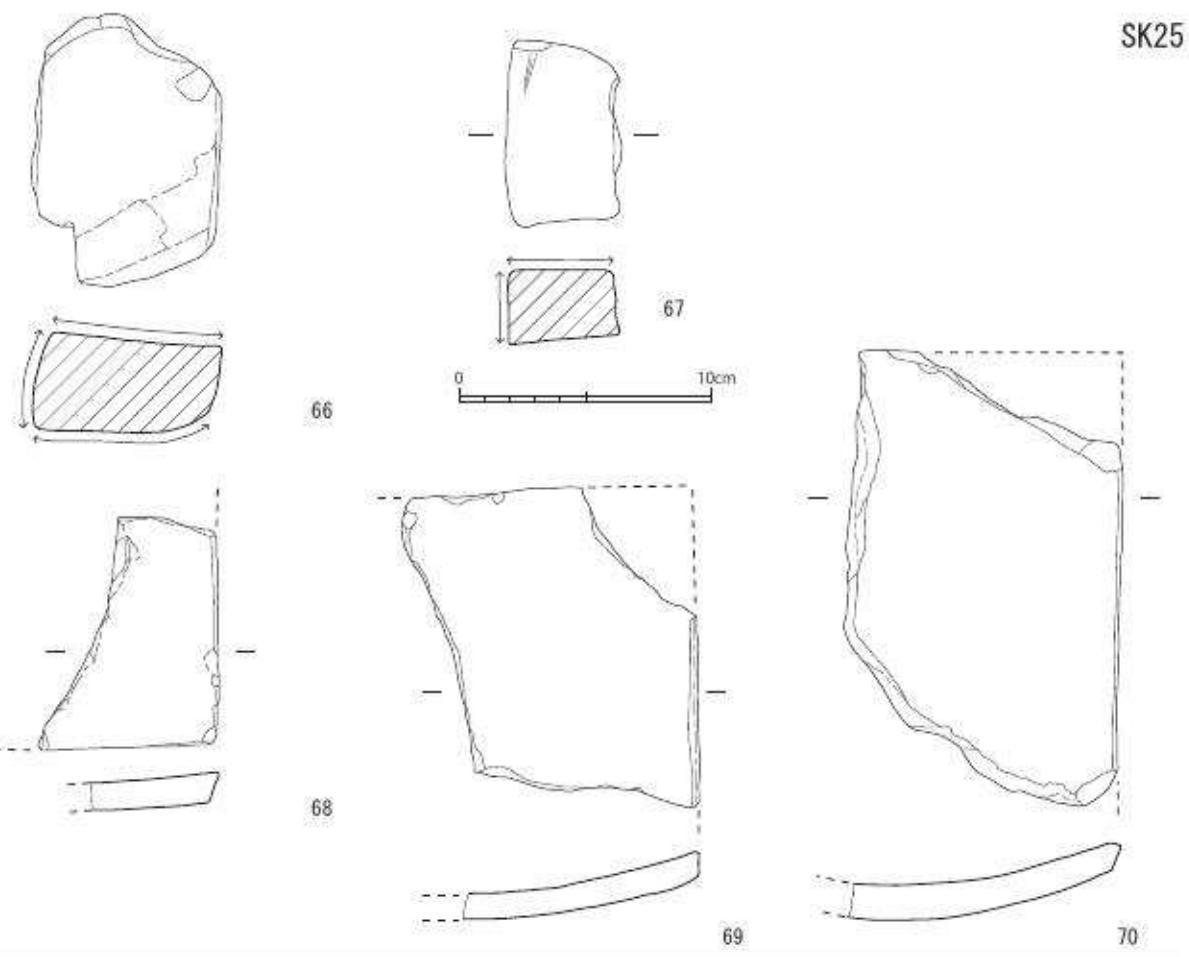


0 20cm

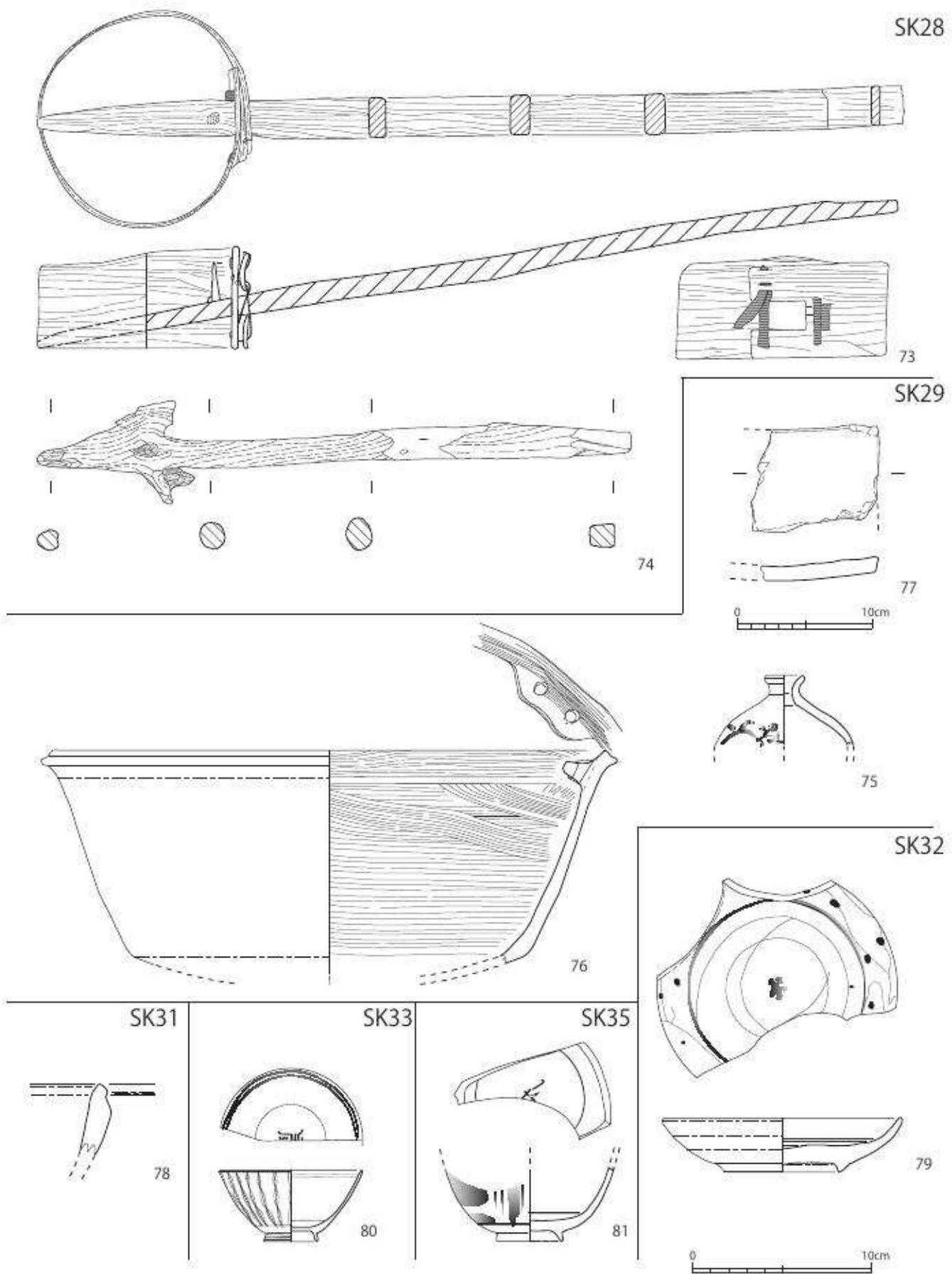
第24図 出土遺物実測図4 (46～48 - 1:4, 52～53 - 1:3, 51 - 1:6)



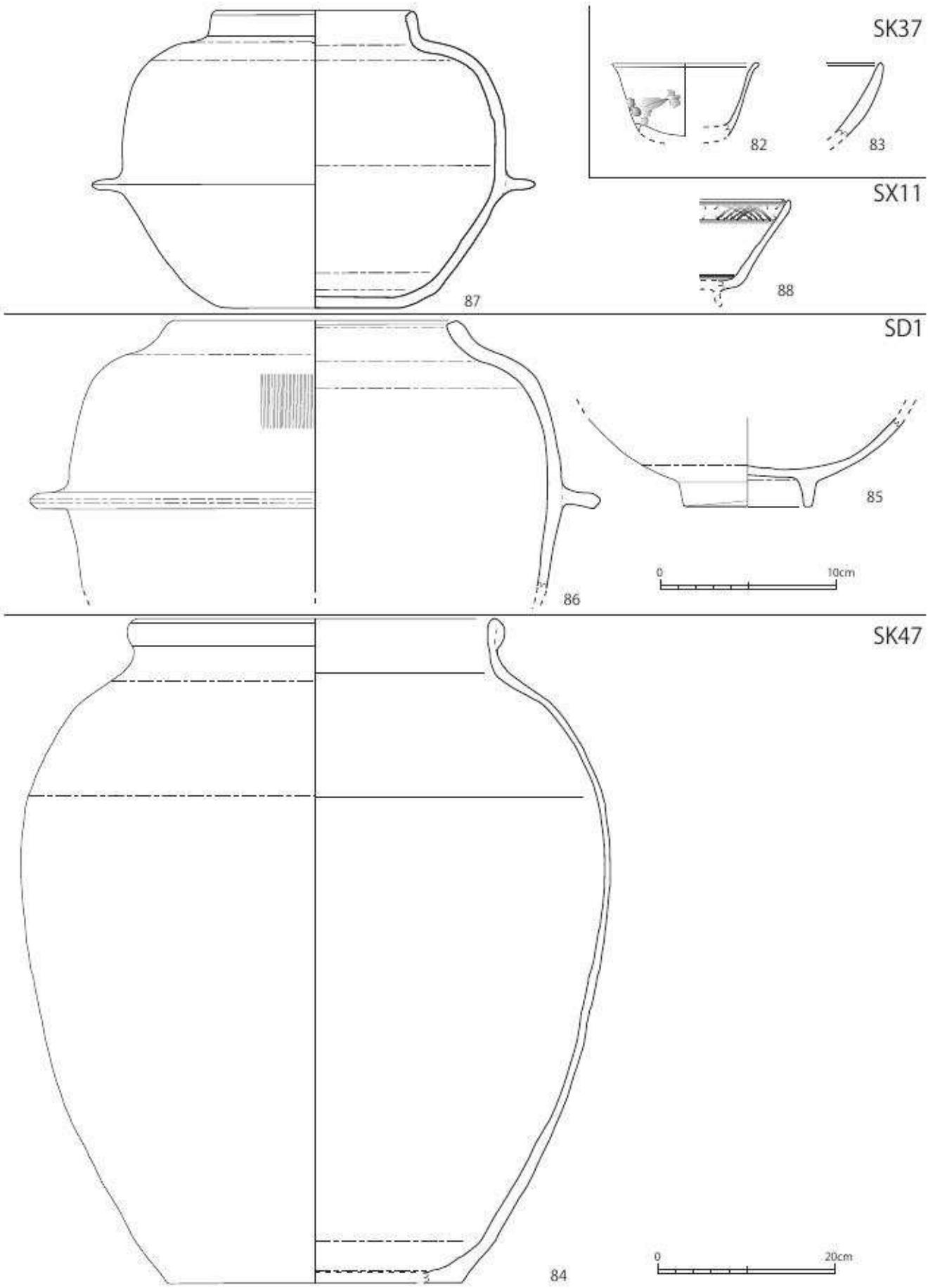
第25図 出土遺物実測図5 (1:3)



第26図 出土遺物実測図6 (66・67 - 1:3、68~70・72 - 1:4)

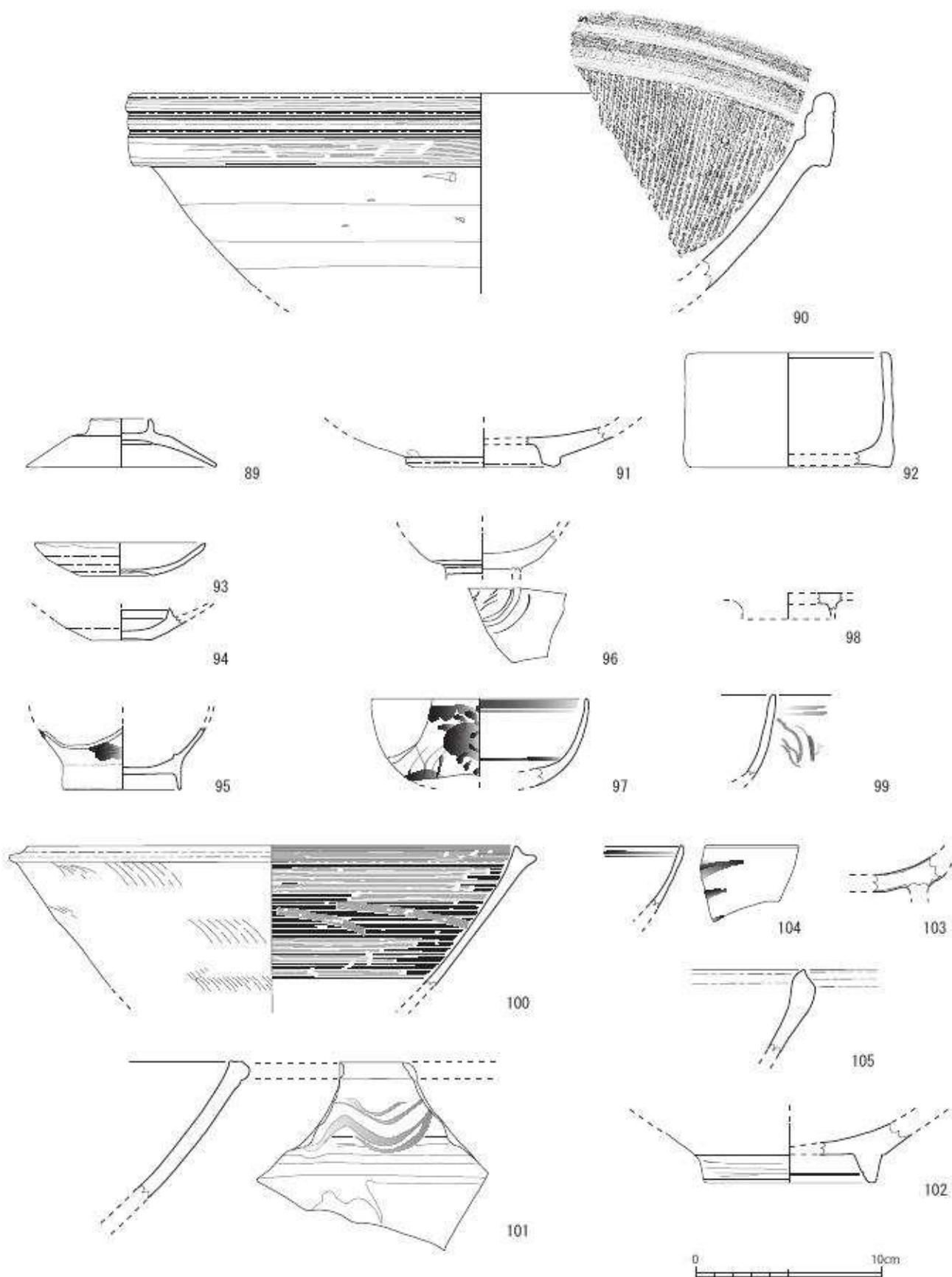


第27図 出土遺物実測図7 (73・74・77-1:4、75・76~81-1:3)



第28図 出土遺物実測図8 (82・83・85～88 - 1:3、84 - 1:6)

その他の遺物



第29図 出土遺物実測図9 (1:3)

第1表 横田3号遺跡出土遺物観察表
土器

遺物 番号	出土地点	器別	器種	法量()は復元値 (cm)	焼成	胎土	色調	調整			備考
								外	内	底	
1	A-1区 SK3	土師質土器	杯	口径: 11.8 器高: 3.4 底径: 5.0	真	密	外面: にぶい黄 内面: にぶい黄	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
2	A-1区 SK3	土師質土器	杯	口径: 10.8 器高: 3.7 底径: 5.0	良	密	外面: 浅黄 内面: 浅黄	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
3	A-1区 SK3	土師質土器	小皿	口径: 6.8 器高: 1.6 底径: 4.0	良	密	外面: にぶい黄 内面: にぶい黄	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
4	A-1区 SK3	土師質土器	小皿	口径: 7.2 器高: 1.6 底径: 4.4	良	密	外面: にぶい橙 内面: 明黄褐	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
5	A-1区 SK3	土師質土器	小皿	口径: 9.0 器高: 1.5 底径: 6.2	良	やや粗	外面: 浅黄 内面: 浅黄	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り		底部スス付着	
6	A-1区 SK4	土師質土器	杯	口径: 12.0 器高: 3.9 底径: 5.6	良	密	外面: 橙 内面: 銀灰	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
7	A-1区 SK4	土師質土器	杯	口径: 11.9 器高: 3.4 底径: 6.5	不良	粗	外面: 浅黄 内面: 浅黄	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
8	A-1区 SK4	土師質土器	杯	口径: 12.6 器高: 3.3 底径: 7.2	良	粗	外面: 浅黄 内面: にぶい橙	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 不明			
9	A-1区 SK4	土師質土器	皿	口径: - 残存高: 2.2 底径: 4.8	良	密	外面: 橙 内面: 橙	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切りか		外面一部スス付着	
10	A-1区 SK4	土師質土器	皿	口径: - 残存高: 1.0 底径: 5.0	良	密	外面: 灰白 内面: にぶい黄	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
11	A-1区 SK4	土師質土器	小皿	口径: 7.3 器高: 2.0 底径: 5.4	良	密	外面: 橙 内面: 橙	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
12	A-1区 P4	土師質土器	小皿	口径: 6.8 器高: 1.4 底径: 4.2	良	密	外面: 灰黄褐 内面: 灰黄褐	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
13	A-1区 P13	土師質土器	小皿	口径: 7.0 器高: 1.4 底径: 4.6	良	密	外面: 浅黄 内面: 浅黄	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ 底面: 回転系切り			
31	B区 SE4	土師質土器	大甕	口径: (64.2) 残存高: 12.0 底径: -	良	やや粗	外面: 灰黄 内面: 灰黄	外面: 刷毛目 内面: 刷毛目、ナデ		輪積成形	
32	B区 SE4	土師質土器	大甕	口径: (70.4) 残存高: 12.9 底径: -	良	粗	外面: 灰白 内面: にぶい黄	外面: 刷毛目 内面: ナデ		輪積成形	
33	B区 SE4	土師質土器	井戸枠	口径: 63.5 器高: 68.0 底径: 58.5	良	密	外面: 灰白 内面: 灰白	外面: ナデ、刷毛目 内面: ナデ、刷毛目、指頭痕		輪積成形	
51	B区 SK6	土師質土器	甕	口径: - 残存高: 37.8 底径: 20.5	良	密	外面: 灰白 内面: 灰黄	外面: 刷毛目のちナデ 内面: 刷毛目、ナデ、指頭痕		輪積成形	
53	B区 SK14	土師質土器	鍋	口径: (30.0) 残存高: 12.6 底径: -	良	密	外面: にぶい黄 内面: 浅黄	外面: 刷毛目 内面: 刷毛目		外面全体スス付着	
54	B区 SK15	土師質土器	焜炉	口径: - 残存高: 13.0 底径: -	良	密	外面: 淡黄褐 内面: 淡黄褐	外面: ナデ 内面: 刷毛目、ナデ		脚部貼付	
55	B区 SK16	土師質土器	鍋	口径: (32.4) 残存高: 9.9 底径: -	不良	粗	外面: 橙 内面: 灰黄褐	外面: 刷毛目 内面: 刷毛目		内外面ともにスス付着	
64	B区 SK25	土師質土器	鍋	口径: (25.2) 残存高: 7.7 底径: -	良	密	外面: 赤橙 内面: 灰白				
65	B区 SK25	土師質土器	甕	口径: - 器高: - 底径: -	良	密	外面: 淡褐 内面: 淡褐	外面: ナデ 内面: ナデ、刷毛目		有鉢形	
71	B区 SK28	土師質土器	大甕	口径: (40.2) 残存高: 10.0 底径: -	良	密	外面: 灰白 内面: 灰黄	外面: ナデ 内面: ナデ			
72	B区 SK28	土師質土器	焜炉 (底部)	口径: (58.5) 残存高: 12.0 底径: -	良	密	外面: 橙 内面: 銀灰	外面: 刷毛目、ナデ 内面: 刷毛目、ナデ、ユビオサエ		スス付着	
72	B区 SK28	土師質土器	焜炉 (蓋部)	口径: - 残存高: 13.6 底径: -	良	やや粗	外面: 灰白 内面: 灰黄褐	外面: 刷毛目、ナデ 内面: 刷毛目、ユビオサエ		蓋部貼付 内面スス付着	
76	B区 SK29	土師質土器	内耳罐	口径: (30.8) 残存高: 11.9 底径: -	良	密	外面: 橙 内面: にぶい黄	外面: 回転ナデ 内面: 刷毛目		内耳部貼付 外面一部スス付着	
78	B区 SK31	瓦質土器	鍋	口径: - 器高: - 底径: -	良	密	外面: にぶい黄 内面: 黒	外面: ナデ 内面: ナデ		外面一部スス付着	
86	B区 SD1	土師質土器	羽釜	口径: (16.0) 残存高: 15.0 底径: -	良	密	外面: 灰黄 内面: 浅黄	外面: ナデのち刷毛目 内面: ナデ		鶴部貼付 体部下半スス付着	
87	B区 SX11	土師質土器	羽釜	口径: (11.0) 器高: 16.8 底径: 10.0	良	やや粗	外面: 暗灰黄 内面: 暗灰黄	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ		鶴部貼付 体部下半スス付着	
100	B区 近現代かく乱	土師質土器	鍋	口径: (26.0) 残存高: 7.6 底径: -	良	密	外面: にぶい橙 内面: 灰白	外面: 刷毛目 内面: ナデ		外面一部スス付着 内耳鍋の可能性あり	
105	B区 近現代かく乱	土師質土器	鍋	口径: - 器高: - 底径: -	良	粗	外面: にぶい黄 内面: 浅黄	外面: 不明 内面: 不明		外面全体にスス付着	

陶器

遺物番号	出土地点	器別	器種	法量()は復元値		胎土		装飾技法			製作		備考
				(cm)	胎土(cm)	胎土色	輪付・箱	文様	装飾特徴	製作地	製作年代		
29	A-2区 SD1	陶器	鉢 (香炉または 火入か)	口径: - 残存高: 28 底径: (3.2)	密	灰赤	陶胎焼付		外面-回転ナデ 内面-回転ナデ 底部-えぐり痕	肥前系	18C 代か	見込みに重ね 焼き痕跡あり	
34	B区 SE4	陶器	鍋類・瓶類等 の底部か	口径: - 残存高: 14 底径: 7.0	密	赤	外面-铁箱		外面-回転ナデ 内面-回転ナデ				
37	B区 SE5	陶器	鉢か	口径: - 残存高: 31 底径: (11.0)	密	にぶい 黄橙	铁轴		外面-刷毛目	肥前系か	18C 末-19C		
42	B区 SE7	陶器	蓋	口径: 12.9 器高: 4.2 つまみ径: 2.8	密	灰白	外面-灰釉	島二羽	外面-刷毛目 イッシン描き 内面-ナデ	京・信楽系か	18C 後半- 19C 初半頃	内銀スス付着	
52	B区 SK8	陶器	皿	口径: - 残存高: 3.1 底径: 4.0	密	にぶい 黄橙	外面一部-釉		外面-刷毛目 蛇の目釉ハギ 内面-蛇の目釉 ハギ 底部-えぐり痕	肥前系 (吉津か)	17C 後半		
56	B区 SK24	陶器	皿	口径: - 残存高: 3.4 底径: 4.8	密	にぶい 粗	灰釉		外面-刷毛目 内面-刷毛目 蛇の目釉ハギ	肥前系		内面-灰釉- 底部被熱痕あり	
75	B区 SK29	陶器	漬瓶	口径: 2.0 残存高: 4.0 底径: -	密	明赤灰	外面-釉	梅園か?	内面-回転ナデ		18C 代		
84	B区 SK47	陶器	甕	口径: (39.8) 器高: 75.0 底径: 32.6	密	灰赤			外面-ヘラ削り	猪前	18C 代	井戸枠への転 用品か?	
85	B区 SD1	陶器	皿か	口径: - 残存高: 5.0 底径: (7.2)	密	褐灰	外面上部-灰釉 内面-灰釉、 白釉		外面-刷毛目 底部-蛇の目釉 ハギ、ケズリ	肥前系	18C 中頃- 19C 代		
90	B区 試掘調査	陶器	擂鉢	口径: (37.6) 残存高: 10.6 底径: -	密	粗			内面-梅目8条	堺、明石	18C 後半- 19C 初半		
91	B区 試掘調査	陶器	盤	口径: - 残存高: 2.2 底径: (8.0)	密	浅黄橙			底部-ヘラケズ リ			内面足ハマ痕 あり	
92	B区 表土剥ぎ中	陶器	鉢(火入れか)	口径: (10.8) 器高: 6.2 底径: (11.0)	密	粗	外面-釉		外面-ナデ 内面-ナデ				
99	B区 精査中	陶器	碗か	口径: - 器高: - 底径: -	粗	灰白	陶胎焼付			瀬戸、 美濃系か?	18C 後半- 19C 初頭		
101	B区 近現代かく乱	陶器	大皿か	口径: - 器高: - 底径: -	密	にぶい 粗	透明釉		外面-刷毛目 内面-刷毛目 口縁部-釉ハギ	肥前系	18C 代		
102	B区 近現代かく乱	陶器	皿か	口径: - 残存高: 3.2 底径: (9.2)	密	赤褐	内-施釉		内面-刷毛目あり	肥前系 (吉津焼か)			

金属製品・木製品・石製品・瓦

遺物番号	出土地点	器別	器種	法量()は復元値			備考					
				(cm)	(cm)	重量(g)						
36	B区 SE4	金属器	簪	残存長: 14.8 幅: 1.6	厚さ: 0.2	7.48		全面に錆青付着				
38	B区 SE5		棟瓦	残存長: 22.8 残存幅: 14.0	厚さ: 2.1			焼瓦				
43	B区 SE7		棟瓦	残存長: 11.0 残存幅: 10.6	厚さ: 1.6			44と同一個体か				
44	B区 SE7		棟瓦	残存長: 26.6 残存幅: 28.2	厚さ: 1.6			四面に「寺家村三百四拾八番御農財局倉」(横)「鳥郷賀茂」の文字あり。 43と同一個体か				
46	B区 SE8	木製品	木製品容器	長さ: 桟12.0 高さ: 6.5								
47	B区 SE8	石製品	地蔵菩薩	總高: 26.0 堆藏高: 19.5 最大幅: 23.8	上幅: 9.0 下幅: 21.0 下奥行: 11.9 高さ: 4.6	9600		花崗岩				
48	B区 SE8		棟瓦	残存長: 14.8 残存幅: 16.1	厚さ: 1.5							
66	B区 SK25	石製品	吉川砥石	長さ: 10.7 幅: 7.3	厚さ: 3.8	451.34		熟麥質凝灰岩。18C				
67	B区 SK25	石製品	吉川砥石	長さ: 7.4 幅: 4.6	厚さ: 3.0	179.11		熟麥質凝灰岩。18C				
68	B区 SK25		棟瓦	残存長: 12.2 残存幅: 9.1	厚さ: 1.5			焼瓦				
69	B区 SK25		棟瓦	残存長: 21.2 残存幅: 14.6	厚さ: 1.9			焼瓦				
70	B区 SK25		棟瓦	残存長: 17.0 残存幅: 15.6	厚さ: 1.5			焼瓦				
73	B区 SK28	木製品	柄杓	桟: 16.1 残存長: 64.3 高さ: 7.5								
74	B区 SK28	木製品	用途不明 (未製品か)	長さ: 41.2 最大幅: 7.7	最大厚さ: 1.9							
77	B区 SK29		棟瓦	残存長: 10.6 残存幅: 11.8	厚さ: 1.5			焼瓦				

磁器

遺物番号	出土地点	器別	器種	法量()は復元値 (cm)	装飾技法			製作		備考
					絵付・釉	文様	装飾特徴	製作地	製作年代	
14	A-2区 表土溝き	磁器	皿	口径: - 残存高: 29 底径: (7.2)	染付	外-唐草文 見込み-五弁花纹	薄霧印判	肥前系 (波佐見か)	18C 後半	くらわんか手 裏路「渴相」か
15	A-2区 SD1	磁器	皿	口径: - 残存高: 15 底径: (6.0)	染付			肥前系 (初期伊万里か)	17C 前半	
16	A-2区 SD1	磁器	皿	口径: - 器高: - 底径: -	染付			肥前系 (波佐見か)	18C 代	くらわんか手
17	A-2区 SD1	磁器	皿	口径: - 残存高: 19 底径: (7.4)	染付			肥前系 (波佐見か)	18C 末-19C 前半	くらわんか手
18	A-2区 SD1	磁器	皿	口径: - 残存高: 20 底径: 4.4	染付		内-蛇の目 輪ハギ	肥前系	18C 代	くらわんか手
19	A-2区 SD1	磁器	皿	口径: (15.6) 器高: 3.6 底径: (9.6)	染付					
20	A-2区 SD1	磁器	碗、小杯か	口径: - 残存高: 2.6 底径: (3.0)	染付			肥前系 (有田か)	17C 代	
21	A-2区 SD1	磁器	碗	口径: - 器高: - 底径: -	染付	外-二重格子文		肥前系	18C 末-19C 初頭	くらわんか手 広東碗
22	A-2区 SD1	磁器	碗	口径: (10.4) 器高: 6.5 底径: 6.0	染付	外-二重格子文		肥前系	18C 末-19C 初頭	くらわんか手 広東碗
23	A-2区 SD1	磁器	碗	口径: - 器高: - 底径: (5.4)	染付			肥前系	18C 末-19C 初頭	広東碗
24	A-2区 SD1	磁器	碗	口径: (10.8) 残存高: 4.1 底径: -	染付	外-松文		肥前系	18C 末-19C 代	
25	A-2区 SD1	磁器	碗	口径: - 残存高: 2.7 底径: (6.0)	染付			瀬戸、 美濃系か?	19C 代	広東碗
26	A-2区 SD1	磁器	碗	口径: - 器高: - 底径: -	染付	外-草花文 内-網目文		瀬戸、 美濃系か?	19C 代	
27	A-2区 SD1	磁器	碗	口径: (12.6) 残存高: 4.1 底径: -	染付	外-草、花、 鳥図か		肥前系		
28	A-2区 SD1	磁器	碗蓋	口径: (9.1) 器高: 3.1 蓋径: (5.6)	外-青磁 内-染付	内-四方襷文、 五弁花纹か	薄霧印判	肥前系	18C 後半	
30	A-2区 SD1	磁器	鉢(火入)	口径: - 器高: - 底径: -	青磁			肥前系 (波佐見か)	17C 末-18前半	
35	B区 SE4	磁器	小皿	口径: (8.8) 器高: 2.3 底径: (3.2)	染付	内-二重格子文		肥前系	19C 中頃	内部に蛇の目輪ハギ
39	B区 SE6	磁器	八角形鉢	口径: (16.6) 残存高: 4.6 底径: -	染付			肥前系	18C 末-19C 初頭	
40	B区 SE6	磁器	八角形鉢	口径: (15.6) 器高: 7.8 底径: (7.8)	染付			肥前系	18C 末-19C 初頭	
41	B区 SE7	磁器	碗	口径: - 器高: - 底径: -	青磁					
45	B区 SE8	磁器	碗か	口径: - 器高: - 底径: -	染付	見込み-「寿」 字を染付した鏡 か?		肥前系	18C 後半か	
49	B区 SE8	磁器	碗か	口径: - 器高: - 底径: -	染付	外-唐草文		肥前系	18C 代	
50	B区 SE8	磁器	瓶か	口径: - 残存高: 9.7 底径: (8.4)	外-青磁か		内-回転ナガ 輪相	肥前系	17C 後半	底部輪ハギ痕あり
57	B区 SK25	磁器	碗	口径: - 器高: - 底径: -	染付	外-草花図か		肥前系	18C 後半-19C 初頭	
58	B区 SK25	磁器	碗	口径: (11.2) 残存高: 4.8 底径: -	染付			肥前系	18C 前半-中葉	
59	B区 SK25	磁器	碗	口径: - 残存高: 1.4 底径: 4.0	外-青磁	見込み-五弁花 文	薄霧印判	肥前系	18C 代	朝彌形碗か
60	B区 SK25	磁器	碗	口径: (10.8) 器高: 5.6 底径: (6.4)	染付	見込み-鶯文か		肥前系	18C 末-19C 中頃	広東形碗か
61	B区 SK25	磁器	碗	口径: - 残存高: 5.2 底径: (3.8)	染付	不明		肥前系	18C 後半-末頃	底部輪ハギ痕あり
62	B区 SK25	磁器	碗蓋	口径: (8.4) 器高: 2.6 蓋径: (2.0)	青磁 染付	内-四方襷文 見込み-五弁花 文	薄霧印判	肥前系	18C 中頃-後半	蓋部輪ハギ痕あり
63	B区 SK25	磁器	瓶	口径: - 残存高: 14.5 底径: 4.8	染付	外-草文		肥前系	18C 前半-18C 後半	底部輪ハギ痕あり

遺物番号	出土地点	器別	器種	法量()は復元値 (cm)	装飾技法			製作		備考
					絵付・繪	文様	装飾特徴	製作地	製作年代	
79	B区 SK32	磁器	皿	口径：(13.4) 器高：3.0 底径：(6.4)	染付	内－五弁花文・ 唐草文	青露印押	肥前系	18C 中頃	
80	B区 SK33	磁器	碗	口径：(8.0) 器高：4.0 底径：(3.0)	染付	外－梵字文の崩 し文様 見込み－かなり崩 した「萬」の字か		肥前系	18C 後半～19C 前半	
81	B区 SK35	磁器	碗	口径：－ 残存高：4.2 底径：(3.7)	染付 西洋コバルト	不明		肥前系	18C 後半～19C 代	
82	B区 SK37	磁器	碗	口径：(8.2) 残存高：4.0 底径：－	染付	外－草花文		肥前系	17C 後半か	脇部下身に削り痕あり
83	B区 SK37	磁器	碗	口径：－ 器高：－ 底径：－	青磁					
88	B区 SX11	磁器	碗	口径：－ 器高：－ 底径：－	染付 青磁	内－四方瓣文		肥前系	18C 末～19C 初	
89	B区 試掘調査	磁器	蓋	口径：(10.3) 器高：2.6 蓋径：(3.0)	白磁			肥前系か	18C 後半	
93	B区 表土剥ぎ中	磁器	灯明皿 (上皿)	口径：(9.2) 器高：1.8 底径：(3.5)	内－透明釉		外面－ヘラケズリ	京、信楽系	19C 代か	102とセットで使用か
94	B区 表土剥ぎ中	磁器	灯明皿 (下皿)	口径：－ 残存高：1.7 底径：3.2	内－透明釉		外面－ヘラケズリ	京、信楽系	19C 代か	101とセットで使用か
95	B区 表土剥ぎ中	磁器	碗	口径：－ 残存高：3.4 底径：6.2	染付		内底－ハマ痕あり	肥前系	18C～19C 前半か	底部釉ハギ痕あり 焼次跡あり 広東窓
96	B区 表土剥ぎ中	磁器	碗	口径：－ 残存高：2.4 底径：(4.0)				肥前系 (波佐見か)	18C 後半～19C 前半	くらわんか手
97	B区 精査中	磁器	碗	口径：(11.5) 残存高：4.7 底径：－	染付	外－草花文か			19C 後半	
98	B区 精査中	磁器	碗(はざり)	口径：－ 残存高：1.4 底径：5.0	染付			肥前系	19C 中頃	
103	B区 近現代かく乱	磁器	台付皿か水盤	口径：－ 器高：－ 底径：－	青磁					龍泉窓系か
104	B区 近現代かく乱	磁器	碗	口径：－ 器高：－ 底径：－	染付	外－草花文か		肥前系	18C 中頃～末	

3. 市地遺跡の遺構と遺物

市地遺跡で検出した遺構は、土坑6基（SK1～6）、溝状遺構7条（SD1～7）、性格不明遺構1基（SX1）、ピットなどである。このうち溝状遺構3条（SD2・4・7）、性格不明遺構1基（SX1）は、近現代の攪乱であることが確認できたため欠番とした。また、ピットについては建物跡が明確に復元できるものは無かった。なお、包含層出土で図化可能な遺物について報告することとした。

土坑

SK1（第30図、図版25）

SK1は、SK2の東側約0.28mで検出した、東側の半分は調査範囲外に延びる。推定の平面形が、不整な楕円形を呈する土坑である。規模は、長軸約1.21m、残存短軸約0.51m、深さ約0.42mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、黒褐色砂質土から黄灰色粘質土の3層がみられる。遺物は、図化不能な土師質土器片（皿）などが出土した。

SK2（第30・32図1、図版26・28）

SK2は、SK1の西側約0.28mで検出した、平面形が不整な長方形を呈する土坑である。規模は、長軸約1.18m、短軸約0.72m、深さ約0.34mを測る。壁の立ち上がりは、緩やかな逆「ハ」字形を呈する。底面の形状は、ほぼ長方形を呈する。埋土の堆積状況は、黒色砂質土と黄灰色粘質土の2層がみられる。遺物は、須恵器片、土師質土器片（皿、杯、鍋）、木製品（網籠）などが出土した。また木製品（網籠）については、依存状態が悪く図化不能であったため、検出時の写真（図版26-b）のみとして報告する。

出土遺物

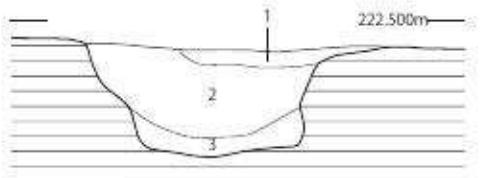
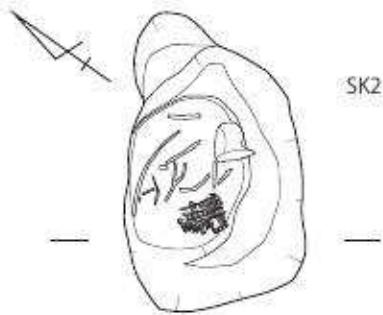
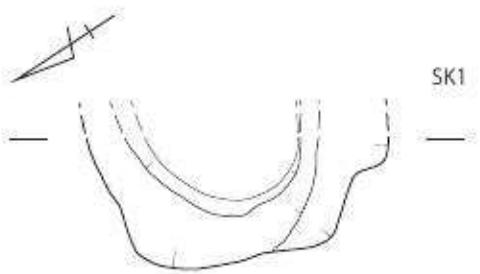
1は、土師質土器の皿である。口縁部を欠損する。大きさは、残存器高1.4cm、底径6.2cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は内外面ともに灰黄褐色である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部に回転糸切り痕が残る。

SK3（第30図、図版25）

SK3は、SK4の東側約0.08mで検出した、平面形が不整な楕円形を呈する土坑である。規模は、長軸約0.90m、短軸約0.78m、深さ約0.34mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、黒色砂質土と灰黄褐色粘質土と明黄褐色粘質土の混合土の1層がみられる。遺物は、図化不能な土師質土器片などが出土した。

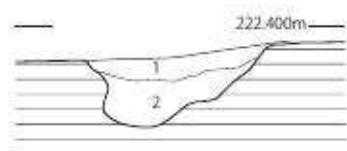
SK4（第30図、図版25）

SK4は、SK3の西側約0.08mで検出した、平面形が不整な長方形を呈する土坑である。規模は、長軸約0.96m、短軸約0.83m、深さ約0.19mを測る。壁の立ち上がりは、緩やかな逆「ハ」字形を呈する。埋土の堆積状況は、黒色砂質土と黄灰色砂質土と褐色砂質土と明黄褐色粘質土と灰白色砂質土の混合土の1層がみられる。遺物は、図化不能な土師質土



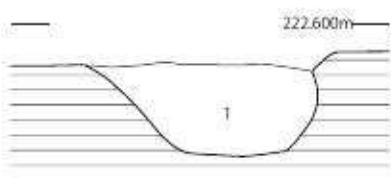
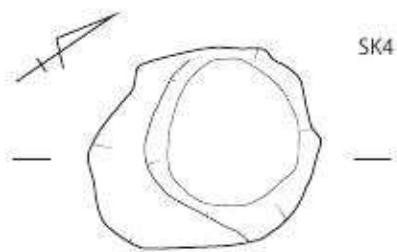
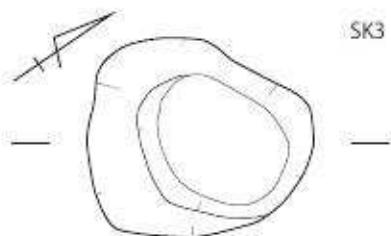
SK1土層説明

- 1 黒褐色砂質土(黄褐色粘質小ブロックとにび黄色粘質小ブロックを少量含む。)
- 2 黑褐色砂質土(浅黄色粘質小ブロックを少量含む。)
- 3 黄灰色粘質土



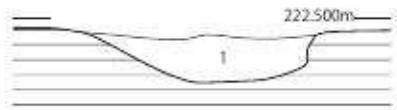
SK2土層説明

- 1 黒色砂質土(褐灰色粘質ブロックと灰白色粘質ブロックを少量含む。
炭化物を少量含む。)
- 2 黄灰色粘質土(灰白色粘質ブロックを少量含む。)



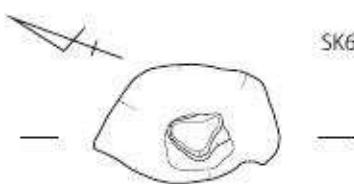
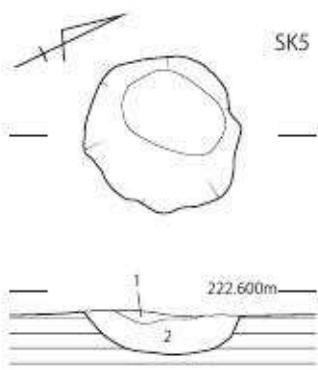
SK3土層説明

- 1 黒色砂質土と灰黄褐色粘質土と明黄褐色粘質土の混合土(炭化物を多量に含む。)



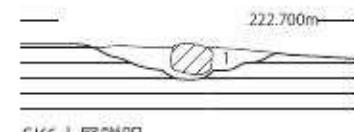
SK4土層説明

- 1 黒色砂質土と黄灰色砂質土と褐色粘質土と明黄褐色粘質土と灰白色砂質土の混合土
(炭化物を多量に含む。)



SK5土層説明

- 1 褐色真砂土
- 2 黑褐色砂質土(黄褐色砂質土を少量含む、炭化物を少量含む。)



SK6土層説明

- 1 オリーブ黒色砂質土と灰オリーブ色粘質土と黄褐色粘質土の混合土
(炭化物を少量含む。)



第30図 SK1～6 実測図 (1:30)

器片などが出土した。

SK5（第30・32図2、図版25・28）

SK5は、SK4の北西側約0.90mで検出した、平面形が不整な円形を呈する土坑である。規模は、直径約0.62m、深さ約0.17mを測る。壁の立ち上がりは、逆台形状を呈する。底面の形状は、長方形を呈する。埋土の堆積状況は、褐色真砂土と黒褐色砂質土の2層がみられる。遺物は、瓦質土器、土師質土器片、陶器片などが出土した。

出土遺物

2は、瓦質土器の鍋の底部片である。大きさは破片のため不明である。焼成は良好で、胎土はやや粗である。色調は外面が暗褐色で、内面が灰色である。調整は外面がナデの後ユビオサエで、内面はナデを施す。脚部は貼付けの後に、ナデを施す。外面にはススがほぼ全体に付着している。

SK6（第30図、図版26）

SK6は、SK5の北側約2.40mで検出した、平面形が不整な長方形を呈する土坑である。規模は、長軸約0.72m、短軸約0.38m、深さ約0.12mを測る。壁の立ち上がりは、緩やかな逆「ハ」字形を呈する。底面の形状は、不正の橢円形を呈する。埋土の状況は、オリーブ黒色砂質土と灰オリーブ色粘質土と黄褐色砂質土の混合土の1層がみられる。遺物は出土していない。

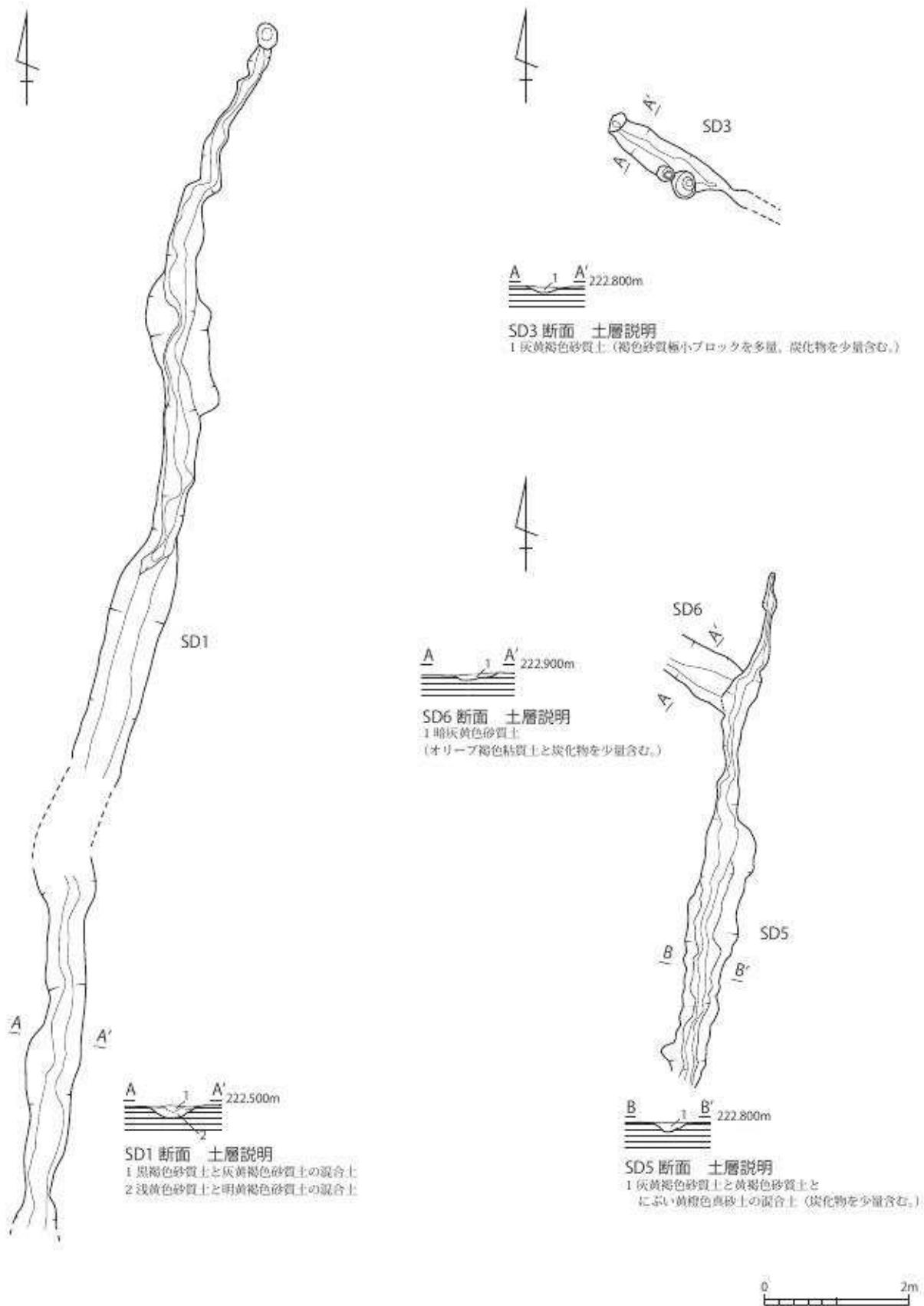
溝状遺構

SD1（第31・32図3～9・15～19・21・22・26、図版26～28）

SD1は、SD5の東側約0.32mで検出した、平面形が不整な長方形を呈する溝状遺構である。規模は、長さ約18.2m、幅約0.12m、深さ約0.30mを測る。埋土の堆積状況は、灰褐色土の1層がみられる。遺物は、土師質土器片（皿、杯、土鍋）、陶器片、古銭6枚などが出土した。

出土遺物

3は、土師質土器の皿である。口縁部を欠損する。大きさは、残存器高0.5cm、底径5.0cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は外面がにぶい黄橙色で、内面が黒褐色である。調整は、内外面ともに回転ナデで、底部に回転糸切り痕が残る。4は、土師質土器の皿である。口縁部を欠損する。大きさは、残存器高0.9cm、底径5.0cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は内外面ともに淡黄色である。調整は内外面ともに回転ナデで、底部に回転糸切り痕が残り、ススが付着する。5は、備前系鉢の破片である。焼成は良好で、胎土は密である。色調は内外面ともに灰白色である。調整は内外面ともに回転ナデを施す。6は、備前系のスリ鉢の破片である。焼成は良好で、胎土は密である。色調は外面が灰黄色で、内面が浅黄色である。調整は外面がナデで、内面が横方向の刷毛目で、櫛目文7本を施す。7、8は、瓦質土器鍋の脚の破片である。大きさは破片のため不明である。焼成は良好で、胎土はやや粗である。色調は内外面ともに黒灰色である。調整は内外



第31図 SD1・3・5・6 実測図 (1:80)

面ともにナデを施す。9は、瀬戸・美濃系陶磁器の瓶の破片である。底部から上方を、欠損する。大きさは、残存器高5.9cm、復元で底径9.2cmを測る。焼成は良好で、胎土はやや粗である。色調は内外面ともに灰白色である。底部の付け根位まで、灰釉が掛かる。調整は内外面ともに回転ナデを施す。15～19、21、22、26は古銭で、15～19の初鋳年が南唐960年、21、22が初鋳年は北宋1017年で、26は欠損が著しいため初鋳年は不明である。

SD3（第31図、図版26・27）

SD3は、SD1の東側約0.14mで検出した、平面形が不整の長方形を呈する溝状遺構である。規模は、残存長さ約2.20m、幅約0.54m、深さ約0.20mを測る。埋土の堆積状況は、褐色粘質土の1層がみられる。遺物は、土師質土器片が出土した。

SD5（第31・32図10、図版27・28）

SD5は、SD1の西側約0.32mで検出した、平面形が不整な長方形を呈する溝状遺構である。規模は、長さ約8.80m、幅約0.80m、深さ約0.30mを測る。埋土の堆積状況は、褐色粘質土の1層がみられる。遺物は、土師質土器片（皿、羽釜）などが出土した。

出土遺物

10は、土師質土器の羽釜である。大きさは破片のため不明である。焼成は良好で、胎土はやや粗である。色調は内外面ともにぶい黄橙色である。調整は外面がナデで、口縁を仕上げた後に、断面三角形状の鍔部を貼り付けている。

SD6（第31・32図11、図版27・28）

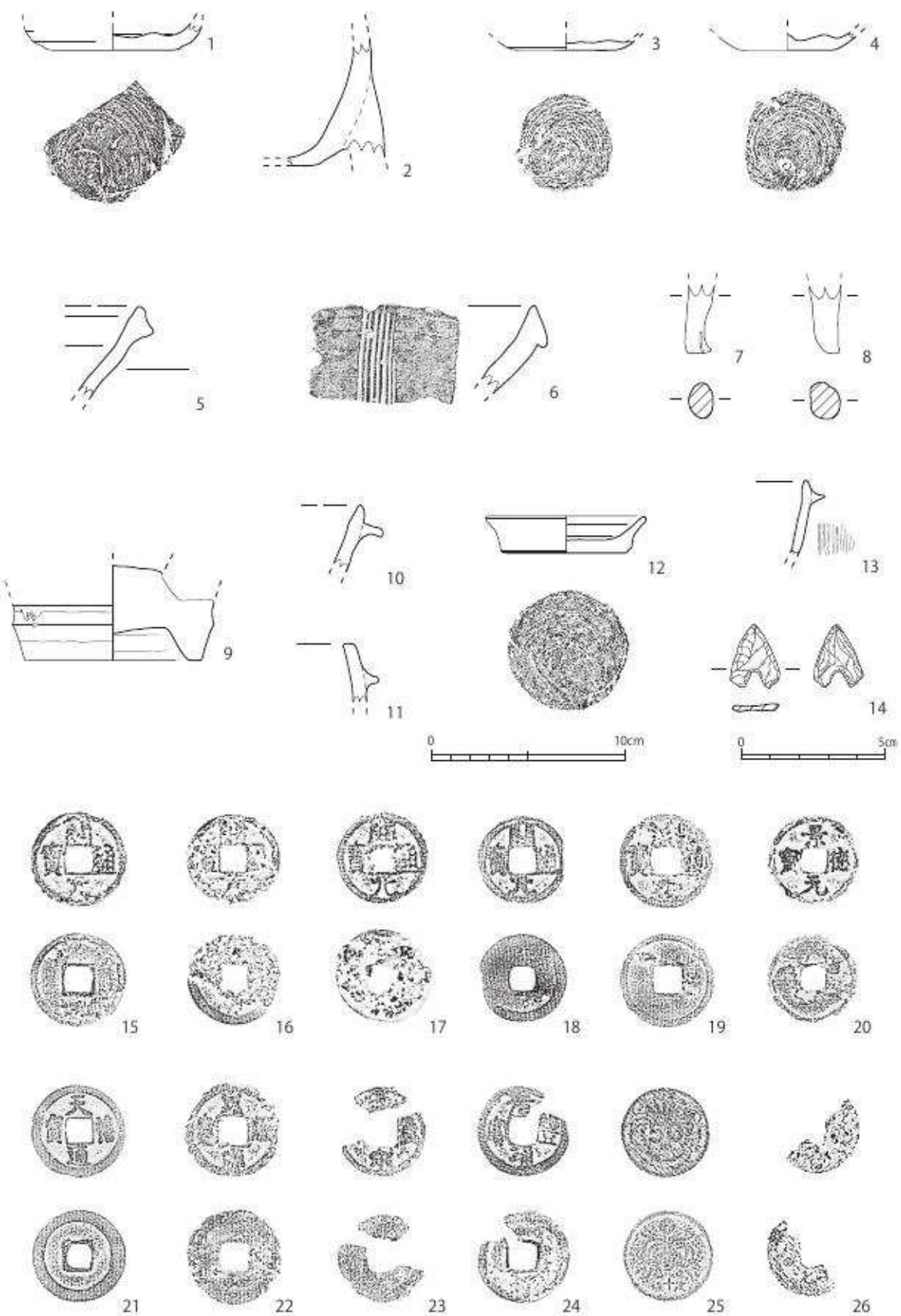
SD6は、SD5の北西側で接して検出した、平面形が長方形を呈する溝状遺構である。規模は、残存長さ約1.20m、幅約1.30m、深さ約0.15mを測る。埋土の堆積状況は、黄褐色粘質土の1層がみられる。遺物は、土師質土器片などが出土した。

出土遺物

11は、瓦質土器の羽釜である。大きさは破片のため不明である。焼成は良好で、胎土は密である。色調は外面が灰色で、内面が明黄褐色である。調整は内外面ともにナデで、口縁を仕上げた後に、断面三角形状の鍔部を貼り付けている。

包含層出土遺物（第32図12～14・20・23～25、図版28）

12は、土師質土器の皿である。完形を呈する。大きさは口径が復元で8.0cm、器高2.9cm、底径6.2cmを測る。焼成は良好で、胎土は密である。色調は外面が浅黄橙色で、内面がぶい黄橙色である。調整は内外面ともに回転ナデを施し、底部には回転糸切り痕が残る。13は、土師質土器の鍋の破片である。大きさは破片のため不明である。焼成は良好で、胎土はやや粗である。色調は内外面ともに橙色である。調整は内外面ともにナデで、外面には縦方向の刷毛目がみられる。14は、石製品の石鏃である。大きさは、長さ2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.74gを測る。20、23～25、は古銭で、20が初鋳年は北宋1004年、23が北宋1038年、24が北宋1078年、25が1946年である。



第32図 出土遺物実測図 (1~13 - 1:3, 14 - 1:2, 15~26 - 2:3)

第2表 市地遺跡出土遺物観察表

遺物番号	出土地点	器別	器種	法量()は復元値 (cm)		焼成	胎土	色調	調整	備考
				口径	底径					
1	SK2	土師質土器	皿	口径：14 底径：6.2	良 密	外面：灰黄褐 内面：灰黄褐	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底面：回転糸切り	外一部にスス付着		
2	SK5	瓦質土器	土鍋底部	口径：— 器高：— 底径：—	良 やや粗	外面：暗褐 内面：灰色	外面：ナデ後ユビオサエ 内面：ナデ	脚部貼付全体にスス付着		
3	SD1	土師質土器	皿	口径：— 残存高：0.5 底径：5.0	良 密	外面：にぶい黄橙 内面：黒褐	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底面：回転糸切り	内面スス付着		
4	SD1	土師質土器	皿	口径：— 残存高：0.9 底径：5.0	良 密	外面：淡黄 内面：淡黄	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底面：回転糸切り	底部にスス付着		
5	SD1	備前焼	鉢	口径：— 器高：— 底径：—	良 密	外面：灰白 内面：灰白	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外にスス付着		
6	SD1	備前焼	桶鉢	口径：— 器高：— 底径：—	良 密	外面：灰黄 内面：浅黄	外面：ナデ 内面：刷毛目、櫛目文7本	外にスス付着		
7	SD1	瓦質土器	土鍋脚部	口径：— 残存高：3.5 底径：—	良 やや粗	外面：黒灰色 内面：黒灰色	外面：ナデ 内面：ナデ	全体にスス付着		
8	SD1	瓦質土器	土鍋脚部	口径：— 残存高：3.5 底径：—	良 やや粗	外面：黒灰色 内面：黒灰色	外面：ナデ 内面：ナデ	全体にスス付着		
9	SD1	陶磁器	瓶	口径：— 残存高：5.9 底径：(9.2)	良 やや粗	外面：灰白 内面：灰白	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外・内一部に灰釉		
10	SD6	土師質土器	羽釜	口径：— 器高：— 底径：—	良 やや粗	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	外面：ナデ	脚部貼付 外にスス多量に付着		
11	SD6	瓦質土器	羽釜	口径：— 器高：— 底径：—	良 密	外面：灰 内面：明黄褐	外面：ナデ 内面：ナデ	脚部貼付全体にスス付着		
12	精査中	土師質土器	皿	口径：(8.0) 器高：(2.9) 底径：6.2	良 密	外面：浅黄橙 内面：にぶい黄橙	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り			
13	精査中	土師質土器	土鍋	口径：— 器高：— 底径：—	良 やや粗	外面：橙 内面：橙	外面：ナデ、刷毛目 内面：ナデ	脚部貼付		
14	精査中	石製品	石鏡	長径：2.1 幅：1.9 厚さ：0.3 重量：0.74 g						

第3表 市地遺跡出土銭貨観察表

遺物番号	名称	初鋳年	法量(cm)			量目 (g)	状態	出土地点	備考
			横径	横径	厚さ				
15	開元通寶	南唐960	24.7	24.9	1.6	3.06	ほぼ完形、右上穴	SD1	模鋳銭か？
16	〃	〃	24.0	24.1	1.7	2.70	完形、表裏錢肌荒れ	〃	〃
17	〃	〃	24.0	24.0	1.0	3.07	完形、裏錢肌荒れ	〃	〃
18	〃	〃	22.9	22.3	1.2	2.85	右端部欠損、摩滅	〃	〃
19	〃	〃	24.2	24.4	1.2	1.93	表裏錢肌荒れ	〃	〃
20	景德元寶	北宋1004	23.0	23.5	1.1	2.27	完形ではあるが湾曲	精査中	
21	天禧通寶	北宋1017	24.1	24.1	1.5	3.94	完形	SD1	
22	皇宋通寶	〃	25.0	25.0	1.7	2.79	完形ではあるが全体的に鋸が付く	SD1	
23	〃	北宋1038	22.5	22.0	1.1	1.27	左上部欠損(上部はあるが接合不可)	精査中	
24	元豐通寶	北宋1078	23.9	23.8	1.4	1.39	右上欠損	表土はぎ精査中	
25	大型50銭黄銅硬貨	1946～1947	23.3	23.3	1.6	3.51	完形	表土はぎ精査中	昭和21年
26	不明		残存20.5	残存19.0	1.0	1.56	接合・判読不可	SD1	

V まとめ

1. 横田3号遺跡

横田3号遺跡は、標高575mの龍王山の南側に広がる標高約241m前後の丘陵斜面上にあり、南側にある西条盆地を形成する沖積地が一望できる立地にある。今回の発掘調査は、遺跡面積1,080m²について実施した。調査の結果、掘立柱建物跡1棟、井戸10基、土坑34基、溝状遺構1条、性格不明遺構2基、ピットを検出した。遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、石製品、木製品などが出土した。

ここではこれらの資料を基に、主要なものについて若干の検討を加えまとめとしたい。

A-1区について

遺構は、土坑4基（SK1～4）、ピットなどを検出した。このうちピットについては、調査区が狭小であるため、掘立柱建物跡などを復元することは困難であった。しかし、ピット内からは中世頃と考えられる土師質土器の小片などが出土している。土坑は4基を検出することができた。形状は楕円形若しくは不整の長方形のものである。残存状況が悪いため、用途などは不明である。

遺物は、土師質土器（杯、小皿）、陶磁器片などが出土した。これらの遺物は、吉野の論考「安芸国中世の土師質土器」の時期編年のⅡ期に該当することから14世紀代に形成された集落が想定できる。

A-2区について

本調査区は、A-1区の北側にあたる。この北側は、後世の削平を著しく受けていることから、遺構を検出することができなかった。近現代と思われる東西方向に延びる溝（SD1）を検出したが、現代の水田の区画に沿って作られていることが判明し、近現代に構築されたことが確認できたことにより溝についての詳細な報告は行わないが、この溝に流れ込んだと思われる遺物について報告することとする。

ここで、報告する遺物は、肥前系と瀬戸・美濃系を中心とした陶磁器の計17点である。
①肥前系：皿5点（遺物番号14～18）／碗若しくは小杯1点（遺物番号20）／碗4点（遺物番号21～24、27）／碗蓋1点（遺物番号28）／鉢類2点（遺物番号29、30）②瀬戸・美濃系：碗2点（遺物番号25、26）③産地不詳1点（遺物番号19）

時期は、皿（15）が初期伊万里と思われ17世紀前半、鉢（30）が肥前系波佐見焼青磁と思われ17世紀末～18世紀前半、くらわんか手の皿（14）・碗蓋（28）が18世紀後半、くらわんか手の皿（16、18）・鉢（29）が18世紀代、碗（24）が18世紀末～19世紀代、皿（17）・碗（21～23）が18世紀末～19世紀前半、碗（25、26）が19世紀代、皿（19）・碗（27）が時期不詳である。概ね、17世紀前半～19世紀代の遺物が確認できた。

出土遺物の特徴をみると、くらわんか手の磁器が大半を占めており、日常雑器が多い点に着目できる。この出土状況から調査区周辺には、当該時期の農村集落が存在していた可能性が高いと考えられる。

B区について

遺構について

遺構は、掘立柱建物跡1棟、井戸10基、土坑30基、溝状遺構1条、性格不明遺構2基、ピットを検出した。遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、木製品、石製品、金属製品、瓦などが出土した。

掘立柱建物跡1棟を、調査区のほぼ中央で検出した。規模は1間×2間のものを復元することができた。出土遺物が無いため、時期は不詳である。

井戸跡は、10基を確認することができた。井戸跡は、SE1が北側の壁面に自然石による枠組みの痕跡が残る。SE2は井戸底の中心付近に南北側に板を配置し、その上方に1段の自然石による円形状の枠組みを配置する。SE3は、掘方に沿って竹製の籠を巡らし枠組みを配置する。SE1～3は出土遺物が無いため、時期は不詳である。SE4は井戸の中心に土師質製の井戸枠を配置する。遺物は、大甕の口縁が2点、釜や瓶類と思われる底部1点、肥前系の小皿1点、簪1点が出土した。時期は、出土遺物から概ね19世紀代の時期が想定できる。SE5は、井戸の中心に木製の井戸枠を設置する。時期は、出土遺物から19世紀代が想定できる。SE6は、壁の東西側に、若干ではあるが、木枠痕がみられる。時期は、出土遺物から18世紀末から19世紀初頭が想定できる。SE7は、素掘りの井戸である。時期は、出土遺物から18世紀後半から19世紀前半が想定できる。SE8は素掘りの井戸である。また、廃絶時に祭祀を行ったのか、板石で封をしたのちに石仏を供献している。時期は、出土遺物から17世紀後半から18世紀後半が想定できる。SE9は、井戸の中心に木製の籠を配置する。出土遺物が無いため、時期は不詳である。SE10は、素掘りの井戸である。出土遺物が無いため、時期は不詳である。

土坑は、SK6、SK8、SK33、SK44、SK47が埋甕土坑である。出土した遺物から、時期は18世紀代から19世紀代が想定できる。SK25、SK28、SK50が井戸中央部若しくは掘方に沿って籠を巡らせた痕跡がみられるため、小規模な井戸状の遺構であったと考えられる。時期は不詳である。SK48が、中心部に板状の底敷きを配置する。時期は不詳である。その他の土坑は用途不明のものである。

溝状遺構は、東西に流れを持つ。出土した遺物から時期は18世紀から19世紀代が想定できるが、用途などは不明である。

性格不明遺構は、SX4が掘方に沿って籠の配置がみられるため、小規模な井戸状の遺構であったと考えられる。また、SX11からは羽釜と肥前系の碗が出土しており、時期は、出土遺物から18世紀末から19世紀初頭が想定できるが、用途などは不明である。

遺物について

遺物の概要は、IV章で明記したが、ここでは、陶磁器類について述べることとする。

陶磁器類は、多量に出土しているものの中から図化可能で、比較的年代の判別可能な遺物をみていくと次のようになる。

17世紀代では肥前系の染付が比較的多く確認できる。18世紀は、陶胎染付や青磁染付などの陶磁器もみられるようになる。堺・明石系の擂鉢が少量確認できた。18世紀から19世紀に入ると、陶器・磁器ともに器種が多様化していく。特に、当地域ではこの時期から広

東碗などがみられるようになる。このような傾向から全体の消費をみていくと肥前系を中心として多様な陶磁器が出土する。概ねではあるが、17世紀から19世紀における本遺跡での消費変遷を想定することができる。

以上、発掘調査によってA地区、B地区で検出された遺構や遺物の時期などについて述べてきた。本遺跡の時期を整理すると、中世（14世紀代）と近世（17世紀から19世紀代）に大別することができる。

今回の調査で得られた資料の大半が日常雑器であることから推測すると本遺跡は、中世から江戸時代にかけて展開した在地の農村集落であったことが窺われ、当該地域における農村集落の一端を知る手掛かりを与えてくれたものと言えよう。

2. 市地遺跡について

市地遺跡は、標高575mの龍王山の南側に広がる標高約222m前後の微高地上にあり、南側にある西条盆地を形成する沖積地が一望できる立地にある。今回の発掘調査は、遺跡面積500m²について実施した。調査の結果、土坑6基、溝状遺構4条、ピットなどを検出した。遺物は、土師質土器、陶磁器、石製品、古銭などが出土した。

ここではこれらの資料を基に、主要なものについて若干の検討を加えまとめとしたい。

遺構について

土坑は、6基を検出した。SK2からは網籠が出土しており、貯蔵などの用途に使用されていた可能性がある。遺物は14世紀代と思われる皿が出土している。それ以外の土坑は、形状が不整形であり、時期不詳の出土遺物が多いため、時期や用途などの詳細は不明である。

溝状遺構について

溝状遺構は、3条を検出した。SD1とSD5が南北方向に流れ、SD3とSD6が東西方向に流れを持つものである。遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、古銭が出土している。

時期は、出土遺物から14世紀から15世紀代が想定できる。

遺物について

遺物の概要は、IV章で明記したが、ここでは、図化可能なものについて述べることとする。また、図化不能で、遺跡の年代に係わると思われる遺物については、写真の掲載を行った。

本遺跡から出土した遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶器、木製品（編籠）、石製品（石鎌）、古銭がある。土師質土器は、杯と比較すると皿の出土量が多くみられる。吉野の論考「安芸国中世の土師質土器」の時期編年に照らし合わせると、皿の端部を欠失するものが多く、口径は定かではないが、底径5cm前後で、体部が内湾し浅手のものである。杯から皿に主流が移行する段階のものと考えられる。写真掲載のものも、このような傾向が受けられる。このことを編年に充てるとIV期に該当することから概ね15世紀代の時期が想定できる。その他、14世紀代の瓦質土器の鍋や瀬戸・美濃系の瓶、備前系の摺鉢などがみられる。

以上、発掘調査によって検出された、遺構や遺物の時期などについて述べてきた。本遺跡の時期を整理すると、中世（14世紀代～15世紀代）が主流であったのではないかと想定できる。

今回の調査で得られた資料の大半が日常雑器であることから推測すると本遺跡は、中世に発展した在地の農村集落であったことが窺われ、当該地域における中世農村集落の一端を知る手掛かりを与えてくれたものと言えよう。

参考文献

- 石垣敏之編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成16・17（2004・2005）年
- 植田 広編『御建遺跡発掘調査報告書Ⅱ』財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成25（2013）年
- 植田 広編『才免遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会 平成27（2017）年
- 阿部 澄編『北谷山城跡発掘調査報告』広島市教育委員会 昭和62（1986）年
- 奥田泰将編『池田城跡発掘調査報告』広島市教育委員会 昭和62（1986）年
- 村上伸之編『山辺田遺跡』有田町教育委員会 平成26（2014）年
- 長佐古真也編『四谷三丁目遺跡』別冊 東京消防庁 新宿区四谷三丁目遺跡調査団 平成3（1991）年
- 立川敏之「広島県の近世考古学事始め」「文化財論究第1集」財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成10（1998）年
- 吉野健志「安芸国中世の土師質土器」「文化財論究第1集」財團法人東広島市教育文化振興事業団 平成10（1998）年
- 吉野健志「西条盆地の中世遺跡－道照遺跡・溝口4号遺跡を中心として」「シンポジウム安芸地方の中世を探る～中世前期を中心として」広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門 東広島市教育委員会 平成24（2012）年
- 嶋谷和彦「堺焼鉢の生産と流通」「考古学ジャーナル409号」ニューサイエンス社 平成8（1996）年
- 九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 平成12（2000）年
- 西有田町史編さん委員会編『西有田の古窯』西有田町史別編 昭和63（1988）年
- 世界・糸の博覧会波佐見運営委員会編『波佐見青磁展・くらわんか展』図録 平成8（1996）年
- 佐賀県立九州陶磁文化館編『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 昭和59（1984）年
- 大橋康二・西田宏子監修「別冊太陽日本のこころ63 古伊万里」平凡社 昭和63（1988）年
- 岡山市教育委員会編『木村コレクション古備前図録』岡山市教育委員会 昭和59（1984）年



市地遺跡出土遺物

図 版



a A区調査前風景（北西から）



b B区調査前風景（南東から）

図版2



a A-1区完掘全景（北西から）



b B区完掘全景1（北西から）



c B区完掘全景2（南西から）

図版3



a A-1区SK1土層断面（南西から）



b A-1区SK1完掘（南西から）



c A-1区SK2土層断面（南西から）



d A-1区SK2完掘（南西から）



e A-1区SK3・4土層断面（南西から）



f A-1区SK3・4完掘（北東から）



g A-2区SD1土層断面（北東から）



h A-2区SD1完掘（北西から）

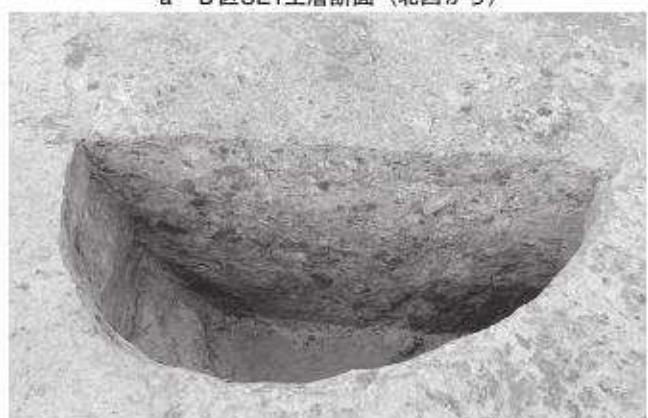
図版4



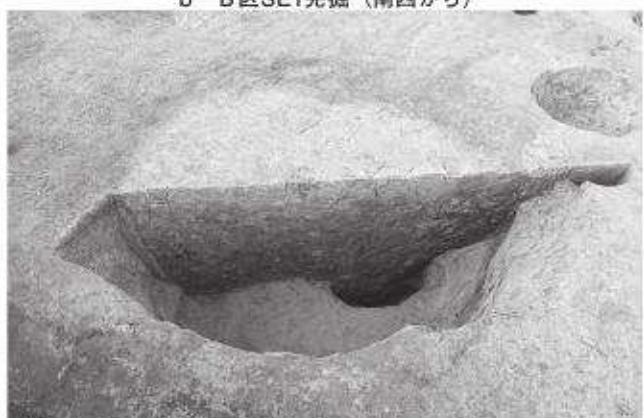
a B区SE1土層断面（北西から）



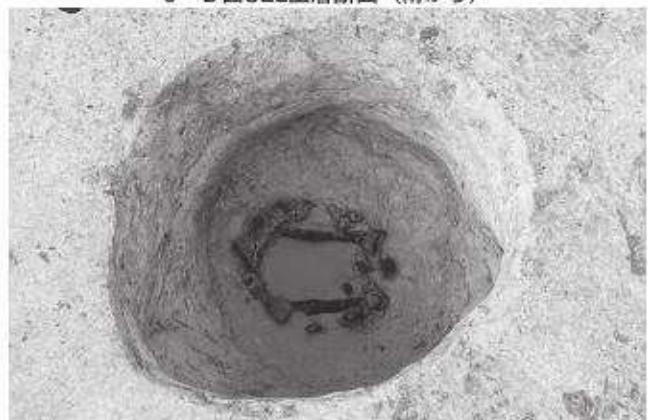
b B区SE1完掘（南西から）



c B区SE2土層断面（南から）



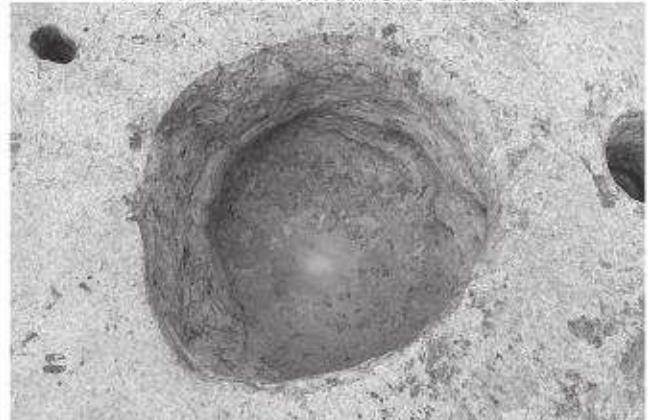
f B区SE3・P65土層断面（南から）



d B区SE2石・木枠検出状況（南から）



g B区SE3罐検出状況（南東から）



e B区SE2完掘（南から）



h B区SE3・P65完掘（北西から）



a B区SE4土層断面（南から）



d B区SE5土層断面（東から）



b B区SE4井戸枠検出状況1（南から）



e B区SE5井戸枠・石検出状況（東から）



c B区SE4井戸枠検出状況2（東から）



f B区SE5断割完掘（北西から）

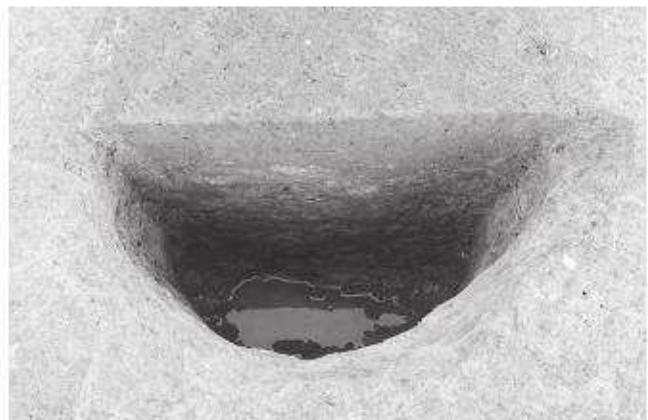


g B区SE6土層断面（北東から）



h B区SE6断割完掘（北東から）

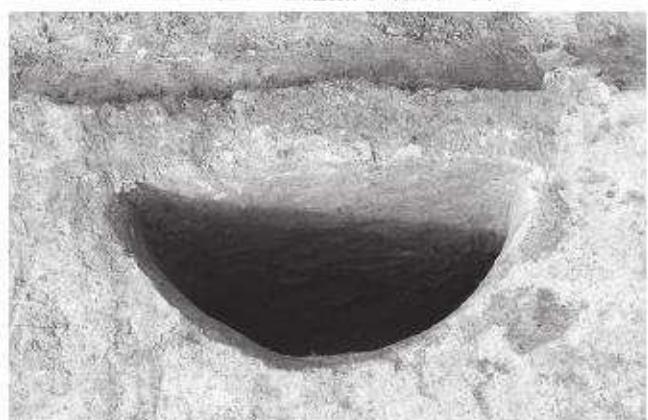
図版6



a B区SE7土層断面（北西から）



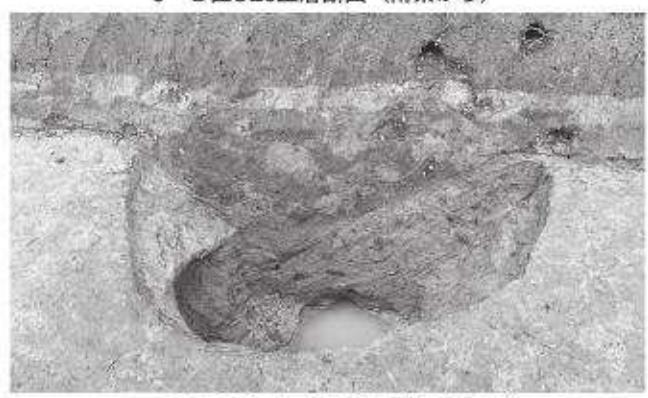
b B区SE7完掘（東から）



c B区SE8土層断面（南東から）



d B区SE8完掘（南東から）



e B区SE9石・土層断面（南西から）



f B区SE9籠検出状況（南西から）



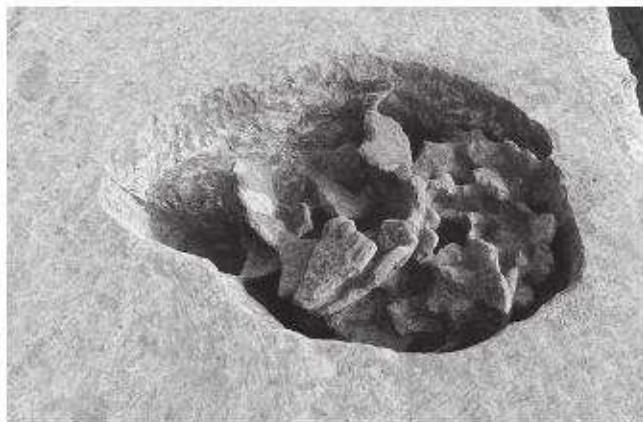
g B区SE10土層断面（西から）



h B区SE10完掘（西から）



a B区SK6土層断面（西から）



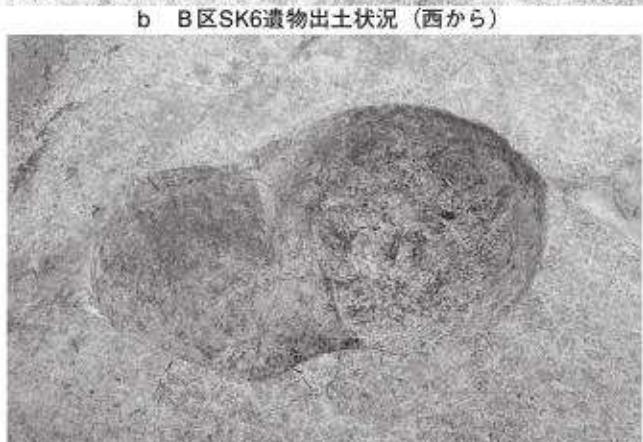
d B区SK8土塊検出状況（北西から）



b B区SK6遺物出土状況（西から）



e B区SK8土層断面（北西から）



c B区SK6完掘（西から）



f B区SK8完掘（北西から）



g B区SK7土層断面（南西から）



h B区SK7完掘（南西から）

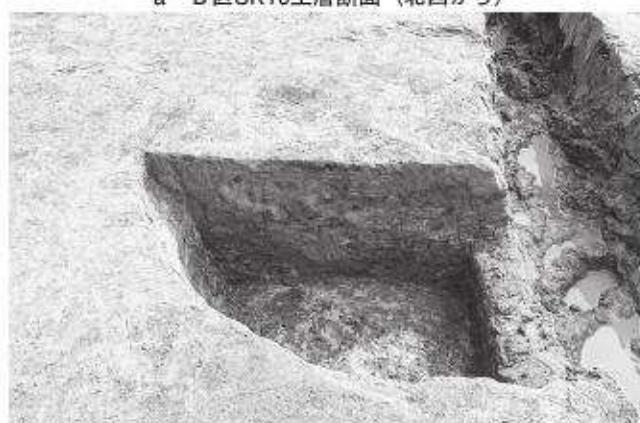
図版8



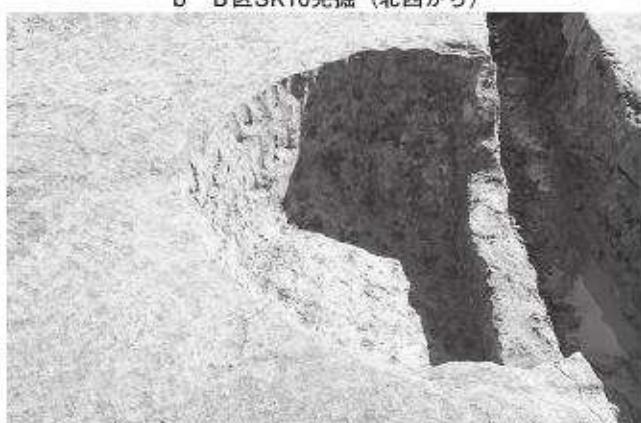
a B区SK10土層断面（北西から）



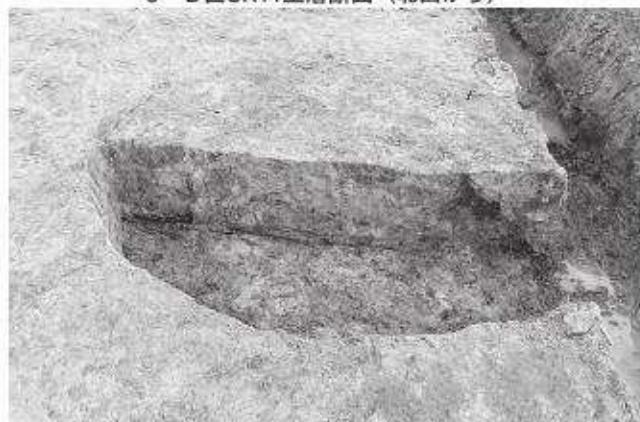
b B区SK10完掘（北西から）



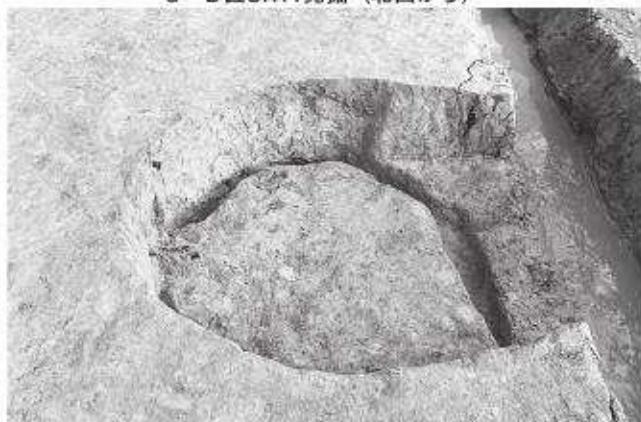
c B区SK11土層断面（北西から）



d B区SK11完掘（北西から）



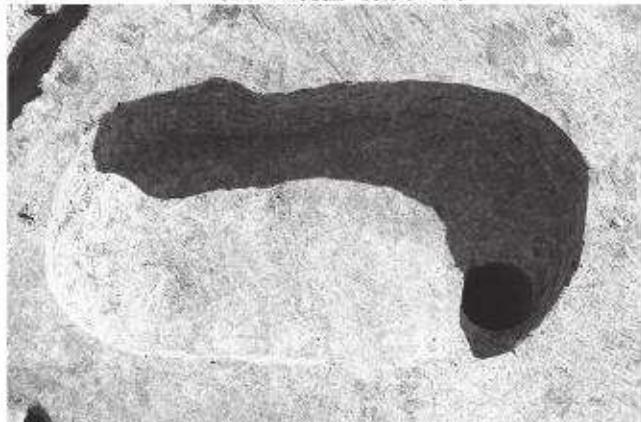
e B区SK13土層断面（北西から）



f B区SK13完掘（北西から）



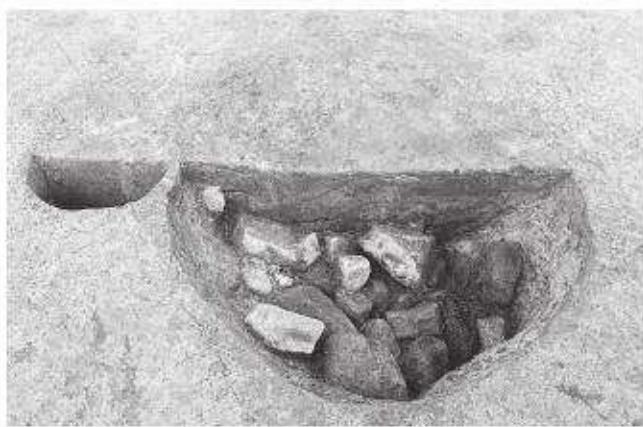
g B区SK15土層断面（西から）



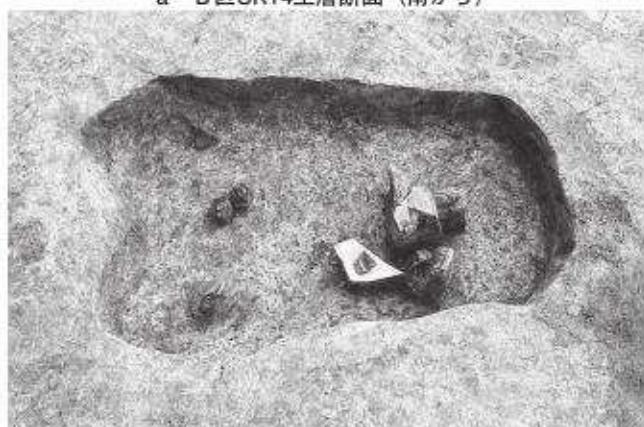
h B区SK15完掘（西から）



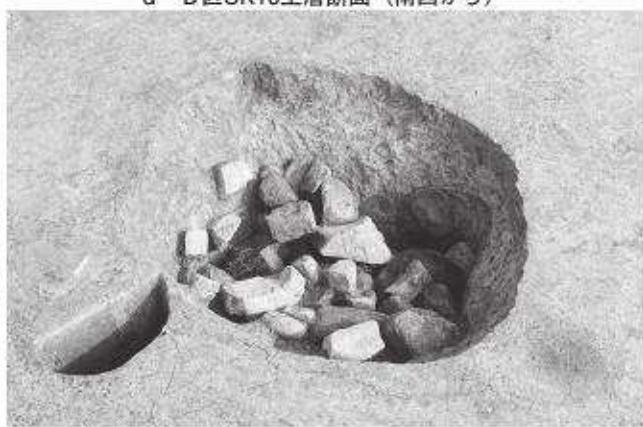
a B区SK14土層断面（南から）



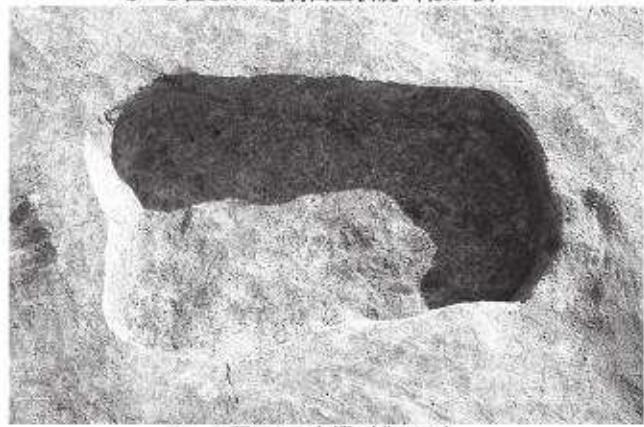
d B区SK16土層断面（南西から）



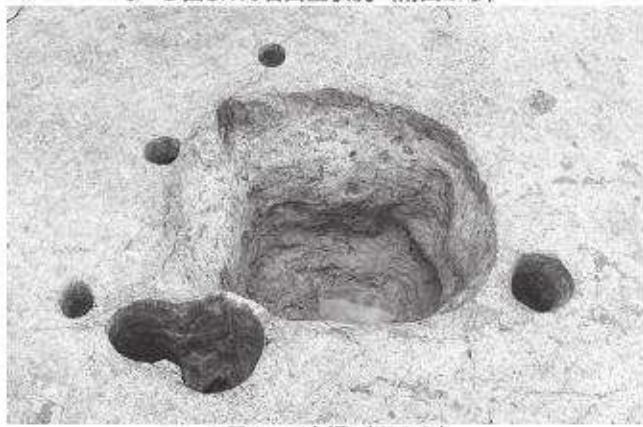
b B区SK14遺物出土状況（北から）



e B区SK16石出土状況（南西から）



c B区SK14完掘（北から）



f B区SK16完掘（西から）

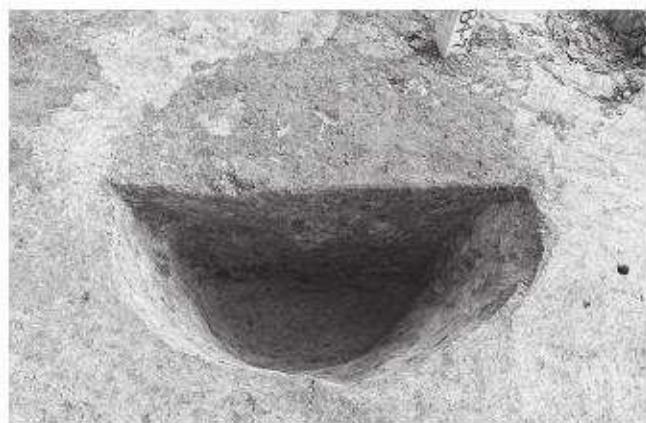


g B区SK17土層断面（西から）



h B区SK17完掘（西から）

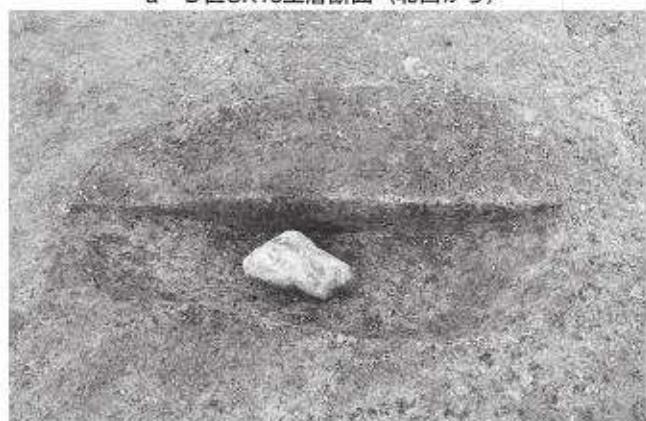
図版 10



a B区SK18土層断面（北西から）



b B区SK18完掘（北西から）



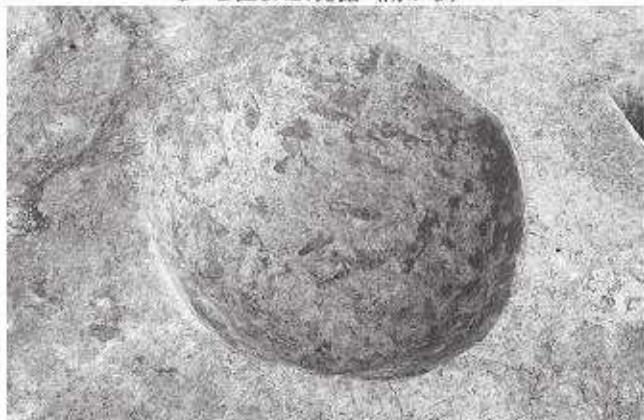
c B区SK21土層断面（南から）



d B区SK21完掘（南から）



e B区SK22土層断面（南東から）



f B区SK22完掘（北西から）



g B区SK24土層断面（南西から）



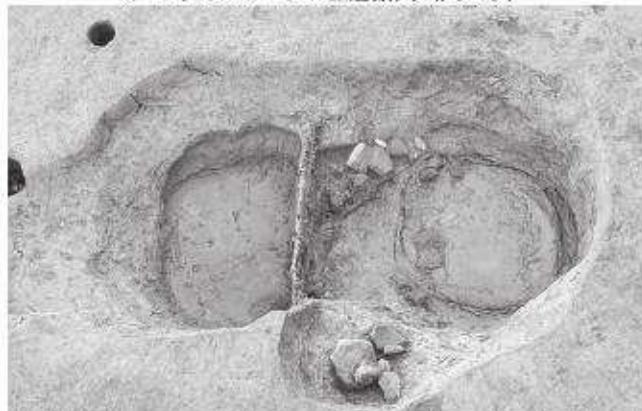
h B区SK24完掘（南西から）



a B区SK25・SX4土層断面（西から）



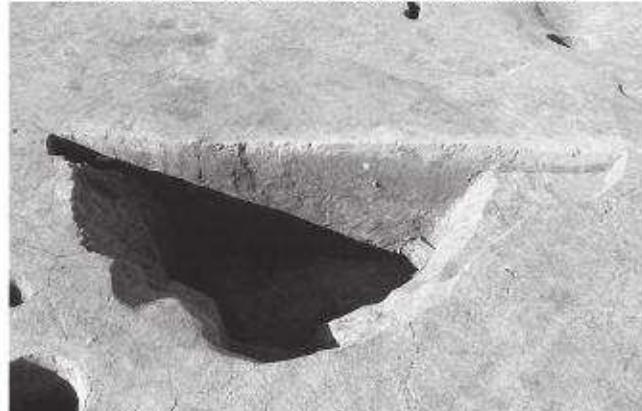
b B区SK29土層断面（南東から）



c B区SK25・SK29・SX4遺物出土状況（東から）



d B区SK25・SK29・SX4完掘（東から）



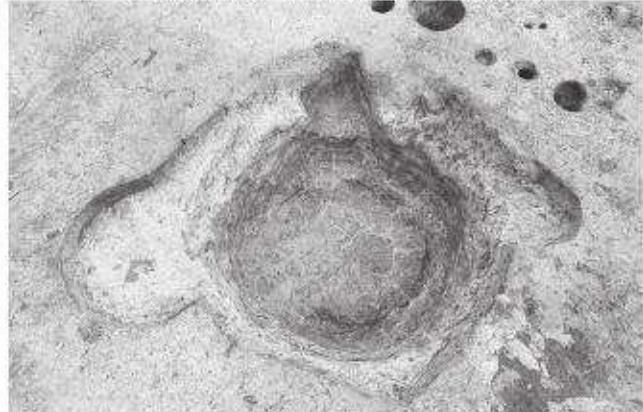
e B区SK23・SK28土層断面（南東から）



f B区SK28柄杓・土器出土状況（南東から）



g B区SK28籠検出状況（北西から）

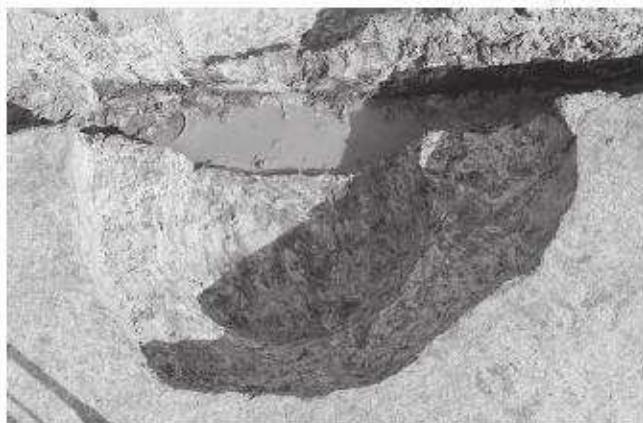


h B区SK23・SK28完掘（北西から）

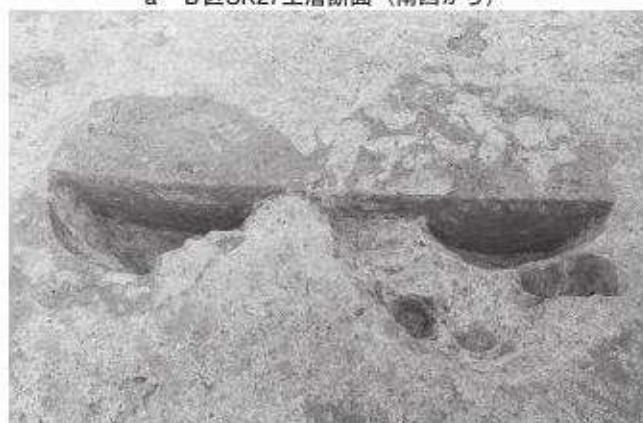
図版12



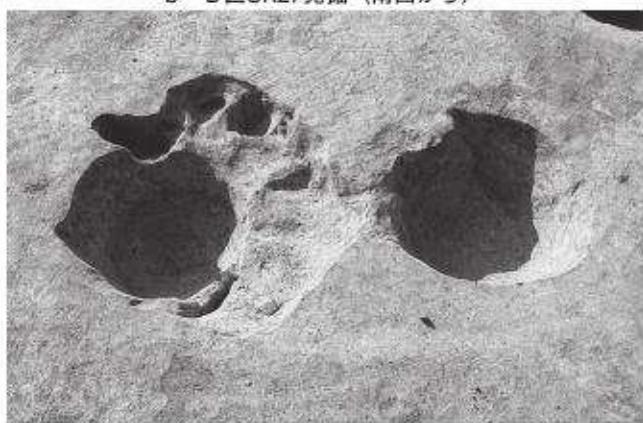
a B区SK27土層断面（南西から）



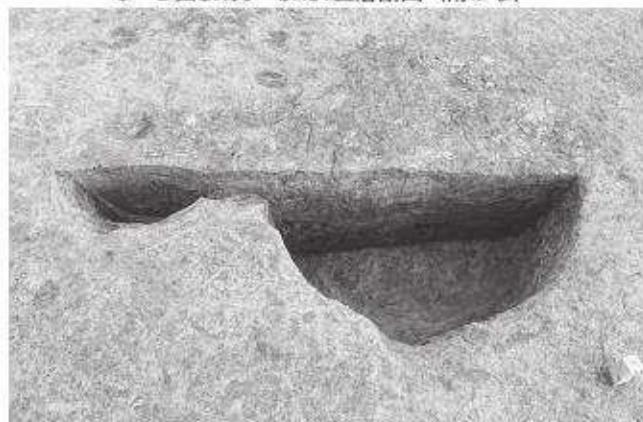
b B区SK27完掘（南西から）



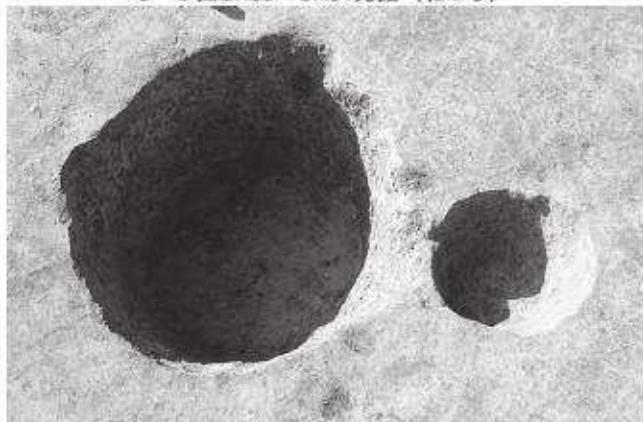
c B区SK30・SK31土層断面（南から）



d B区SK30・SK31完掘（北から）



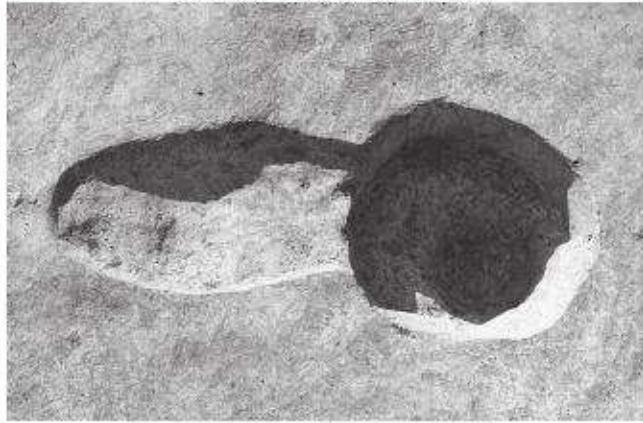
e B区SK32・SK33土層断面（西から）



f B区SK32・SK33完掘（東から）



g B区SK34・SK35土層断面（南から）



h B区SK34・SK35完掘（北から）

図版13



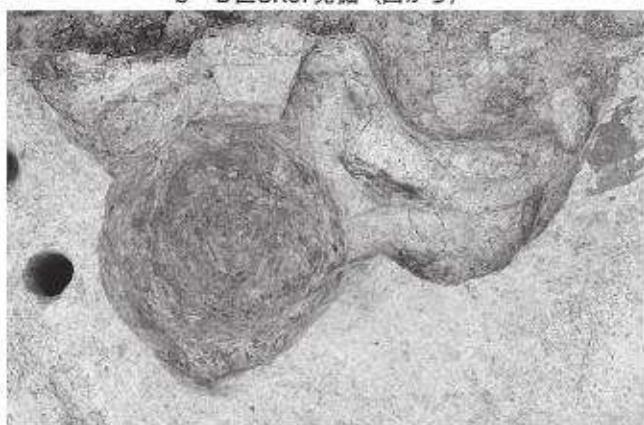
a B区SK37土層断面 (西から)



b B区SK37完掘 (西から)



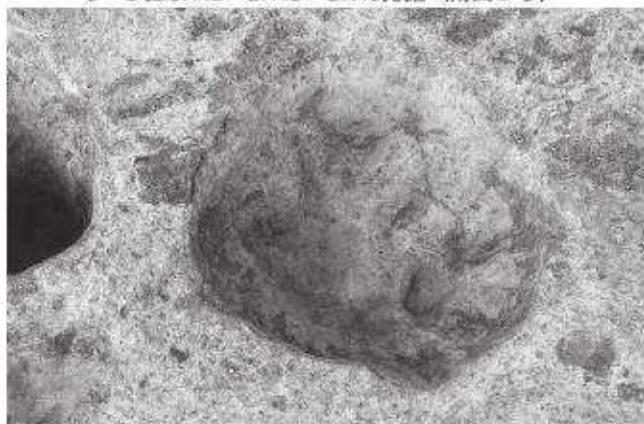
c B区SK42・SK43土層断面 (南西から)



d B区SK42・SK43・SK45完掘 (南西から)



e B区SK44土層断面 (南から)



f B区SK44完掘 (南から)



g B区SK48土層断面 (南から)

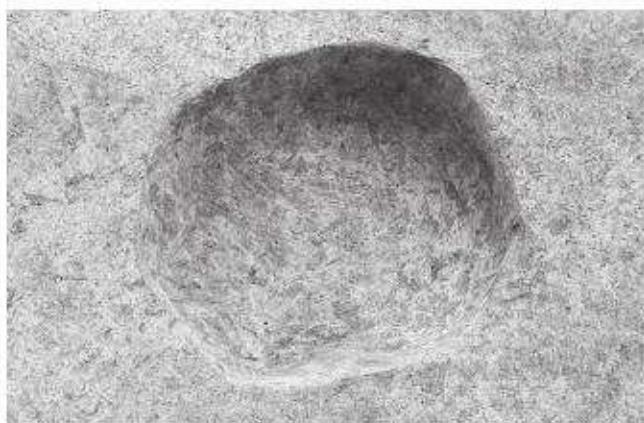


h B区SK48完掘 (南から)

図版14



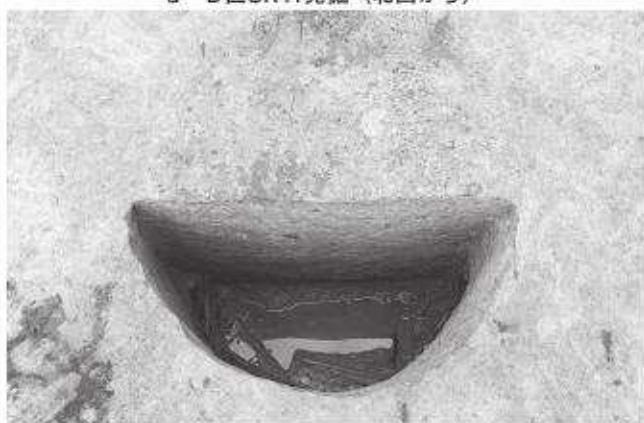
a B区SK47土層断面（南から）



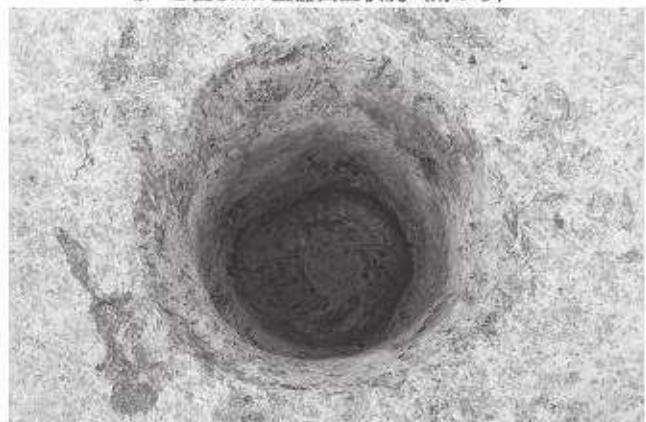
d B区SK41完掘（北西から）



b B区SK47土器出土状況（南から）



e B区SK50土層断面（北東から）



c B区SK47完掘（南から）



f B区SK50完掘（北東から）



g B区SD1完掘（北西から）



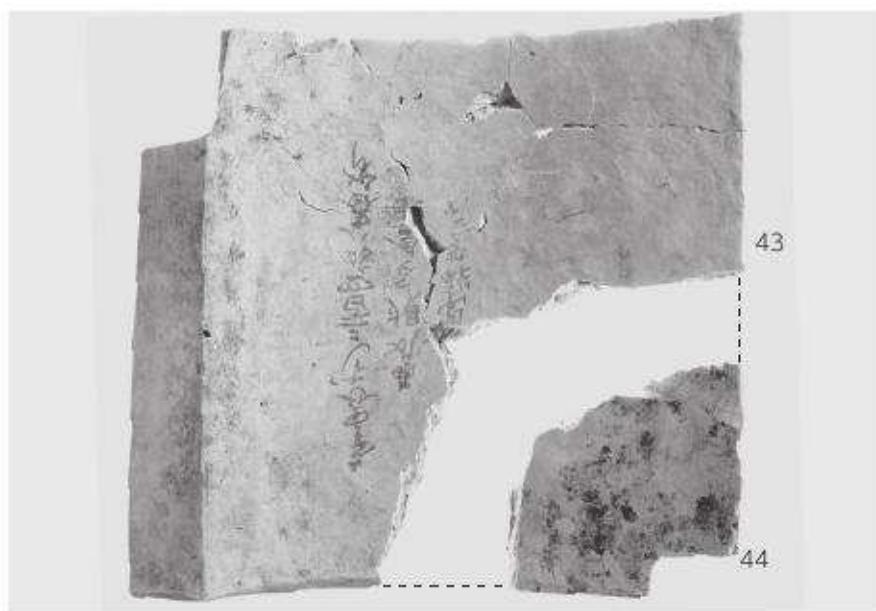
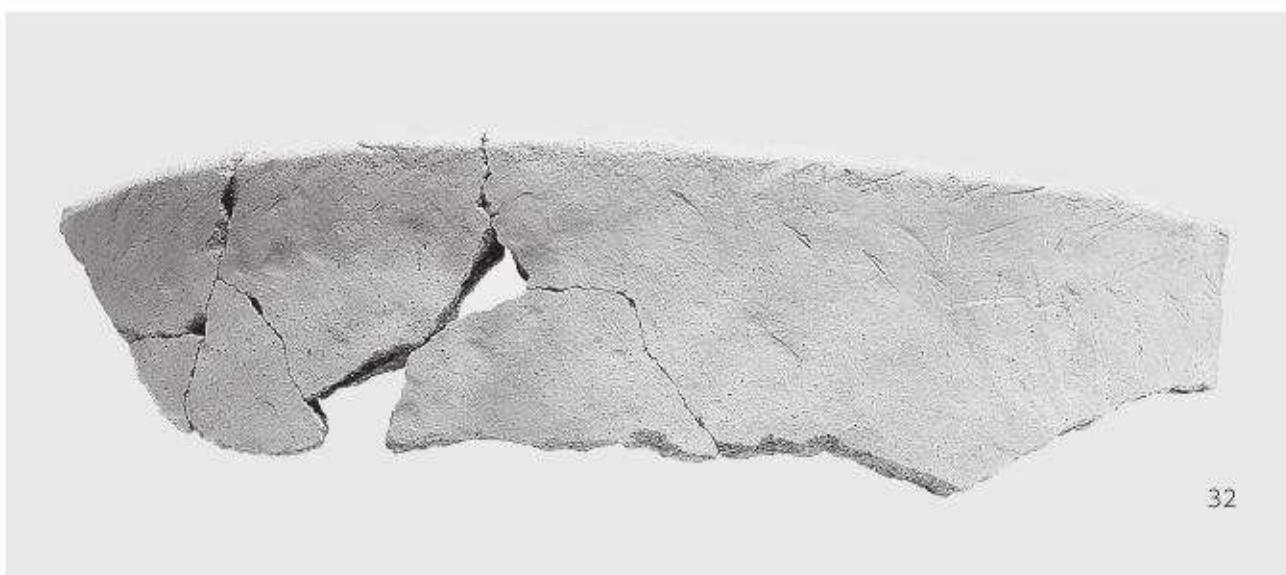
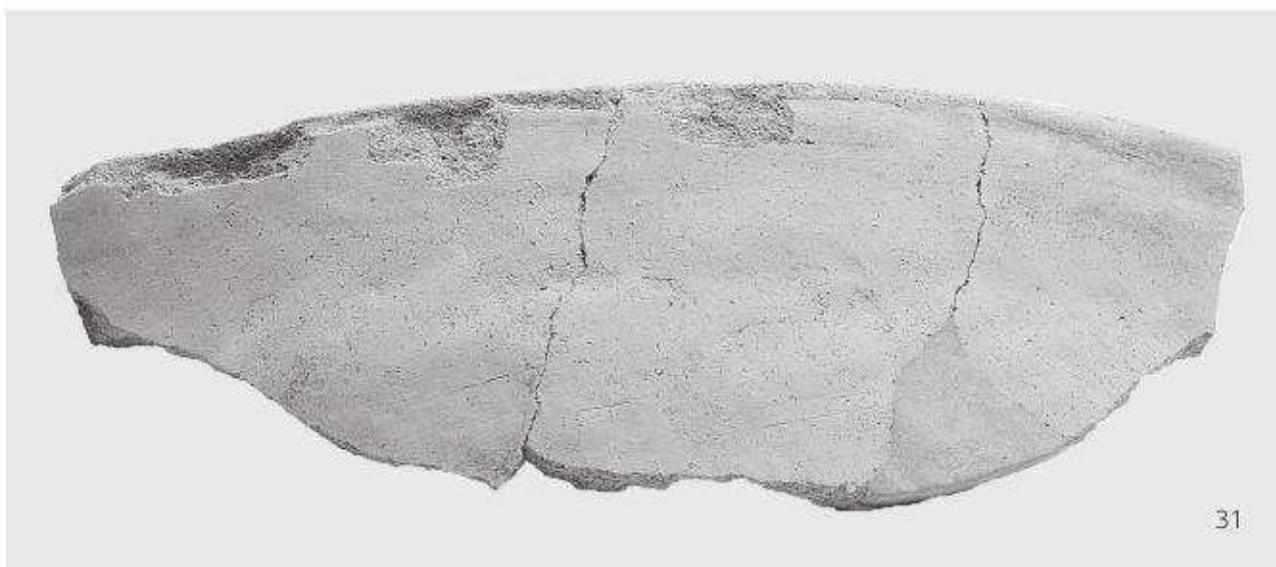
h B区SX11遺物出土状況（北東から）

図版15

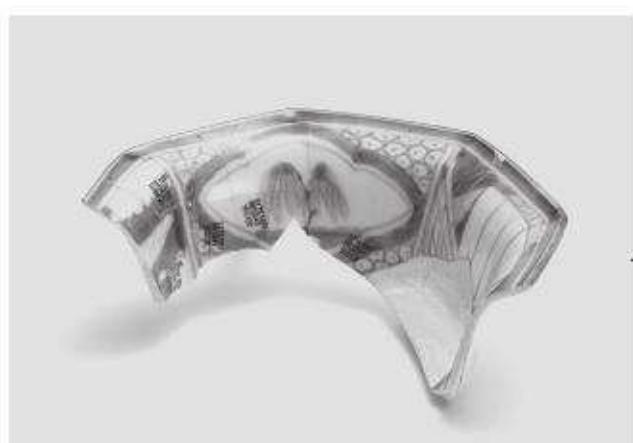
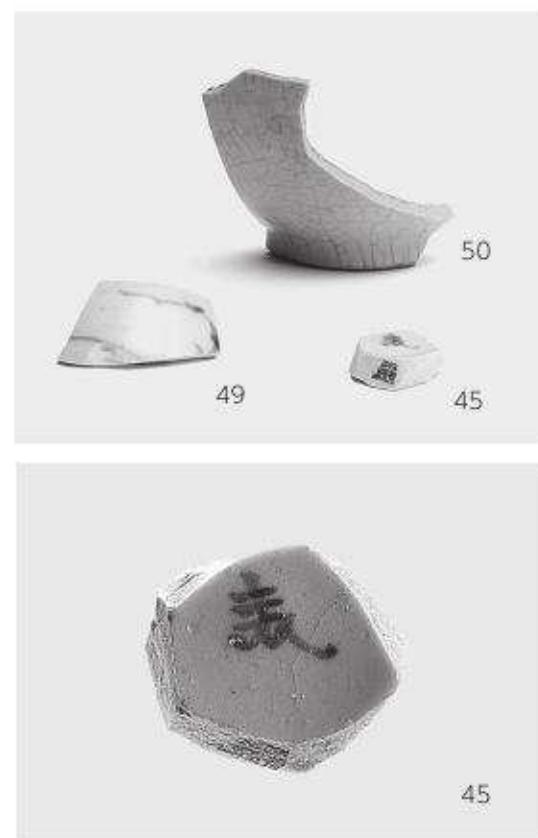


図版 16

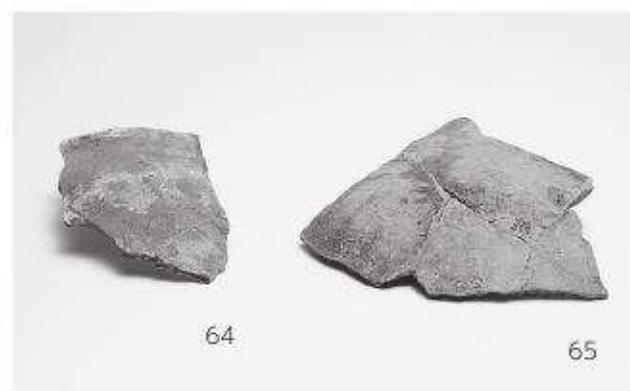
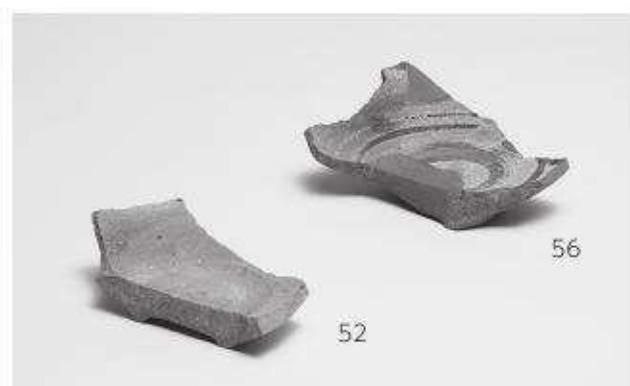




図版 18



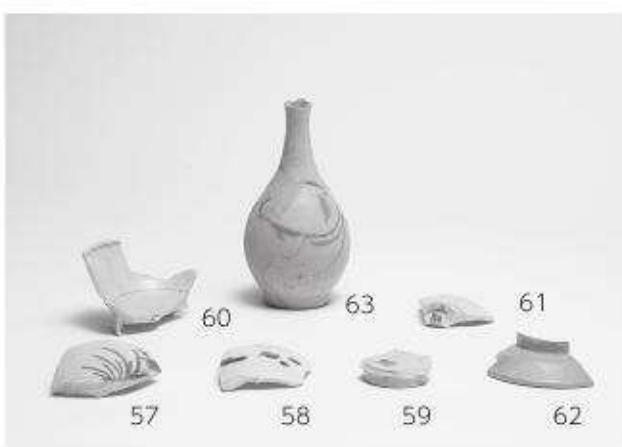
図版19



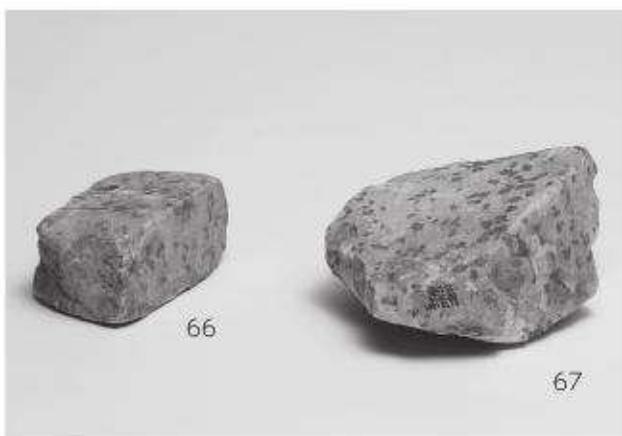
図版20



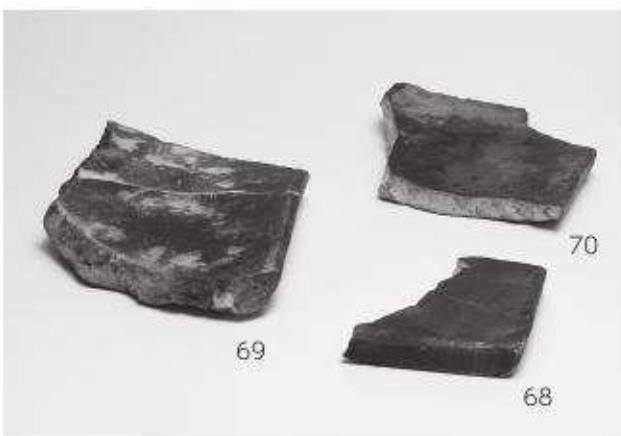
54



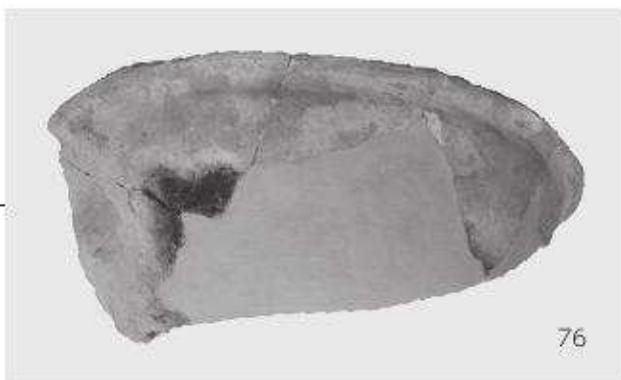
62



67



70



76

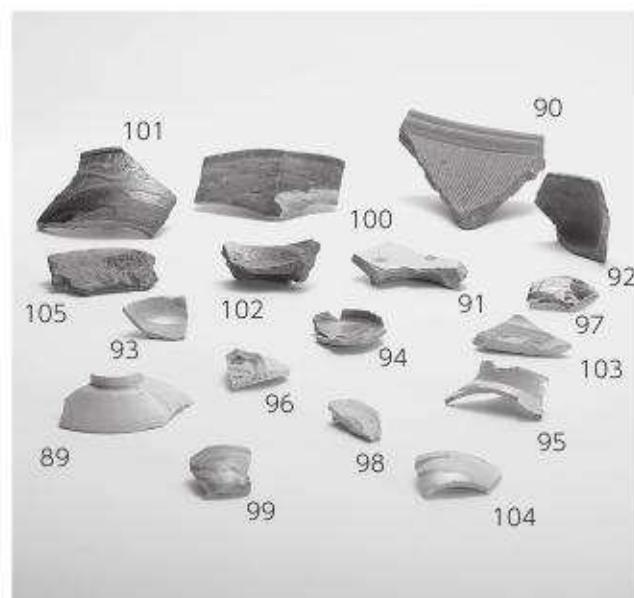
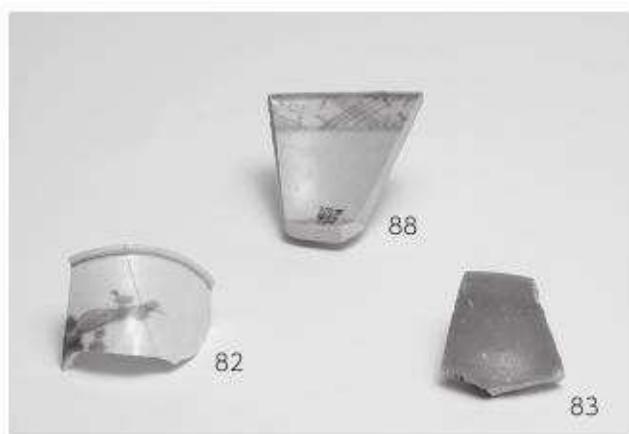
図版21



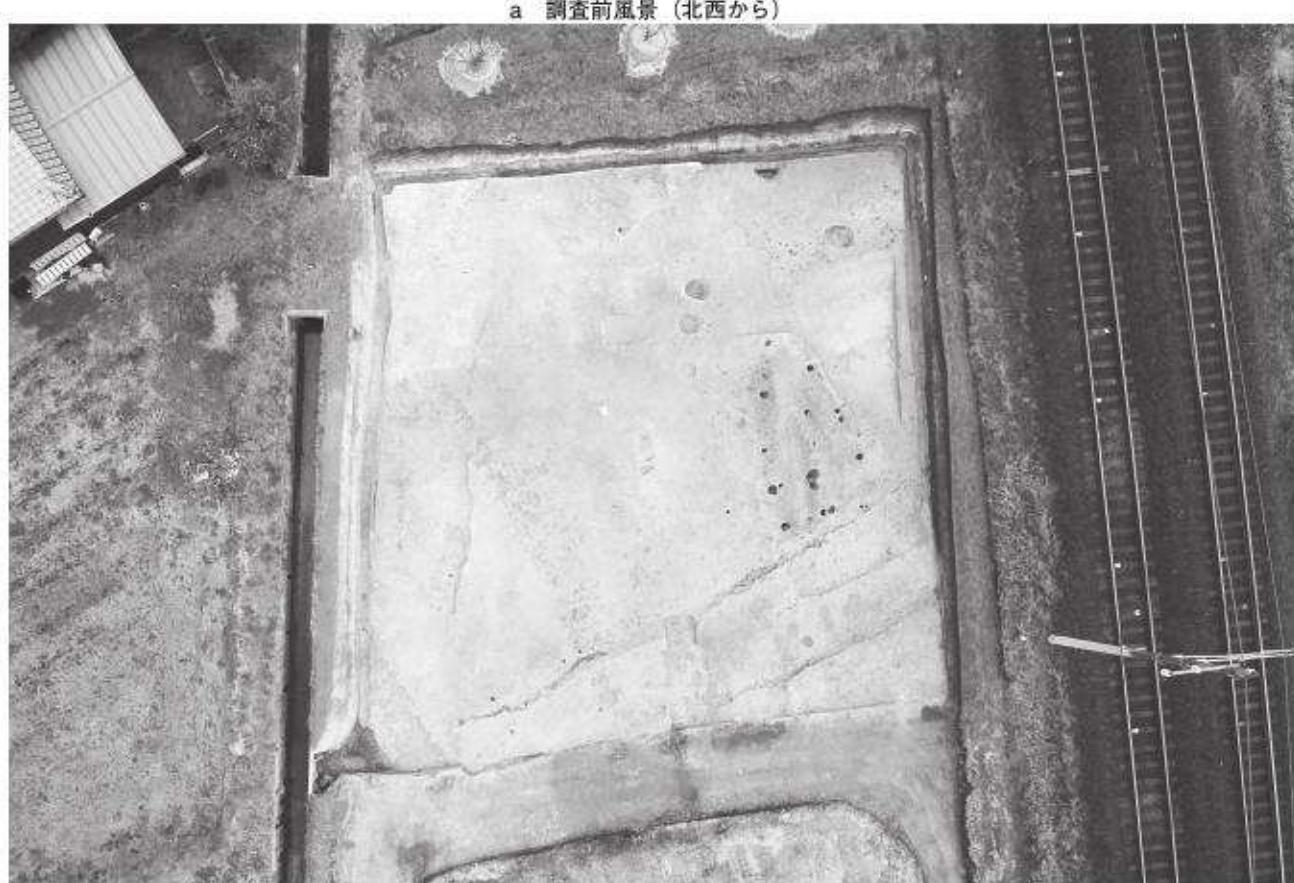
図版22



図版23



図版24

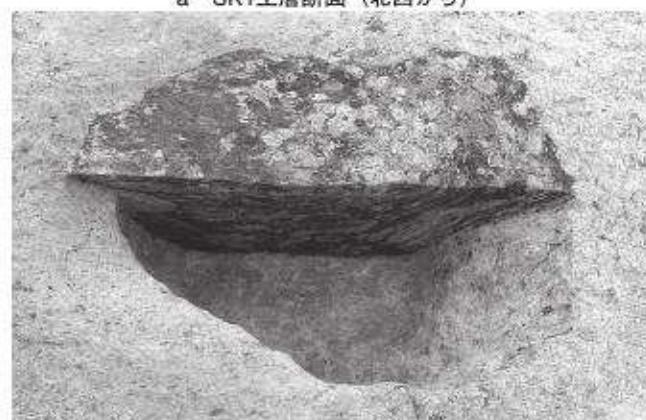




a SK1土層断面（北西から）



b SK1完掘（北西から）



c SK3土層断面（北西から）



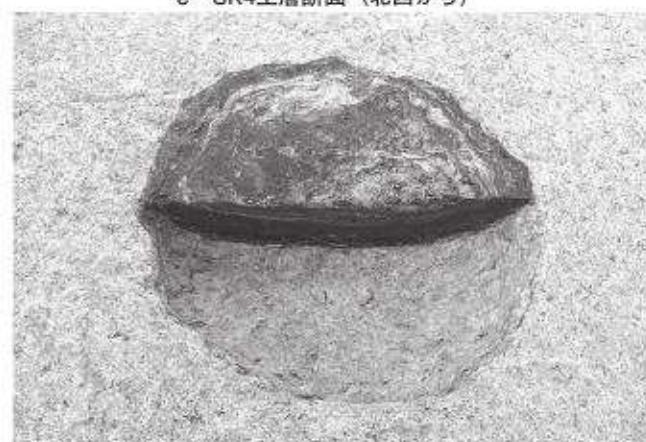
d SK3完掘（北西から）



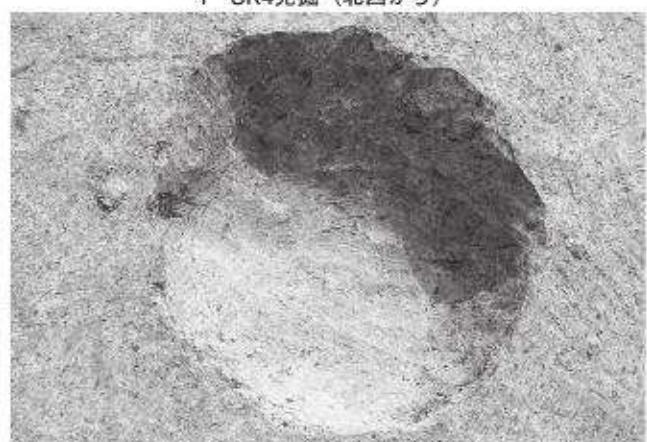
e SK4土層断面（北西から）



f SK4完掘（北西から）



g SK5土層断面（北西から）



h SK5完掘（北西から）

図版26



a SK2土層断面（南西から）



d SK6土層断面（南西から）



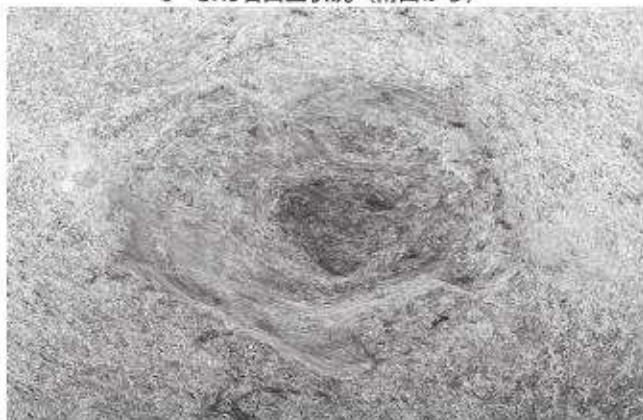
b SK2遺物出土状況（南西から）



e SK6石出土状況（南西から）



c SK2完掘（北西から）



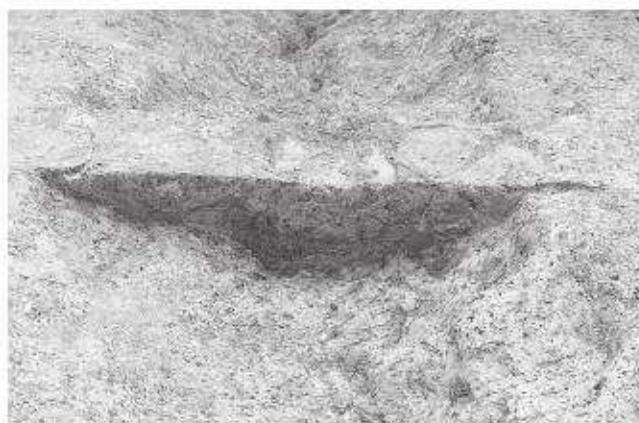
f SK6完掘（南西から）



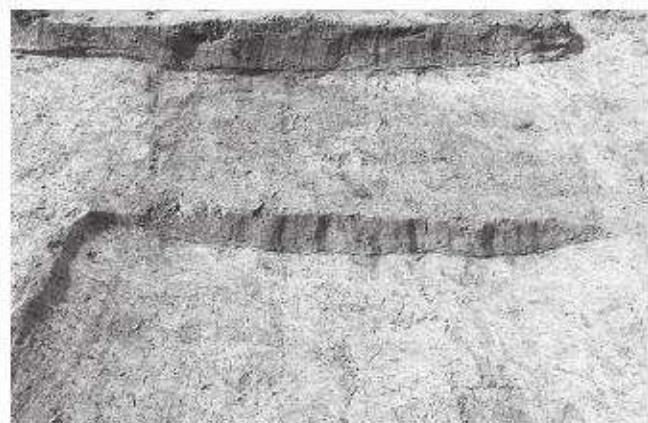
g SD1土層断面（南から）



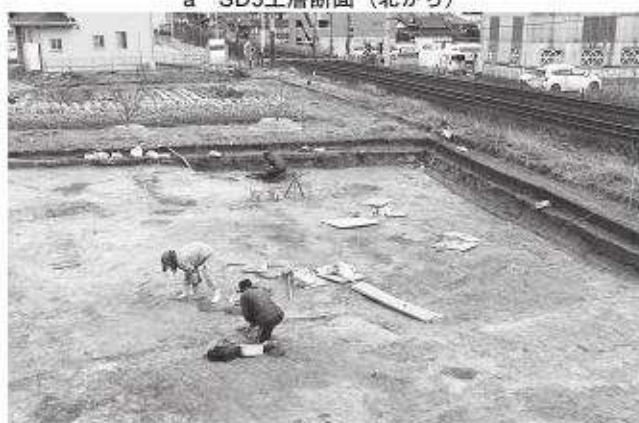
h SD3土層断面（南東から）



a SD5土層断面（北から）



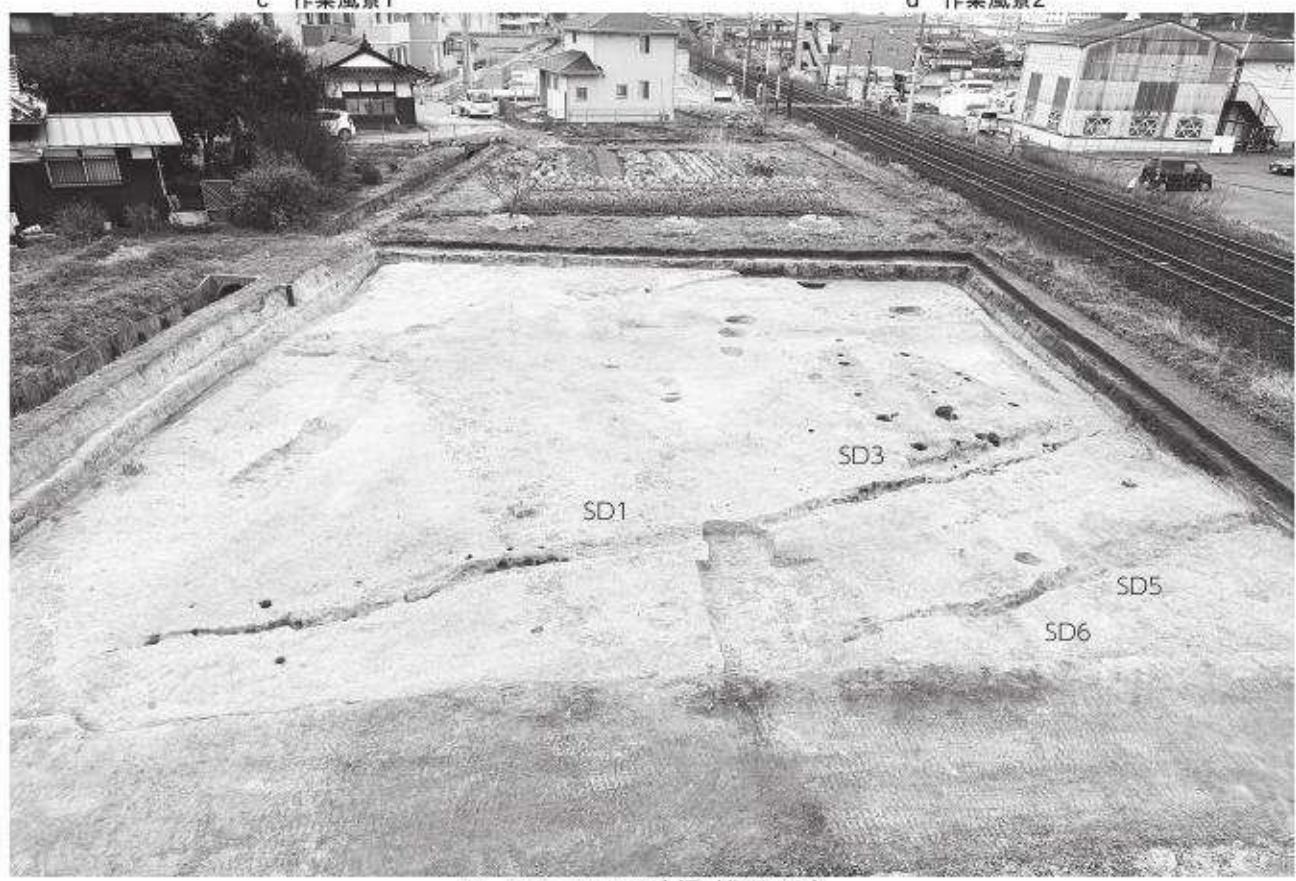
b SD6土層断面（南東から）



c 作業風景1



d 作業風景2



e SD1・3・5・6完掘（北西から）

図版28



報 告 書 抄 錄

ふりがな	よこたさんごういせき・いちじいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	横田3号遺跡・市地遺跡発掘調査報告書							
副書名	—龍王小学校新設事業—							
巻次								
シリーズ名	東広島市教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第57集							
編著者名	植田 広・吉田由弥・日浦裕子・盛 菜つみ							
編集機関	東広島市教育委員会（東広島市出土文化財管理センター）							
所在地	〒739-2201 広島県東広島市河内町中河内651番7号 TEL 082-420-7890							
発行機関	東広島市教育委員会							
所在地	〒739-8601 広島県東広島市西条栄町8番29号							
発行年月日	西暦2017年6月30日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横田3号遺跡	ひがしひろしまし 東広島市 まいじょうとうひやうし 西条町寺家	34212	K 1001	34° 26' 1"	132° 43' 47"	20151001 ～ 20160210	1,080	学校建設
市地遺跡	ひがしひろしまし 東広島市 まいじょうとうひやうし 西条町寺家	34212	K 1000	34° 25' 43"	132° 43' 54"	20160106 ～ 20160315	500	学校建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
横田3号遺跡	集落跡 包蔵地	中世～近代	掘立柱建物跡1棟 井戸10基 土坑34基 溝状遺構1条 性格不明遺構2基 ピット	土師質土器 瓦質土器 陶磁器 木製品 石製品 金属製品				
市地遺跡	集落跡 包蔵地	中世～近世	土坑6基 溝状遺構4条 ピット	土師質土器 陶磁器 木製品 石製品 古銭				

東広島市教育委員会文化財調査報告書第57集

横田3号遺跡・市地遺跡発掘調査報告書

発行日 平成29（2017）年6月30日

編集・発行 東広島市教育委員会

〒739-8601 広島県東広島市西条栄町8番29号

印 刷 大東印刷株式会社

〒723-0052 広島県三原市皆実4丁目5-30